
そのお見合いは、危険です。

藤谷 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そのお見合いは、危険です。

【Nコード】

N4796W

【作者名】

藤谷 要

【あらすじ】

断られる前提で申し込んだお見合いが、佳子の想像を裏切る方向へと進んでしまう。お見合いを申し込んだ相手・五月春人との関係は、何事もなくすぐに終わるはずだったのに。

大好きだった父の死。そして佳子に力を貸す謎の鬼、如月。一族が抱えた闇の真実を知ろうとした佳子が迎える結末とは。

この作品は、前作「狭間の少年」の主人公の親世代の話になります。単品でもお読みいただけます。

序章（前書き）

連載始めました。よろしくお願いします。

序章

休日の昼間、一上佳子いちがみ よしこが家で留守番中に一本の電話が掛かって来た。誰だろうと思ひ、電話を取ると、それは母の実家へ訪れていた父からだった。

何時になく声が弾んで楽しそうな父に、佳子もつられて嬉しくなつた。

留守中に変わりはなかったかと様子を尋ねられて、佳子は何もないわと答えた。

佳子は高校3年生で、卒業までもうすぐと云う2月末では、家の中で特に何もすることはなかった。

あとは卒業式を迎えるだけ。

進学予定もない佳子は、卒業後の予定は未定だった。

進学は経済的に無理そうだった。

外へ働くこと自体に母が良い顔をしないので、積極的に就職活動も出来ず、結局どこにも採用先が決まっていなかった。

その代わり、母には高校卒業後にお見合いを勧められていた。

女性は結婚して子供を産むことが仕事 というのが母の考えだった。母の勧める縁談に全く乗り気ではなかったが、高校を卒業してしまえば、学生と云う身分を盾に結婚の反対も出来ない。

きつと言われるままにお見合いをして入籍してしまうのだろうかと、佳子は自分の行く末を悲観していた。

父は佳子の好きにすれば良いと言って庇ってはくれるが、父に甘えていつまでも自分の主張を通しては、父の立場が悪くなって行くだけだと分かっていた。

憂鬱な最近だったが、父の明るい声に少し気分が上昇する。

「佳子に会わせたい人がいるんだ」

父はそう言っていた。

「誰なの？」と尋ねると、父はその人と会うまでのお楽しみとはぐらかされてしまった。

そして、今夜には帰るからと、父は最後まで明るい口調で会話して電話が終わった。

早く夜になればいいのに。

佳子は父の帰宅を待ちわびた。

今日は母も人と会うからと外出していた。母の不在は大歓迎だった。口うるさく自分を支配的な母より、寛容で優しい父と一緒に過ごす時間の方が好きだった。

やがて日が暮れて、母が女中と帰宅してきた。

母と静かに夕飯を食べ終えて、父の運転する車が敷地に入ってくる音を自分の部屋で耳を澄ませて待った。

そんな佳子の耳に入ってきたのは、乗用車の車輪の音ではなく、電話の呼び鈴だった。

それは警察から父の交通事故を知らせる電話だった。

取る物も取り敢えず、警察から伝えられた病院へ母たちと向かった。そこで、変わり果てた父の姿と対面した。

山道を運転中、ハンドル操作を誤ったのか、ガードレールを突き破って、崖から車ごと下へ転落した。そして、ガソリンが漏れて車が炎上したようだ、と、淡々と警察は説明をしてくれた。

焼け焦げた無残な父の死に顔。

これは何かの間違いだ。父が交通事故で亡くなるなんて。

しかもこんな悲惨な最期だなんて。

佳子は堰を切ったように父に縋って号泣した。

取り乱した自分の傍で、母は「みっともない泣き真似は止めなさい」と冷静だった。

この時の母のいつもと変わらぬ横顔を、今でも忘れられない。

何故、どうして。

その問いは何度も頭の中を巡回した。

現実を受け入れられずに、自問する日々。

後にその答えを佳子は予期せぬところで知ることとなる。

色よい返事

それは、庭に植えてある金木犀が満開の頃であった。

風と共に仄かな花の香りが、二人の男女のもとまで漂ってくる。

夏の季節が過ぎて、すっかり秋らしくなったこの頃では、風が幾分か冷たさを帯びてきていたが、今日のような晴天の中では日差しが体を暖かくしてくれた。

「正さん、今なんて言ったの？」

—上佳子は目の前にいる男 いちがみ よしこ 坂井正 さかいただしに目を見開いて聞き返した。

正と呼ばれた男は、佳子よりも一回り以上も年上で、彼女が産まれる以前からずっとこの家に仕えてきた者だった。

背恰好は大きめな女の人と同じくらいで、男の人の割には華奢であった。

顔は優しそうだが特に特徴もないため、静かにしているとあまり存在感がなかった。

見た目はぱっとしない家人だったが、父の代から仕えてくれた正に佳子は信頼を置いていた。

佳子はというと、伸ばした長い髪は背中に垂らして、着ている服もトレーナーと高校時代のジャージのズボンという非常に色気がないものだった。

いつもはコンタクトを装着しているのだが、ひと月ほど前に洗面所でうっかり排水溝へと流してしまったために、古臭いデザインの眼鏡を使用している。

佳子と正がいる場所は、佳子が住んでいる屋敷の中の、居間に面した渡り廊下だった。

同じ敷地内に建っている離れの屋敷から庭を通って正がやってきて、外から鍵の掛かっている廊下の戸を開けると、中にいた佳子に声をかけてきたのだ。そして、歩いて近づいてきた佳子に、正は廊下へ腰を下ろして、先ほどこう言ったのだ。

「五月家から了承の返事が来たと申し上げたのです…」

答える正の声は、どこか途方にくれていた。

その家人の様子を見守りながら、佳子は頬に手を添えて首を傾けた。その際に、背中に流していた彼女の長い黒髪が、数房揺れて顔に垂れてきた。

くせのない真っ直ぐな細い髪は、彼女の頬を優しく撫でた。

「…そうなの。それは困ったわね」

彼の言葉に鷹揚に呟く。その様子は、どこか他人事のようにも見えない。

佳子の命令で、釣書と一緒に彼女の写真を添えて五月家にお見合いを申し込んだのは、ちょうど一週間前。

通常ならば、申し込んだお見合いが相手にも気に入られて、話が進むのはおめでたい話のはずだ。

しかし、佳子には事情が違った。

断られるのを前提で申し込んだのである。

お見合いを申し込んだ五月家は、一上家とは犬猿の仲。

五月家とは同郷になるが、顔を会わせれば嫌みの応酬と言う、非常に不仲であった。

佳子がお見合いを申し込んだ相手は、その五月家の四男坊。
現在高校三年生の18歳。
当の佳子は、3歳年上の21歳であった。

相手はようやく結婚できる年齢になった若者である。

しかも、在学中である。

本人にしてみれば、結婚なんてまだ先の話だろうし、お見合いの相手は一上家の人間である。

しかも3つも年上。

「ふざけるな！」と激怒されて、一蹴されるものだと思っていた。

ところが、蓋を開けてみれば、五月家から会いましょうと了承の返事が来たというのだ。

申し込んだ本人とは言え、事の成り行きに正直驚いていた。
お見合いが進展するなど、予想外のことだった。

「どっしょっしょっしょ？」

佳子の呟く声に正は反応する。

「とりあえず、会ってみるしかないんじゃないですか？」

正は至極まともな回答をした。

お見合いを申し込んだのは、一上家である。
断る立場にはない。

「…そうね、会っしかないわよね」

佳子は少し考えたのち、面倒くさそうに答えた。

一体、どういふ事情で五月家がお見合いの話を進めようと思ったにせよ、場を設けて顔合わせはしなくてはならない。どうせ断られるのに違いないのに、わざわざお金を払ってまで会いに行かなくてはいけないなんて…。自分が申し込んだことを棚に上げると、佳子は今月の生活費の残高を思い出して、ため息をついた。

雨の日の再会

雨の日は嫌いじゃない。

雨音が周りの余計な騒音を遮ってくれて、傘の中だけ自分の世界のような気がするから。

一上佳子は傘を差して、綺麗に舗装された歩道を歩いていた。傘に手を添える左手首には、スーパーの袋がぶら下がっている。

レジのパート勤めを終えて、通い慣れた帰路の途中だった。

日が沈みかけて、薄暗い街中。

あいにくの天気のせいか、行き交う歩行者の数は少ない。

ガードレールの脇の車道を次々と通り過ぎる車は、前照灯を点けて走っていた。

空間が明かりに照らされて、車が通り過ぎる一瞬だけ地面に向けて降り注ぐ雨の姿をとらえることができる。

雨の勢いは比較的強く、排水溝に雨水が流れ込んでいるが、窪んだアスファルトの表面には、所々水溜まりが出来ていた。

雨の日は嫌いじゃない。

でも、歩道の脇を傍若無人に走る車は嫌い。

路肩側にあった大きな水溜まりの上を、減速もせず一台の車が佳子の脇を通り抜けていく。

車輪によって飛び散る大量の水しぶき。

それは運悪く側にいた佳子の方へと飛んできた。

ぼんやりと歩いていた佳子が気付いた時には、着ていた服に泥水がかけられて、主に下半身のスカート部分が酷いことになっていた。

服を汚した犯人である車の後ろ姿を睨みつけるが、そんな佳子に気

付かずに走り去ってゆく。
小さくなってゆく尾灯を唾然としてしばらく見つめていた。

「あー、もう！」

苛立ちを隠さずに声を上げると、それに対して応えてくれるモノがいた。

「ダイジヨウブ？」

低く籠ったような、その声は佳子の足元から聞こえてきた。

正確には佳子の足の下の地面から。

佳子の黒い影が、光の加減を無視して流動的にモゾモゾと動いた。

「もう家に帰るだけだから、大丈夫よ」

佳子は返事をして、再び歩き始めた。

佳子がイライラとして不機嫌なままでいると、側にいるモノたちが不安になる。

意識して気分を持ちなおす。

家に帰ってすぐに服を着替えれば、布が素肌に張り付く気持ち悪い感じともおさらばできる。

それまでの辛抱だ。

スカートの汚れがきちんと落ちるか気になったが、彼らに何とかしてもらおう。

佳子の頭の中には、家事を手伝ってくれるモノたちの姿が浮かんでいた。

現世の理を外れた、普通なら存在しないものとして目に映らない彼ら。

妖怪、物の怪、妖。あやかし

様々な呼び名が彼らにはあるが、それが見える自分は一体何者なのだろうと思う時がある。

佳子の家は、小さな山の中腹にある。

公道から続く山道は、家へと続くためのものである。

アスファルト舗装された道から砂利が敷き詰められた道へと変わってゆく。

黙って歩いていると、後ろから急に「おい」と声を掛けられた。

佳子は立ち止まり、後ろを振り向くと、彼女と同じように傘を差した男が一人立っている。

紺色の傘は、その男の首から上を隠していた。

「誰ですか？」

突然現れた男に警戒をしつつ、佳子が尋ねる。

男は傘を持ち上げて、自分の顔を佳子の方へと見せた。

「お久しぶり」

何か含みのある楽しいげな表情を浮かべながら、眼差しを佳子へ向け、若い男は挨拶をした。

暗い中でも分かる程、肌の色が白く、涼しげな奥二重の目元、そして恐ろしいほど整った顔をしている。

適当に伸ばした艶のある髪は、後ろで一つに束ねられているが、顎まで伸びた前髪が頬にかかっている。

長袖のTシャツにジーパンと云うラフな格好は、どこにでもいる人間と変わりはない。

彼の本性もまた、人ではないけれども。

「如月きげんだったの」

見知った顔に佳子は驚いた声を上げて、男の名前を呼んだ。そして、まじまじと“如月”と呼んだ男の姿を見つめる。

「久しぶり。相変わらず、神出鬼没ね」

佳子は苦笑を浮かべながら、如月に話しかける。

如月は破顔して佳子に近づいてくる。

端正な顔は表情を崩しても、見応えがある。

久しぶりに会ったこともあり、思わず彼の姿に佳子が見とれると、それに気付いた如月が片手を佳子の頬へ伸ばした。

頬に触れた彼の手は、一瞬ドキリとするくらい、冷たかった。

「そんなに見つめられると困るな。俺に会えたのがそんなに嬉しかった？」

フェロモン垂れ流しの、艶やかな笑みを浮かべて、佳子の顔を覗き見る。

それでなくても心臓に悪い美貌なのに、意図的に色気まで付けられると、恋愛経験の無い佳子には太刀打ちできない。

言われた科白も、佳子を慌てさせるには十分だった。

「な、何言ってるの？」

人をからかうのは止めて！」

思わず頬に触られた手を払いのけると、赤面しているのがばれないように佳子は如月から顔を背けた。

「まったく、顔の良い男は自意識過剰なんだから」

ぶつぶつと文句を言うと、クスリと笑う声が聞こえる。

「お褒めに預かり光栄だね」

彼が可笑しそうに佳子へ切り返す。

如月は人をからかうのが大好きなのだ。

彼に会うのは久しぶりだったから、うつかりしていた。

落ち着かない気持ちを上手く誤魔化しつつ、佳子は後ろを振り返る。

「とりあえず、立ち話もなんだから、家に来ない？」

「親御さん、いるんじゃないの？」

「大丈夫、実家へ帰ったから」

「ん？」

「喧嘩したら出て行ったの」

「そうなんだ」

佳子と如月は、並んで歩き始めた。

佳子は現在、広い平屋の屋敷に一人暮らしだ。

以前は、母親と女中との三人暮らしだったが、今回のお見合いの件で激怒した母親と喧嘩したら、女中を引き連れて実家へ帰ってしまったのだ。

人ではない如月を家へ招いても、咎める者は誰もいない。

佳子たちが自宅に着いた時は、すっかり辺りは暗くなっていた。佳子しか住んでいない屋敷の中は無人のはずだが、屋敷の中に明かりが灯っていた。

佳子が玄関の鍵を開けて、引き戸を開ける。
軒先で二人とも傘を畳む。

「おかえりなさいませ〜」

甲高い声が屋敷の奥から聞こえてくる。
声のした方からペタペタと足音を立てて、玄関に向かってくる存在があった。

佳子たちのいる玄関先に現れたそれは、ボロボロの薄汚れた大きな布を頭から足元まで被ったモノであった。

人のように手足が生えていて、二本足で立っている。
大きさは子供くらいだった。

顔と思われる部分には丸い二つの穴が空いている。

隙間から不気味に光る瞳がたまに見えた。

その右手には料理で使うおたまが握られていた。

「ただいま、シロ」

佳子は“シロ”と呼んだ妖怪に挨拶をする。土間にある傘立てに使用していた傘を置くと、靴を脱いで屋敷に上がった。

そんな佳子の姿を、下駄箱のわずかな隙間の暗闇の中から覗いている瞳が複数あった。

玄関から真っ直ぐ廊下が続いており、先に進むと台所がある。

廊下の左手にはガラスの引き戸があり、居間になっている。

右手には仏間の部屋とトイレがある。

台所で何か作っているのか、ここまで食べ物匂いが漂っていた。佳子はシロにスーパーの袋を渡した。

「お邪魔するね」

如月も挨拶して佳子に続く。

シロは廊下の先にある台所へ消えていった。

佳子は歩いて居間に入ると、後ろにいる如月に「ここで適当に寛いでいて」と声を掛けて、隣にある自分の部屋へ移動した。居間の両側に部屋があり、その一つを自室として使っていた。

部屋の戸を閉めて、自分の服を見下ろす。

汚れたのはスカートだけかと思いきや、上着の裾の部分にも汚れがついていた。

佳子はすぐに着ていた衣類を脱ぎ始める。

上下共に脱ぎ捨てて下着のみになると、ダンスから新しい服を取り出している時に、さっき閉めたはずの部屋の戸が開いた。

「冷蔵庫に飲み物とか…」

声もかけずに戸を開け放ったのは、如月だった。

下着姿の佳子の格好を見て、言いかけた科白を飲み込んだ。

予想もしない出来ごとに、思わず佳子は頭が真っ白になり、固まった。

「あー、ごめんね」

如月は居心地の悪そうな表情を浮かべて視線を佳子から外すと、す

ぐに戸を閉めて姿を消した。

佳子は顔から火が出るくらい恥ずかしかった。
混乱のあまり、声も出ない。

とんでもない姿を見られた！

しかも、今日に限って適当な下着のチョイス。

色気のかけらもない、地味なものだ。

上下もお揃いじゃないし。

胸だつて貧層だし…。

ん？　なんで私がそんなことを気にしなくてはならないのだ。

もとはと云えば、非常識な彼のせいで恥ずかしい目にあつてしまつたのに。

佳子の頭にむくむくと怒りの感情が芽生えてきた。

「ノックぐらいしてよ！」

若干のブランクの後に正気に戻った佳子が、如月へ文句を言ったが、戸の向こうに消えた彼に聞こえていたのかは定かではない。

とりあえず乾杯

不機嫌な佳子とは反対に如月は楽しそうだ。

居間にいる二人は、それぞれ食卓に向き合つように座っている。

正面にいる如月から視線をずらして、俯き加減で正座姿の佳子。

一方、あぐらをかいて肘を食卓の上に置いて頬杖をついている如月は、非常に寛ぎながら、佳子の顔を観察していた。

シロが用意した夕飯を、先ほど二人は食べ終えていた。

佳子に声を掛けられたシロがやってきて、二人が使った食器を台所へ下げて行った。

居間と台所を繋ぐ戸が、きちんと閉められている。

戸を隔てた台所の中から、シロ以外にも複数の怪しげな気配がしている。

食器をいじる音とペチャペチャと何かを舐める音。

ケケケと楽しげに笑う声もする。

「ご飯って、いつもあいつらに作らせているの？」

台所から聞こえてくる音に聞き耳を立てつつ、如月が尋ねてきた。

「作っているのはシロ一人よ。他のモノは人間が食べられるような物は作れなかったの。」

「ふーん。」

シロ以外は、虫とか雑草とか、自分たちが食べる物を悪気なく平気で入れてくる。

ゲテモノスープを思い出して、眉間に皺が寄った。

母が家を出たのは良いが、家事をしてくれていた女中も一緒にいなくなっただので、全ての家の事を佳子が一人でしなくてはならなかった。

隣に住む正夫婦が何かと気を掛けてくれるが、あちらには就学前の男の子がいて、何かと手がかかる時期だった。

自分の都合でこういう状況に陥ったのだから、彼らの手をあまり煩わせるのは申し訳ない。

当然のことながら、学校の掃除や授業以外に家事は一切教えられたことがなかったため、全部手探りでやり始める。

食器を割るのはもちろんのこと、レンジ内で食べ物を爆発させたり、鍋を焦がしたりと失敗は徹底的にしてきた。

そんな悲惨な状況を陰で様子を見ていたモノたちが、突っ込みをしつつ、腹を抱えて自分を笑い物にしていた。

腹が立った佳子が、「お前たちなら出来ると言うわけ？」と挑発してやらせてみたところ、自分より上手くて余計にむかついたのだった。

そこで佳子は気付いた。

彼らにやらせればいいじゃない！

良いことを思いついたと、気付いた佳子の行動は早かった。

彼らの中で誰が一番料理上手か調べてみた。

その結果、人間が食べられる物を作ることができたのはシロのみ。もともとシロは、台所で使われていた布巾が年を経て妖怪になったモノだった。

掃除と洗濯については、料理よりは簡単だったので、他のモノでもできそうだった。

彼らが何でも食べることを知っていた佳子は、報酬に残飯を提示し

たところ、上手い具合に交渉が成立した。
生ゴミも出ないし、一石二鳥であった。

「相変わらず、好かれているよね。」

「ん？」

「術の類は使わないで、あいつらを従えているんだよね？」

「餌で釣って働いてもらっているだけよ？」

「それだけで言う事をきかせているんだから、すごいよね。」

「…そうなの？」

佳子は感心される意味が分からなかった。

佳子にとってみれば、物心ついた時から彼らと付き合っていて、当たり前なのやとりになっていたのだ。

彼らは佳子に概ね親切であった。

餌をあげれば、喜んで手伝いをしてくれる。

佳子に話しかける妖怪が人間に好意的なだけかと思っていたが、如月の話を聞くと、そうでもないらしいことが分かった。

母は妖怪を害虫のように毛嫌いしていたので論外だが、父も自分と同じように妖怪と仲が良さそうだったし、如月に指摘されるまで疑問に思ったことが無かった。

「料理だけじゃなくて、部屋の片付けも頼めばいいんじゃない？」

如月が意地の悪い顔をして言う。

それに対して、佳子は困った表情を浮かべる。

片付けだけは彼らに任せられないので、自分でやるしかなかった。基本的に収納や片付けが特に苦手だった佳子は、使った物をすぐに仕舞うことができずにいた。

以前は整然としていた屋敷の中が、物が出しっぱなしで散らかり始めて、所帯染みた家へと変貌を遂げていた。普段いる自室は特に酷い有様になっていた。

先ほど着替えを如月に見られてしまった佳子だったが、そのことで文句を言った時に、彼にこう言い返されてしまった。

「下着姿にはびっくりしたけど、部屋の汚さにはもっとびっくりした」と。

佳子の機嫌が再び急降下したのは言うまでもなく、冒頭のように「飯を食べ終わった後でも仏頂面をしていたのだ。

「いるものでも捨てられたりしたら大変だから、任せたくないのよ。」

どこに仕舞われたか分からなくなったりしても嫌だし、と付け足す。そうは言いつつも、きちんと出来ない自分が悲しいが。

「まあ、それは置いておいて。如月は何か用があつて私に会いに来たんじゃないの?」

居心地の悪さに耐えきれず、佳子は自分から話題を変えた。

「まあ、そうだけど。それよりも何か飲み物ないの?」

如月は台所の方へ首を向ける。

そのあからさまなしぐさは、冷蔵庫から何か持って来て欲しいと語

っていた。

「はいはい。ちょっと待ってて」

佳子はマイペースな如月に振り回されていると自覚しつつも、彼の為に立ちあがって台所にある冷蔵庫へと向かった。そこからビールを二つ取って、居間へと戻る。

「悪いけど直で飲んで」

グラスを出して注いで飲む方がいいのかもしれないが、後で洗うのがとても億劫だった。

基本、佳子は面倒くさがり屋である。

再び座り込むと、缶のプルタブを開ける。

お酒なんて一週間ぶりだ。

「乾杯しようよ」

如月が缶を開けてこちらに向かって持ち上げていた。佳子も真似をする。

「何について乾杯するのよ？」

「とりあえず、再会を祝って？」

「それじゃ、かんぱーい。」

コツンと軽く缶同士を当てる。そして、自分の口元へ缶を引き寄せ、飲み始めた。

彼と初めて会ったのは、家出したあの日の夜中。

制服姿で街を彷徨っていた佳子に声を掛けて来たのだ。過去に思いが触れた矢先、如月が口を開いた。

「お前が探していた男について、色々分かったよ」

言われた内容に息を飲んで、佳子が如月に視線を送ると、彼はすでに佳子の目を見据えていた。

その双眸は、佳子の心情の変化を一つも逃さず捕えているようだった。

緊張が体中に走るのが、自分でも分かった。

「本当？　すごいわね」

内心の動揺を抑えつつも、思わず出た感嘆の声は、いつもより興奮気味だったと思う。

如月は口の端を持ち上げて笑い、目を細めた。

「まあね」

「どつやっただの？」

「まあ、情報収集の賜物ってことで。」

如月はたいしたことのないように言うが、佳子には到底できない芸当である。

「もしかして、色仕掛けでも使ったの？」

いつもからかわれている仕返しとばかりに冗談を言ってみた。

「んー、まあ、違わなくはないけど、今回はこの目の力を使ったし、そんなにあくどいことはしてないよ?」

如月は片眼を瞑ってウインクした。

「そうなんだ…。」

色仕掛けを完全に否定しないあたり、色男たる所以か。

佳子はぎこちない笑みを浮かべるしかなかった。

如月の目は、不思議な力があるらしい。

相手の目を見つめて、強く念じながら命令すると、見つめられた人は思わず如月の言う通りに行動するらしい。

簡単な命令しかできないらしいが、軽い催眠状態にできるようなので、使い方によってはとても怖いものである。

「そいつの名前は、一上真吾。いちがみ しんご ええと、お前のお祖父さんの愛人の子らしいよ。」

愛人という言葉に、佳子は思わず眉をひそめる。

そんな佳子の顔を見て、如月は苦笑して肩を竦めた。

「一上家の遠縁の女が産んだ子供らしい。」

血縁的には、お前の母親の弟? つまり叔父さんになるよな。」

言いながら、如月は一枚の写真をズボンのポケットから取り出す。

食卓の上に写真を置いて、佳子の方へと差し出す。

佳子が覗き見ると、写真の中には隠し撮りされたような感じで、男がメインで写されていた。

父によく似た男。

年は佳子より一回りくらい上に見える。

生き写しともいえるその顔は、他人とは言い難い血縁を匂わせる。

彼の名前が、一上真吾。

父との最後の電話で、自分に会わせたいと言っていた人かもしれない男性。

「彼と話すことが出来て、今度会う約束したんだよ。」

「本当？」

「ああ、お前も一緒に行くだろう？」

「もちろんよ。」

佳子は真剣な表情で大きく頷いた。

一歩ずつ、前へ動き出す。

全ては亡き父の為に。

関係

あれから酒のつまみやお代わりも如月に催促されて食卓の上に並ぶと、飲み会が始まっていた。

先ほどまで正座していた佳子だが、足を崩してリラックスしていた。如月はあくらで座り、ピーナッツをつまんでいる。

食卓を挟んで正面を向き合うように座っているのは変わらない。

物陰から妖怪たちが物欲しそうに覗いていたが、二人は無視をしていた。

「そういえば、今度お見合いすることになったのよ。」

佳子が炙ったスルメを齧りながら、ふと思い出したことを語りだした。

「あれ？ ついに観念したの？」

如月は両肘を食卓の上について、身を乗り出して面白そうに話を聞いていた。

如月には結婚を親から勧められていることを話したことがあった。そして、同様に拒絶しつづけていることも。

佳子の一族は、親族間の結婚を続けて、血にまつわる力を守っていた。

佳子の両親も、本家の父の元へ分家の母が嫁いできていた。

一上家は固有の特殊能力として、絵に描いたものを具現化できた。

蝶を書けば、ひらひらと生き物のように空を舞った。

個人によってレベルの差が激しいが、一族の中核に行くほど、能力が高いものが多かった。

佳子も同様な才能を実は持っている。

― 上家の本家であり、その直系の一人娘だからだ。

佳子自身も例には漏れず、勧められたお見合い相手は母の親戚だった。

母のいとこの子供で、佳子とはまたいとこの間柄となる。

一族の慣わしがどうであれ、佳子は分家との結婚を嫌がった。

佳子は首を横に振る。

「違うわよ。私が他所の家にお見合いを勝手に申し込んだの。」

言いながら、スルメを咀嚼する。

「へー、よくやったね。でも、親御さん怒ったんじゃない？」

あ、だから出て行ったのか？」

佳子の母親が喧嘩して出て行ったと話したことを、如月は思い出したらしい。

お見合いが原因だとは話してはいなかったが、察したらしい。

「そうなのよ。お陰で色々とやりやすくなったわ。」

佳子は意味深に笑う。

そして、ビールの缶を持つと、口につけて一口飲みこんだ。

母のことをもともと疎んじていた佳子は、同居が解消されたことで

精神的に解放されていた。
重苦しく監視がかった家の中が、自由な空間になったのは云うまでもない。

「家の中に男を呼び込みやすくなった？」

如月はまたふざけたことを言い出した。
やりやすくなったのは、そっちではない。
すぐに如月はそういう方面に話を持って行きたがる。

「全く、何言っているの…。」

でも、男だけじゃなくて、色々と招きやすくなったけど？」

呆れつつも、今回は平常心を保ったまま返答できた。

母がいたら、如月は家に上げられなかっただろう。

母は妖怪が家を徘徊するのはおろか、一般の人まで招き入れるのを嫌がった。

特別な力を持つ自分たちを、選ばれた人間だと勘違いしていた母は、彼らを卑下していたのだ。

小さい頃は、母に禁じられて近所の友達と遊ぶことが出来ず、他の子が遊ぶのを遠くで眺めているだけという、寂しい思いをしたこともあった。

同級生たちとは行事に影響しない程度に当たり障りのない表面上の付き合いしか出来なくなって、卒業後の現在でも付き合いがあるかと言えば、全くない。

退屈しのぎに親の目を盗むように妖怪たちと遊んでいた子供の頃の自分。

いつしか妖怪たちと話す方が、気楽になった。

「如月って、今夜泊るところあるの？」

「…もし無いなら、泊まってもいいわよ。」

時計を見ると、まだ寝るには早い時間だが、如月が現在どこで寝泊まりしているか知らなかったため、思わず心配になり尋ねてみた。以前は知り合いの家にお世話になっていたと言っていた。

佳子の家からそこまで帰るのに、ひよつとしたら帰る時間が遅くなって足が無くて困っているかも。

余計なお世話かもしれないが、気を利かせてみた。

「もしかして誘ってくれてるの？」

如月はわざとらしく色っぽい笑みを浮かべている。

少し予想していたけど、やっぱりそう返してくるか。

「ち・が・い・ま・す！」

「もー、人がせっかく親切に気を遣ったのに。」

ムスツとふくれっ面を見せると、如月は佳子の顔を見て笑った。

「あはは。老婆心ながら言うけど、その気もないのに、男女二人きりで夜を明かすのは、止した方がいいと思うよ？」

「如月が手を出さなければいいだけでしょ。」

女には困ってなさそうなくせに。

「据え膳はいただく主義なんだよね。」

「それじゃあ、お帰りください。」

何かされては堪ったものではないと、きっぱり言い放つと、如月は「もっとオブラートに包もうよ」と苦笑した。

「全く、男女の機微に疎いというか…。相手に気を持たせつつも、上手にかわすのが美学ってもんでしょ？」

「ごめんなさい。誰かさんみたいに百戦錬磨じゃないので。」

「勉強には喜んで付き合おうよ？」

「はいはい。」

如月とは、こうやって気軽に遠慮なく話せる関係が気に入っていた。いつも明るく話しかけてくれて、親しげな雰囲気で接してくれる。たまに整った彼の顔に見とれてしまう時があるけど、それは憧れに近いもので恋愛感情ではないはず。

しかし、佳子に近づいて協力してくれる、その本心については探り合いの真っ只中であった。

くだいようだが、彼は人間ではない。

もとは人だったと云うが、今では俗に云う鬼と呼ばれるその存在。人間の魂が外道に堕ちると、人の輪廻から外れて人外のものへと、つまり妖怪の類へ変貌を遂げることが稀にあるらしい。

主に極悪非道の所業をした人間が鬼になることがあるらしいが、目の前にいる如月がそのようなことをしたとは到底思えなかった。こうして冗談を交わしながら酒を飲むのは楽しい。

でも、どこまで彼を信頼できるのだろうか。

見返り無く、どうして自分に手を貸してくれるのか。
鬼である彼に惹かれて、心に占めていくのは恐い気がした。

如月のことは実はほとんど知らない。

普段何をしているのか、どこに住んでいるのか。

名前すら教えてくれなかった。

好きに呼べばいいと言われて、“如月”と名前をつけたのは佳子だ。
彼と出会ったのが二月であったから、そこからつけた。

佳子のお見合いについて、誰と会うのかとか、如月は特に気にして
なかった。

泊ればと誘ったけど、気付かないうちに、佳子の性格をよく掴んだ
やり取りの末に、上手い具合にかわされた。

それが少し寂しく感じて、彼にとって自分はどんな存在なのだろう
と、そう疑問に思った自分が嫌になった。

彼の本性は鬼なのだから。

人の情を求めても、返ってくる見込みはない。

自分がどん底にいた時に、立ち上がるきっかけを与えてくれたのが
如月だったから、彼に特別な何かを期待してしまうのかもしれない。
そう自分に言い聞かせるように結論付けて、納得しようとした。

如月が帰る際に、玄関まで彼を見送ろうと一緒に歩いていたら、唐
突にお見合いの件について質問された。

特に変わった様子なく、日時と場所を簡潔に訊かれたので、つい何
も考えずに正直に答えてしまった。

神出鬼没の彼のことだ。

突然会いに来た時に、佳子が不在だった場合を避けたいのだろう。それで佳子のスケジュールを気にしたのかと、この時は彼の行動の意味について気にも留めなかった。彼がいなくなっただ後に、今回も自分の名前を呼ばれなかったなあと、全く違うことを考えているだけだった。

しかし、お見合い当日にそれをとて後悔することになる。

関係（後書き）

やっと次回からお見合い編に突入します。

喧嘩（前書き）

とりあえず、お見合い編スタートです。

喧嘩

お見合い当日、佳子は某ホテルのロビーで、脱いだ上着を膝の上に置いてソファアームに座って待っていた。

木々が紅く色つき始めたこの頃、風が肌寒くなってきていたので、日中でも外出には上着が必要になっていた。

ただ、ホテルの中では空調設備が整っているので、上着がある方が返って暑かった。

これからお見合いだと云うのに、佳子はダサい眼鏡をまだ使用していた。

とっくに流行が過ぎた、黒くて丸いフレームのそれは、真面目で堅苦しい印象しか与えない。

財布の事情でコンタクトを購入していなかったのと、佳子自身がどんな眼鏡でもいいだろうと頓着していなかったからだ。

髪は後ろで団子状に一つにまとめて、細いうなじが見えていた。

今日はスリムタイプのブルーのワンピースを着ていた。ちょうどスカート丈は膝上である。

服に合わせて、ストッキングにヒールのある靴を履いている。

佳子自身痩せているので、彼女が選択した服は非常に似合っていた。丸く開いた首元が寂しかったので、普段はつけないネックレスを着用している。

持ってきたショルダーバッグはお気に入りのもので、こげ茶色の革製で、父と一緒に買ったものだ。

身なりだけは相手に失礼の無いように佳子は気を遣った。

特に問題はない恰好だが、もし服を選ぶときに母がいたら、“お見合いの席には振袖でしょう”と文句の一つでも言われていただろう。そして、最終的にはいつものように母が選んだ、母好みの振袖の着

物を身につけさせられたに違いない。

着せ替え人形のように。

母は和服が好きで、それこそ正装というような考え方であり、若い人が着る丈の短いスカートには眉を顰めていたことがあった。

まだこれなら膝上でセーフだろうけど。

佳子は自分の服装に視線を送る。

そう考えて、母の存在がまだ自分の中で大きいことに気付いて、佳子は心の中で苦笑した。

あの日、初めて母と大喧嘩した時を思い出す。

「佳子さん、貴女は何て事をなさったの!？」

母親の怒りの剣幕は凄まじかった。

予想していたとはいえ、佳子は内心恐れで縮こまる。

自室にいて筆耕の仕事に勤んでいた時に、いつもの和服姿で母の政子マキコがやってきた。

長く家を空けていた佳子が自宅に戻って来てからというもの、毎日のように結婚について説得もとい説教をするために母は佳子のもとへ訪ねていた。

そんな母に「五月家にお見合いを申し込んだんですよ、アハハ」とふざけ気味に暴露したら、冒頭のようにマジギレされた。

16歳で結婚してから佳子が授かるまで10年もかかった母は、まだ娘が21歳だというのに非常に焦る気持ちは分からなくもないが、毎日耳にタコが出来るくらい、「結婚、結婚」と繰り返されて鬱憤が溜まっていた。

「いきなり大声を出されてどうしたのですか、お母様。」

母の怒りの原因などとくに分かっているはずなのに、敢えて佳子は平静を装ってとぼけてみせた。

このぐらいの意趣返しは、可愛いものだろう。

ゆっくりと手にしていた筆を卓上の筆置きに横たえようと、母親の方へと向き直る。

母は佳子と目が合うと、目尻を釣り上げて彼女を睨みつけた。

家の中でもきちんとした和服姿の母とは対照的に、彼女の着用していた衣類は、長袖のカットソーに綿パンという寛いだ感じのホームウェアだった。

母に倣って和服を着こなしていた時期もあったが、今ではこの恰好が定着している。これについて母との間に一悶着あったのだが、母の小言を馬耳東風の如く無視を続けていたら、いつの間にか母は何も言うのを止めて、佳子は無言の勝利を治めていた。

「五月家にお見合いを申し込んだなんて…。」

なんてことをしてくれたのです！」

佳子は鬼の形相をした母を作った笑顔で見つめる。

「お母様と約束したじゃないですか。」

里の奉納試合で優勝した人とお見合いするって。

だから、五月家に申し込んだんですよ。」

先月のことになるが、佳子は一上家の当主として、母の故郷で行われた盆祭りに母と一緒に参加していた。

お祭りのメインイベントとして、四年に一度の奉納試合が行われて、

今年は五月家の人間が優勝していた。

「佳子さん、何を言っているの!？」

あれは……」

「分家の人間が優勝した時、限定とか言わないで下さいよ？」

佳子は母の言葉を遮って発言した。

母は、分家筋の人間と自分を結婚させたがっていた。

佳子の婚約者（予定）が前回の奉納試合にて準優勝だった話を聞いて、優勝も出来ない人間と結婚なんて出来ないわと嫌味を言ったら、逆に母によって優勝したらお見合いをしてもらうわよと無理矢理約束させられた経緯があった。

トーナメント方式の決勝戦で、一上家と五月家がぶつかり合い、勝負の軍配は後者に上がった。

一上家の婚約者（予定）が優勝したら、問答無用でお見合いをさせられて入籍まで行きそうだったが、佳子は何とか難を逃れたのだ。そして、これ幸いにと母の言を借りて、優勝した五月家にお見合いを独断で申し込んだのだ。

全ては母の背後にある分家との繋がりを断つために。

一上家は代々親戚筋と婚姻を繰り返し、それが当たり前となっていた。

母自身も分家の出身で、父と結婚して故郷から遠く離れたこの地で暮らすようになった。

一上家の本家だけ、お役目のために離れた土地で暮らしているため、故郷との関係は薄いですが、親戚づきあいは濃厚に続いていた。

故郷の山代は、様々な特殊な能力を持った人間が集まった集落だ。その能力を活かして、様々な裏の仕事をこなしている。

一上家も例には漏れず、能力者であり、その血筋を絶やすことなく現代まで続いている。

同じ血縁同士の婚姻を繰り返してきたため、異能の力を今まで保持することが出来たと言えるかもしれないが、数代前からの当主筋の人間は、虚弱体質が続いている。

血が濃くなっていることの弊害かもしれない。

父が生存していた時は、それが母の勧める縁談を渋っていた主な原因でもあった。

何度か婚約者（予定）に会ったことがあるが、分家で育った母と同様な物の考え方をする人だったため、良い印象を持っていなかったのも大きい。

父の死後には、別の理由で分家とは縁を切りたいと考えるようになったが。

佳子が幼い頃から感じていた事だが、母の考え方は相容れないものが多かった。

一般の子供に混じって育ってきた佳子と、古くからの一族の因習を当たり前として分家の中で育ってきた母の政子。

二人の環境は大きく異なり、母の言動は佳子を子供の頃から苦しめてきた。

それでも、今は亡き父が佳子と母の間に立って、彼女を守ってくれていた。

しかし、優しい父の庇護の手はもはやない。

彼女が高校3年の、もうすぐ卒業という2月の冬に交通事故で最愛の父を亡くしてしまった。

その後、この家や母から逃げるように佳子は家出してしまったが、父の死後から3度目の春の終わりに再び戻って来た。

今では秋になり、仏間に飾られた父の遺影に涙することも少なくなかった。

「屁理屈を言わないでください。

一上家の当主である貴女が、後世に後継者を残すためには、婿は適当に選べないんですよ！

先祖が苦勞して残してきた素晴らしい力を、貴女の代で途絶えさせるわけにはいかないのです。

それに五月の四男坊と言えば、他所からやってきた貰われっ子ではないですか。

「どこの馬の骨とも知らぬ輩……」

「お母様が何と言おうと、もう当主である私が決めたことですから、決定事項です。」

「黙って従ってください。」

私は再び母の科白を遮った。

佳子が母の目を見据えながら、低い声ではっきり言い切ると、母が怒りで身を震わせたのが分かった。

そして、振りあげられる母の右手。

「パシンッ」

佳子の頬を平手で叩く音が部屋に響いた。

和服の袖を左手で押さえて、右手を振りおろした様は、険しく恐ろしい形相でも、とても優雅で凜としていた。

「親に向かって何て口の聞き方をするんです！

当主といえども、一族が決めた者以外との結婚は許されません！」

佳子は打たれた頬を手でさすりながら、そう叫ぶ母を見た。

母が放つ凄まじい怒気によって、佳子の肌に電気が走ったような感

触がした。

母の言動は佳子の予想の範囲だった。歯を食いしばり、母の気迫に負けまいと踏ん張る。

「もう私は成人しましたから、保護者の同意なく結婚できます。

しかも、結婚は個人の自由でしょう。一族が勝手に決めるなんて馬鹿馬鹿しい。」

「なんですって！」

吐き捨てるように中傷すると、母の怒りがさらに増したのが手に取るように分かった。

母を追い詰めようとさらに口を開く。

「そもそも、お母様はどうなんですか？

嫁に出てもなお、親の脛をかじって贅沢三昧。

いつまでお嬢様気分で、ご実家からお小遣いを貰えば気が済むんですか？

お父様があまりお金を稼げなかったのは事実でしたが、お母様も一緒に働いて二人で頑張れば、分家のご実家に頼らず貧しいなりに生活できたかと思うんですけど。

それなのに、一切働こうとはしませんでしたね。」

綺麗に整えられた母の眉毛が、ピクリと跳ねあがった。興奮しているためだ。

お役目のために、里から遠く離れたこの地で生活している当主筋の家系。

今ではすっかり落ちぶれて、分家から見れば、能力と血筋だけしか勝る物がない。

貧しい本家とは対照的に、繁栄して裕福な分家。恵まれたお嬢様生活を送って来た母は、嫁に来ても本家の状況に馴染もうとせずに、独身時代と同等の生活水準を求めた。身につける衣類や装飾品は、高級品ばかり。

女中を分家から呼んで家事をさせて、自分は全く手を掛けなかった。

「貴女、何を言っているの!？」

そもそも、どうして私が働かなくてはならないのですか。

私は当主の嫁としてふさわしい振る舞いをとってきただけです。

そのことについて非難される筋合いはありません!」

「当主の嫁としての振る舞い？」

お母様の場合、私を産んだは良いけど、子育ては女中に任せて、外に出て遊びっぱなしだったじゃないですか。」

呼吸器系が生まれつき弱い佳子は、熱を出した時にその症状が悪化することが多くて、苦しい咳が何日も続くことがあった。

そんな状態の佳子を、母は特に悪びれもせずに置いて出かけたことがあった。

女中や父が家にいてお世話してくれたから、放置されていたわけではなかったが、小さい頃はやはり体調が悪くて辛い時の母親の不在は寂しいものがあったのだ。

大きくなった今でも、忘れられない記憶の一部となっている。

「遊びつて、何てことを…!」

お付き合いも大事な女の仕事なんですよ!

貴女、今更何を言い出すの!？」

佳子の言葉に傷ついたように母は顔を顰めた。

母の肩が興奮の為に震えていた。

どんなに母が反論しても、佳子は全く同情しようとは思わなかった。母が会っていた人たちは、独身時代に分家との付き合いがあった人で、佳子にとってみれば、本家のこの家に住んでいる限り、無理に付き合いする必要のないものである。嫁の仕事と称するには、あまりにも勘違い過ぎる。

「お金もないのに、見栄だけのために新しい衣服を買い、付き合いと称してその人たちにあわせて豪華な食事のし放題で、金銭的にずいぶんお父様を苦しめたんじゃないですか。

いつも分家のお爺様に頭を下げて、可哀想でした。

私は、もう分家から経済的に援助してもらうのを止めたいんです。レジのバイトと内職の収入は少ないですけど、贅沢をせず節約すれば、何とか食べていけます。

お母様もここで暮らす以上、何かしら働いてください。」

母の顔が醜く歪んだ。

怒りは頂点に達したと見た。

父と母の仲は、悪かったと佳子は認識している。

佳子の言ったように、金銭感覚のない母は湯水のようにお金を使い、いつも父は支払いに苦慮していた。

母の実家に頭を下げながら電話している姿を何度も見かけたことがあった。

もちろん父は母に何度もお金の使い方について、母の背後にあるお爺様の存在に遠慮して、遠まわしであったが苦情を伝えていた。

しかし、独身時のお嬢様感覚がいつまでも抜けない母には、全く理解できなかつたようだ。

実家に援助してもらうのに何の疑いも抵抗も持たない母とは、話し合いになつてなかつた。

優しい父から笑顔が消えたのは、いつだったからか。

そんな父の姿を見て育った佳子は、自分自身が同じように母によって苦しめられるのは、何としても避けたかった。

そもそも分家に依存しては、結婚を断ることができない。

まずは自立しなくてはと、佳子は今年の夏頃から働きに出ていた。外で働くことを良しとしない母によって、そのことを反対されたが、言うことを聞かずに続けていた。

それは母に初めて逆らった時だった。

自分の意思を曲げずに、給料日まで働き続けて初めて給料を貰った時は、本当に感動したものだ。

「何で子供の貴女にそんな酷いことを言われなくてはならないの!？」

お父様の援助は当然なものよ!」

母は興奮のあまりに、大きな声で叫んでいた。

そんな母の姿を見て、逆に自分が冷静になるのを感じた。表情を殺して視線を送る。

「では、お爺様の扶養されるつもりなら、ご実家に帰られてください。」

うちでは、働かざる者食うべからず、です。」

「なんですって!？」

貴女、自分の親を追い出すつもり!？」

母の科白に、わざとらしくため息を漏らす。

「出て行きたくないなら、仕事を見つけて働いてください。」

お母様はお父様や私と異なり、病気一つない健康体じゃないですか。」

言いながら、決して母が自分の提案を受け入れないことを確信していた。

「親に向かって、何て生意気な…！」

誰のおかげでここまで育ててもらったと…！」

母は憎らしげに佳子をしばらく睨み続けた。

佳子はその視線をかわすことなく、受け続けた。

この気持ちを伝えようと決意するまで、佳子はどれほど躊躇いや母親に対する恐れがあったか。

それを克服したからこそ、彼女は母と対峙できたのだ。

目を逸らさず自分を見つめる佳子の姿に、揺らぎない意思を感じ取ったのか、ふと母は険しい表情を緩めた。

そして、興奮を抑えるためか、大きなため息を一つこぼした。

「いいでしょう。貴女の言う通り、実家に帰って差し上げましょう。

せいぜい苦労して、親のありがたみを知りなさい。

…貴女独りで何ができるといのかしら。」

話し合いの末、折れたのは母だった。

こちらを見る目つきは鋭いものの、怒りで興奮した頭は少し落ち着きを取り戻したようだった。

母の考えでは、佳子が音を上げて、親に泣きついてくると予測しているようだった。

佳子は母のその言葉に何も返さなかった。

「家出しても結局は戻ってきましたしね。

今回はいつまで強がりを書いていられるかしらね？」

母はそう捨て台詞を残すと踵を返す。

足音も無く佳子の部屋から出てゆき、戸を閉めて行った。

遠くで母が女中を呼ぶ声がする。

きっとこれから実家へ帰るために準備をするのだろう。

全ては佳子の計算通りに事は進んだ。

母と分家から遣わされた女中をこの家から追い出す。

それこそ、佳子の考えたシナリオの一部だった。

今頃になって、手が震えてきた。

緊張が途切れたせいか。

自分の手をそつと握り締める。

長い間溜めこんでいた母への不満をぶちまけて、すっきりするはずだったのに、虚しいのは何故だろう。

子供の頃から抑圧されていた感情は、まだうまく整理できそうもなかった。

喧嘩（後書き）

春人をなかなか出せなくてすみません。
次回こそは！

春人との対面

お見合いの相手がいつ来るかと、出入り口の方を見つめてその姿を探していた。

まだ約束の時間にはなっていない。

とはいっても、あと5分くらいでその時間はやってくる。

今日のお見合いの席は、当人同士だけという、シンプルなものにした。

堅苦しい雰囲気はなしにしたいというのは建前で、佳子の母親が自分と現在不仲なために出席してくれそうにもないからだ。

あら、来たみたい。

入口から入って来た目的の人を見つけて、すぐに立ち上がると、その男性に向かって手を振って、こちらの存在をアピールした。こちらに気付いて足早に近づいてくる男性の姿を見守った。

「お待たせして申し訳ございません」

男性は礼儀正しくお辞儀をしながら、謝罪した。

「まだ時間前だし、気にしなくていいですよ？」

佳子は安心させるように笑顔を浮かべながら、集合場所に最後にやってきて恐縮している男性に向かって返答する。

男性は濃いグレーのスーツを着ていた。

傍から見ても真新しいそれは、男性自身の若さもあってとてもフレッシュな印象を与えた。

染めていない短い黒髪と、丁寧な物腰は、真面目そうな雰囲気。綺麗に伸びた背筋と、逞しそうな両肩や腕回りは、背広を着ていても見て取れた。

成長期を終えた体は、大人とさほど変わりはないが、顔つきはまだ成人前だったため、若さに溢れていた。

お見合いの男性は、まだ卒業前の高校生だ。

フォーマルの服装と言えば制服だと思うが、これからお見合いに同席する身としてはそれを彼が着用してなくて良かったと佳子は思った。

制服姿の男性とお見合いとは、少し恥ずかしい感じがしたからだ。

それにしても、と佳子は男性を改めて見つめる。

男性の顔は、目を見張るものがあった。

要するに、とても良すぎるのである。

先日久しぶりに会った如月とは、全く違ったタイプだ。

如月はどちらかというと中性的で柔らかな雰囲気を持ち、陰のある妖艶な色気を漂わせていた。

一方、目の前にいる男性は精悍な顔つきで男らしく清々しかった。

どちらも負けず劣らず眼福ものである。

間近で彼の顔を見たのは今日が初めてだった。

彼を最初に見かけたのは、故郷で行われた夏のお祭りの時だった。

夏祭りのメインイベントである奉納試合の観戦をしていた時に、試合に参加していた彼の姿が会場にあった。

しかし、その時は遠めだったし、古くて度が弱くなった眼鏡だったため、彼の顔までは確認できなかった。

佳子の裸眼の視力は結構悪いので、コンタクトや眼鏡がないとほとんど見えない。

愛用していたコンタクトはお祭り前に紛失したため、度の合わなく

なっていた眼鏡を引つ張り出して使っていたのだ。

まさか直接会って話をする機会があるとは思ってもみなかったし、その時はお見合いのことまで考えてなかったから、あえて顔まで確認しようとは思わなかった。

後になって、母の逆鱗にわざと触れさせるために五月家とのお見合いを企てた時も、相手の家に100%断られると思っていたから、正直に言うとか相手の顔も知らないで申し込んでいたのだ。

そんな状況の中、五月家から快い返事を意外にも貰い、それから佳子は慌てて相手の素性を調べ出した次第だった。

「彼って、どんな顔をしているの？」

こんな質問をして、正には呆れて白い目を向けられた。

正によって得られたお祭りの時の彼の写真を見て、佳子が啞然としたのは言うまでもない。

自身が申し込んだお見合いの相手が、美男子だったということは、佳子にとって衝撃だった。

優しい人だと良いなと呑気に考えていた自分が恨めしい。

誰しもが認める美貌の顔。

私が彼の顔に一目惚れをして、一族が指定した婿候補者を蹴っ飛ばし、結婚を申し込んだと思われるじゃないか！

彼女の想像はあまり外れておらず、正の嫁には、「彼ってカッコいいわよね。佳子さんが気に入るのも分かるわ。ウフフ。」なんて言われる始末だった。

「いえ、違ってます。」といちいち訂正して回りたい気分だったが、そんな科白も照れているからだと解釈されるに違いないと思い、他人にどう思われているか気にしないことにした。もともと自分が蒔いた種だ。

自分さえ気にしなければ、害のないものだ。

ちらりと再度彼の顔を見つめる。

こんなに格好良いなら、女の子なんて選り取りみどりだろうに。

しかも18歳の若い男がお見合いに参加なんて、馬鹿げている気がした。

結婚相手なんて、今すぐに決めなくて良いはずだ。

そもそも一上家と五月家は仲が悪い筈。

それなのに自分とお見合いするなんて、何か裏があるに違いないと、佳子は密かに警戒をしていた。

自分からお見合いを申し込んでいるにも関わらず、彼との縁はこれつきりにしたいと、内心では酷い扱いになっていた。

今日の佳子の目的は、穩便にお見合いを終わらせることだ。

佳子は自分の本来の目的の為に、今後色々と他に行動を起こさなくてはならないため、序盤から余計なことで頭を悩ませたくなかった。

とりあえず彼の出方を見てみようと思ひ、本心はおくびにも出さずに、佳子もわざわざ会場まで出向いてくれた男性に満面の笑顔を見せた。

「初めまして、一上佳子です。」

佳子は深々と頭を下げる。

そして、佳子は彼を見つめた。

彼は佳子と目が合つと、一瞬大きく目を見開き、視線が少し泳いだと思つたら、すぐに恥ずかしそうに目を伏せた。

「…こちらこそ、初めまして。
五月みづき春人はるとです。」

春人も佳子に倣うようにお辞儀をした。

声のトーンが少し硬かったのは、緊張からだろうか。

何にせよ、お見合いはここから始まる。

相手に分からないように、佳子は気合を入れた。

春人との対面（後書き）

やっとお見合い相手の春人と会えましたが…。
次回更新は一週間くらい後になります。
すいません。

闖入者 1

佳子たちは、予約してあったホテル内のレストランへとやって来た。ランチタイムを過ぎた時間帯だったので、店内は客が少なく、まばらに席が埋まっていた。

二人は適当に飲み物を注文する。

運ばれてきた紅茶のカップを口に運びつつ、佳子は目の前に座る春人を見つめた。

先ほどから目下のテーブルにはかり視線を送っている春人は、佳子と目を合わせようとしない。

何処となく落ち着きがない態度に、佳子は彼に少し同情した。

もしかして、あちらも自分と似たような状況なのかしら？

佳子はそのような風にぼんやり考えた。

五月家もお見合いを突然申し込まれて、不審に思うのも不思議ではない。

佳子が何を考えているのか探るために、春人が上から命令されて嫌々この席にしているとしたら、佳子に対して好意的でないのも頷ける。

佳子はあまり乗り気でなさそうな彼の様子を気にしないことにした。自分だって、本気で結婚しようとは考えていない。

向こうだってそうだろう。だから、今日で彼と会うのも終わりのはずだ。

とりあえず、会話しないことには間が持てないので、世間話をしようと思った。

「今日はどこやってここまで来たのですか？」

「車です。」

「貴方が運転されたんですか？」

「はい、免許を持っているので。」

「へーすごいですね。」

「住んでいるところが田舎なので、免許が無いと困るんです。同級生の多くが夏休みに教習所へ通っていましたね。」

「そうなんですか。」

でも免許取り立てで、遠乗りはさぞかし大変だったでしょう。」

「いえ、運転が割と性にあっていて好きなので、苦になりませんでした。」

結構ハキハキ答えてくれるので、会話はこちらが質問する限り、順調に進むようだ。

「今日は、ここまで来るのにどのくらい時間が掛かったんですか？」

「途中、少し道が混んでいたので2時間近く掛かりました。」

当初の予定では1時間半くらいだと見込んでいたんですが。」

「そうなんですか。」

本当に今日は遠いところからわざわざお越しいただいてありがとうございます。」

佳子が頭を軽く下げると、春人は恐縮したように慌てて頭を下げ返した。

「いえ、こちらこそ。」

今日はお会い出来て嬉しいです。」

お世辞攻撃が来たので、佳子も愛想笑いを浮かべてお返しをする。

「私もです。」

緊張して昨日なかなか眠れなかったんですよ。」

昨晚の就寝時間が遅かったのは事実だが、それは内職の量が今回多かったにも関わらず、本日お見合いがあつて時間が削られたため、皺寄せが来たからに他ならなかった。

佳子は宛名書きなどの筆耕の内職をしている。

亡き父が同じ仕事をしていたので、父の仕事関係の知り合いに頼んで、少し仕事をまわして貰うことができた。

父に教わって書道が続けたお陰で、佳子の筆使いは代筆できるくらいには上達していた。

春人がここまで2時間かかったというが、佳子も電車でここまで来るのに1時間半かかっている。

二人が住んでいるところが遠かったため、お互いの中間地点で本日待ち合わせしたのだ。

そこは佳子の住んでいる街から電車で来られるところだった。

佳子は免許を持っていないため、移動には公共機関を利用するしかない。

電車に乗っている間は、うとうとと居眠りをしていて、あやうく降車する駅を乗り過ごすところだった。

佳子は紅茶のカップに手を伸ばして、再び口をつけた。

カップを受け皿に置いて、春人の様子を観察すると、彼も同じよう

にお茶を飲んでいた。

絵になる光景に目の保養とばかりに思わず見とれる。

テーブルの上に戻すまでの仕草を一部始終眺めていると、彼が佳子の後方へと視線を移して顔色を変えたのに気付いた。

佳子の後ろには、レストランの出入り口がある。

春人の異変が気になった佳子は、思わず後ろを振り返って状況を確認した。

人が一人歩いてくるのが見えた。

こちらに急ぎ足で向かってくるのは、スーツを着た男性。

自分と同じくらいの年齢で、しかもどこかで見た顔だと思って、それが今年の夏に会ったばかりの人だと気付く。

一族が用意した佳子の結婚相手、いちがみ たかし一上高志。

高志は眉間に皺を寄せて、こちらに真っ直ぐ向かってくる。

もともと目つきが鋭く神経質そうな顔な上に、体格が大柄なので、そんな男が勢いよく近づいてくるのは恐いものがあった。

しかし、どうして彼がここにいるのだ。

不機嫌な顔をした高志が佳子たちのテーブルの前に来ると、足を止めて佳子を見下ろした。

一瞬だけ、春人の方に視線を送るが、すぐに佳子の方へと戻す。

そして、おもむろに佳子の手を掴むと、無理矢理引っ張る。

佳子は強制的に椅子から立ち上がる破目になった。

春人も慌てて立ち上がる。

「何をするの!？」

佳子が抗議すると、高志は舌打ちをして険しい表情を佳子に向けた。

「お前こそ、ここで何をしている。」

「何って、お見合いだけど。」

佳子の言葉に高志は思いつきり蔑んだ表情を浮かべた。

「馬鹿を言うな。お前は俺と結婚するんだ。時間の無駄になるようなことはするな。」

「私は貴方と結婚する気はありません！」

手を離してもらえませんか。そしてすぐに帰ってください。」

高志はもう一度派手に舌打ちすると、無言のまま強引に佳子の手を引つ張り出口へ向かう。

佳子は引きずられるように連れ去られようとした。

止めてと叫ぼうとした時に、様子を見守っていた春人が動いた。

驚くほどの速さで、佳子を捕えていた高志の腕を掴む。

高志がそれに気付いて立ち止まり、後ろを振り返ったと思ったら、

春人は彼の腕を捻りあげた。

高志は苦痛の表情を浮かべると、佳子を掴んでいた手の力が緩み、

一瞬にして高志から佳子は解放される。

佳子は再び捕まっては堪らないと、春人の背後に隠れて高志の挙動を見守った。

佳子が安全な場所まで移動したせいか、すぐに春人は高志の腕を離す。

「邪魔をしないでいただけますか。一上さん。」

高志と春人は向かい合う。彼らの間に緊迫した空気が流れる。

高志は春人を無言でしばらく睨みつけていた。

そして、佳子へ視線を巡らせると、口を開く。

「そいつは俺のものだ。返してもらおう。」

「お断りします。」

春人は即答する。

背後にいた佳子は春人に対する株を少し上げた。

佳子のゴタゴタに春人は巻き込まれただけなのに、自分を庇ってくれる彼が意外に良い人かも思った。

ちらりと周りを見ると、店内にいた客は何事かとこちらに視線を送っているのに気付いた。

騒ぎを起こして注目されている。

何とかしなくてはと思うが、高志とまともに話し合いが出来る状況ではない。

高志は頑なに佳子の引き渡しを拒否する春人を睨みつけている。この眼光だけでも人を殺せそうだ。

「これは当家の問題だ。お前とのお見合いなど手違いにすぎん。

茶番は終わりにしてもらおう。」

「彼女は貴方と結婚する意志はないようですが？」

「ふん、あいつの意思など関係無い。一族の決定には誰も逆らえん。」

「彼女は当主でしょう？」

当主の意思は無視するのかと暗に春人は尋ねる。

「こいつが当主だからこそ、婿には俺が選ばれたんだ。」

いいから、そこをどいてそいつを寄せ。」

高志は春人の質問の意図には触れず、自分の要求のみ繰り返す。そんな高志の態度に佳子は苛立ちを感じた。

「何度も言いますが、お断りします。」

春人がはつきりと拒絶したその時だった。

高志の口元が歪み、そして、「平蕪ひょうぶ、やれ」と呟いた。

その直後に高志の背後から複数の黒い帯状の何かがすごい勢いで飛び出してきて、春人の体に巻きついてきた。

咄嗟のことに春人は対応できず、主に上半身部分、腕や首元を締め付け上げるように捕縛された。

「くっ…！」

春人はうめき声を上げる。

「ちょっと、彼に何をするの!? 止めて!」

春人に巻きついてるのは、黒い布のような妖怪だ。

高志に使役された妖怪が気配を殺して彼の背後にいたらしい。

里の掟で、特殊な能力を一般人にばれる様な公共の場で使うことは緊急時を除き、禁止されている。

従って、高志のこの行動は違反となる。

春人を押さえる妖怪は一般人には見えないが、拘束された彼の挙動は他の客の目には怪しく映っているだろう。

佳子は高志に抗議するが、彼は何も答えず、体の自由を奪われた春人を横へ押しのと、佳子の腕を再度捕えた。

高志に押された春人は、倒れそうになる体勢を何とか堪えるのに精

いっぱい、佳子にまで手が回らない。
その際に高志は佳子連れ去ろうとする。

「ちょっと、乱暴は止めてよ！」

佳子が必死に抵抗しても、男の力には勝てず、ずるずるとレストラ
ンから引きずられるように連行される。

ところが、お店から出た矢先、高志は足を急に止めた。
足が止まったことに驚いた佳子は、俯いていた顔を持ち上げると、
高志の前に立ちはだかる男に気付いた。

闖入者 1 (後書き)

途中ですいません。
なるべく早く次は更新したいです。

闖入者 2

「あっ！」

見知った男の出現にさらに驚いた佳子は、思わず声を上げてしまった。

極上の笑みを浮かべた美貌の男が目の前にいた。

高志が佳子の声に反応して、目の前の男から注意を逸らしたとたん、男は高志を突然殴りつけた。

殴られた衝撃で横に飛ばされて床に倒れる高志。

あまりの展開に佳子は呆然と立ち尽くし、うつぶせに倒れている高志がふらふらしながら起き上がろうとしているのに目を離せないでいると、高志を殴った男に今度は手を取られた。

「ほら、行くよ！」

そして、今度は男に手を握られて引つ張られる。

伝わってくる体温は相変わらず冷たい。

大きな彼の手に包み込まれている自分の掌。

さっきまで乱暴に高志に握られたものと比べて、優しさが感じられた。

「ちょ、ちょっと。何で如月がここにいるのよ!？」

突然現れた男の名前を佳子は呼ぶ。

「いいから、いいから。とりあえず、逃げよ?」

相変わらず妖艶な色気を振りまきながら、如月は佳子を振り返って

笑みを浮かべると、有無を言わず佳子の手を引いて誘導し続けた。高志よりマシかもしれないが、お見合いの場から連れ去られることには変わりが無い。

「ちよつと待つて！」

帰るわけにはいかないんだけど…。」

佳子の抗議を如月も聞いてはくれず、ホテルから出る破目になる。出入り口付近にあるロータリーに停めてあつた高級そうな黒塗りの車に一直線に向かう。

如月は後部座席を開けると、佳子を押し込むように乗せた。そして、彼も続いて乗りこんでくる。

「すぐに出して。」

如月が言うと、後部座席を振り返っていた運転手が「はい」と返事して、すぐに前を向いて発車させた。

運転手は黒いサングラスをかけた青年で、後部座席に乗った佳子と如月よりは一回りほど年上のように見えた。

車がゆつくりと動き出した中、如月はドアを閉める。

次の瞬間、ドアにロックが掛かる音が車内に響いた。

如月と体を密着して座っている状況にすぐに気付き、異性に慣れない佳子は思わず緊張する。

彼から離れるために、慌てて隣の座席へ腰を少しずつ動かしながら移った。

車がホテル前のロータリーを出た時だった。

先ほど如月が閉めた車のドアを叩く音がした。

佳子が驚いて首をそちらに向けると、春人がドアを叩いて、「佳子さん！」と叫んでいた。

春人は高志の妖怪から解放されていた。

春人は動いている車と並走しながら、ドアノブに手を掛けて開けようとしていたが、鍵が掛かっていたため、無駄に終わる。

「五月さん、危ないですよ！」

私は大丈夫ですから！」

思わずドアの方へ身を乗り出して、佳子は大声を出した。ドアと佳子の間にいた如月が今は邪魔だった。

佳子たちの車は車道を走り始めていたので、体一つで車を追いかけるのは、明らかに危険だった。

しかも、ロータリーを出てから一般道の流れに乗らなくてはならなかったため、車の速度は急に上がっている。

春人が車に轢かれてもしたら大変だ。

佳子の声が届いたのか、それとも車の速度に追いつかなくなったのか、春人は車の側からいなくなった。

佳子が後ろを振り返り、リアガラス越しに春人の姿を探すと、歩道にぽつんと立ち尽してこちらを眺めていた彼がいた。

一人置いていかれて小さくなって行く彼の姿を見て、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

自分のせいで彼に迷惑を掛けてしまった。

後で連絡して一言お詫びしないと気が済まない心地だった。

「彼とお見合いしてたの？」

穏やかに笑みを浮かべながら如月が尋ねてきた。

「そうよ。でも、お見合いが途中でぶち壊されて、彼に迷惑をかけたしまったわ。」

前へ体の向きを直しながら、返事をする。
その一因でもある如月を軽く睨みつけると、如月は佳子の視線を受けても意に返さず表情を崩さない。

「じゃあ、俺が殴ったのは誰だったの？」

「えーと、親が勧める縁談相手。」

「もしかして、修羅場だったの？」

「もしかしなくても、そうだったわ。」

「もー、あの人といい、如月といい、どうして黙って見守っていてくれなかったのかしら？」

さっきのいざこざを思い出すだけで頭が重かった。

自分の額を手で押さえつつ、チクリと嫌味を言うと、如月は心外だと言わんばかりに、目を大きく見開いて佳子を覗き込んだ。

「もしかして、俺に怒っている？」

もとから結婚する気がないのに、お見合いを申し込んだくせに、むしろ、邪魔されて助かったんじゃないの？」

軽い口調だったが、如月の鋭い指摘に佳子は言葉に詰まった。

確かに自分の都合だけで、五月家にお見合いを申し込んで春人を巻き込んでしまい、そもそも迷惑をかけたのは佳子だ。

如月の言う通り、春人と本気で結婚しようとは思っていなかったし、今となっては言い訳だが、申し込んでもすぐに断られると考えていた。

自己嫌悪に陥り気味の佳子が、視線を彷徨わせて黙りこんでも、如

月は言葉を続けた。

「まあ、でも、一度やってみたかったんだよね。」

意に染まぬお見合いに無理矢理参加させられたお嬢様を攫うナイ卜役。」

「なによそれ。」

如月の軽口に反応する佳子。

如月を再び見ると、相変わらず面白おかしく佳子を見つめていた。

そんな如月に佳子も表情を崩す。

彼の調子の良さに、少し気分が上昇した。

「後で彼に謝っておくわ。これでこのご縁も終わりね。」

思わず、ため息が漏れた。

もつと穩便にお見合いを終わらせたかった。

五月家の面目を潰そうなどと考えてもいなかったが、結果としてそうなってしまう、ますます一上家との仲が悪くなってしまうかもしれない。

佳子の脳裏には先ほどの春人の姿が浮かんでいた。

「佳子さん」と春人は自分の名前を呼んで、間近で見た顔はとても切羽詰まっていた。

あの一瞬の表情が作りものだったとは思えない。
本気で心配してくれたのだろう。

分家の人間以外に他の能力者と個人的にほとんど話したことがなかったため、他の里の人間に対しても分家と同じく悪いイメージを持っていたが、今日の春人の人柄を見るとそうでもないらしい。

それにしても予期しない闖入者たちがずいぶんと暴れてくれたものだ。

高志は何故お見合いの場にちょうど現れたのだろうか。
どこでその情報を仕入れたのだろうか。

佳子如きのためにわざわざ動く人だと考えていなかったが、婚約者（予定）として今回のお見合いを放置することは、分家内で許されなかったのかもしれない。

高志と何度か会ったことがあったが、彼は自分に全く興味が無さそうだった。

本家の娘というだけで美しくもない自分との結婚を、あからさまではないが嫌そうだったので、今回佳子の方から彼との結婚を拒絶して、むしろ感謝されると思っていたくらいだ。

しかし、いざ佳子に振られるとなるとプライドが許さなかったのか。それとも分家に逆らう佳子を許せなかったのか。

高志の不機嫌な顔を思い出す。

彼の乱暴な振る舞いは許せなかったが、嫌々ながらもやって来たのにも関わらず、如月に殴られた彼には少し同情の余地があった。

春人を傷つけたわけでもないし、里の掟を破ったことには、今回は目を瞑ってもいいかもしれない。

佳子はサイドガラスから外の景色を眺めた。

ビルやお店が立ち並んでいる合間を走っている。次々に変わる街並みに目が回るのを感じた。

現在走っている道路は、分岐帯のある2車線道路で幅が広がった。交通量は結構あり、何台も列を作って走行している。信号で停まると、歩行者が何人も横断歩道を通っていた。

普段と変わりのない日常を眺めて、自分が今日置かれたドラマみたいなお見合いの興奮から抜けつつあるのを感じる。

「もし、またどこかにお見合いを申し込むなら、俺にしておきなよ。

便利だよ？」

「はあ？ 私、貴方の本名も知らないんだけど？」

「大丈夫、誰も知らないから。」

「それ意味分からない。」

佳子たちが後部座席に座って、ふざけたやり取りをしている間にも運転手はどこかへと車を走らせている。

如月が佳子に対して不埒な真似をするとは思えなかったが、一体どこへと向かっているのか心配になってきた。

「ねえ、これからどこに行くの？」

「佳子の家。せっかくだから送ってあげようと思って。」

「本当？ ありがとう。」

如月の言葉に安心した佳子は座席に深く座り込んだ。

腰をすっぽりと包みこむ様な座り心地に思わず感心する。

外で車の外観を見た時に高級そうだと思ったが、落ち着いてじっくりと内装も見ると、高級感漂う雰囲気がある。

最近貧乏性が板についてきた佳子は、この車の値段を考えて、決して汚さないように気をつけようと思った。

如月をこっそりと伺い見る。

佳子の視線にすぐに気付いた如月は、にっこりと嬉しそうに笑みを浮かべる。

今日の彼は前回のラフな格好とは異なり、お洒落な身なりだった。

ダークグレーのジャケットの下には襟口が大きく開いて体にフィットした白いカットソーを着て、ボトムスはタイトなラインの黒だ。首から鎖骨へと滑らかなラインがはつきりと露わになっていて、艶やかな白い肌からは色気が漂っているように見える。長い脚を組んでゆったりと座席に腰かけて寛いでいる様子は、とても優雅だった。

心の中でこっそりとため息を漏らす。

「そういえば、今日来るなんて一言も聞いてなかったんだけど…。」

「言っていたら意味ないでしょ。いやー、想像はしていたけど、佳子の驚いた顔は見物だったよ!」

声を立てて笑う如月。

佳子のことを心配して駆け付けてくれたのかと、今回の彼の動機を良い方に一瞬でも考えていた自分が愚かだった。

「もー、人で遊ぶのは止めて!」

結局、自分は彼にとっておもちゃみたいなものかもしれない。

佳子が怒った顔をして、よしよしと頭を撫でられてしまい、如月にはちっとも効いていなさそうだった。

闖入者 2 (後書き)

お気に入り件数がじわじわ増えているので嬉しいです。
読んでくださってありがとうございます。

如月の回想 佳子との出会い 1

如月は佳子の寝顔を見つめる。

車に揺られて気持ち良くなったのか、いつの間にか寝入ってしまったらしく、佳子は微かに寝息を立てていた。

背もたれとドアの隙間に寄りかかるように座っている。

そんな無防備な佳子の姿に苦笑する。

自分が佳子の家に向かっていっているとえば、あっさりと信じるし、自分が何か悪企みをしていると考えないのだろうか。

自分を全く疑わない佳子の能天気さには程ほど呆れる。

まあ、今のところ彼女に何かする気はないが。

如月は自分の上着を脱いで佳子の体に掛けた。

人間は弱い。簡単に病気になったり、怪我をしたりするから厄介だ。自分が人ではなくなって久しくなり、そう云った人間の脆さとは無縁な体になったが、人間の世界に紛れているうちは、それを忘れてはならない。

まだ彼女には元気でいてもらわなくては困る。

自分は彼女の行く末を見届けたかった。

彼女の望む、復讐の結末を。

あれは、3年近く前のことだ。

まだ寒さが続く冬の夜。

何気なく寄った繁華街に、女と歩いていた時だ。

夜が更けて、酒の力により浮かれた人間たちが賑やかに通り過ぎる中、自分の向かいからグレーのコートを羽織った女子校生らしい女が目に入った。

学生だと思ったのは、ボタンが全開のコートから下に着用している

制服が見えたからだ。

こちらに向かつて、俯いたまま覚束無い足取りで歩いてくる。味気ない紺色のナイロン製のバッグを肩から掛けている姿は、まさしく学生そのものだった。

明らかに場違いな姿にも関わらず、すれ違う人間たちは彼女に何の反応も示さない。

一瞬、自分の目を疑った。

自分と同類かと思ったが、その気配は人間のものだった。

それにも関わらず、誰の目にも留まらないのは何故だ。

しかもどういふ訳か分からないが、彼女の存在をそのまま見過ごさずにいられない何かが自分を突き動かす。

いつもなら余計なことには首を突っ込まない性分なのに、近づいてきた彼女に思わず声を掛けてしまった。

しかし、彼女の耳に自分の声が届かなかったのか、何も反応を返してくれず、自分の脇を通り過ぎてゆく。

去りゆく後ろ姿を見て、彼女が髪を後ろで一つに束ねているのに気付いた。

その時、何か心をかき乱されるような、それでいて何故か惹きつけられるような、理解しがたい感情を彼女に抱く。

それが何なのか理解できないまま、彼女から目が離すことが出来ず、無意識のうちに踵を返して彼女の後姿を追っていた。

一緒にいた女を置き去りにして彼女の方へ向かってしまったため、背後で何か文句を言われたが、適当に声を掛けたどうでもいい女だったため、気にも留めなかった。

「ちょっと、いきなりどうしたの?」

女が自分の後をついてきて、自分の腕に絡みついてくる。

思わず舌打ちしそうになった。

「ごめん、他に用事ができたんだ。また今度ね。」

苛立ちを押さええて冷静に別れを告げたが、女はなおも食い下がる。

「えー、なんでよ。そんなことよりあたしと遊ぼうよ!」

察しが悪いらしい。

これ以上付き纏うなら、どうなっても知らないぞ。

殺気を受けて女の方を見ると、女は息を飲んで後退り、逃げるように慌てて去って行った。

「ねえ、その女子校生!」

慌てて追いかけて、彼女の腕を掴んで再度声を掛けると、ようやく彼女は自分に気付いたのか、足を止めて自分を見た。

胡乱な表情を自分に向けてくれた。

その両目が赤く潤んでいるのに、気付いた。

やっとこちらを見てくれたことに安堵を覚えるが、彼女と目が合った次の瞬間、ぞっと背筋が寒くなった。

身体が強張り、動けなくなった。

何故、目の前にいるただの女子校生に、恐怖じみた感覚を持たなければならぬのか不思議だった。

しかし、その感覚は一瞬のことで、すぐに過ぎ去って平静に戻ることができた。

緊張が解けると、何事もなかったかのように自分はわざと人好きそうな笑みを浮かべた。

自分の笑顔が、女性にとってかなり魅力的であることを自覚していたからだ。

「こんな時間にこんなところを歩いていたら危ないよ?」

出来るだけ警戒されないように、優しい口調で彼女を気遣うように話しかけてみた。

「放っておいて。」

彼女は自分から目を逸らして、突き放すように呟いた。

彼女は腕を掴んでいた自分の手を振りほどいて、再び歩き始めた。よほど機嫌がよろしくなくいらしく、自分に声を掛けられて頬を赤らめないばかりか、見向きもしない。

目の前にいる彼女が去るのをこのまま見過ごせば、二度と会うこともないだろう。

そう思うと、何故か彼女を放っておけなくて、後をついてゆく。素気無く断られた場合、次の瞬間その女のことは頭から抜けて忘れ去るのがいつものことだった。

人外になってからというもの、女という存在は顔や体つきが変わるだけで、自分にとってはどれも同じようなものだったのに。

「ねえ、おうちの人は心配してないの?」

「帰るところないの?」

「ねえってば、聞いている?」

前を歩く彼女に話しかけても、何も反応はなく、無視される。そんなつれない彼女にめげずに自分は構い続けた。

しつこい位に話しかけていると、今まで彼女に見向きもしなかった周りの通行人も、制服姿の彼女に注目し始める。

「こんな時間に高校生がなんているんだ?」

そんな呟きが周りから聞こえてきた。

飲み屋や風俗店が立ち並んで営業している中で、まだ年若い彼女が制服を着て歩いていたら、補導してくださいと言っていているようなものだ。

ましてや、彼女に構い続けている自分はそれでも目立ちやすい。

自分の容姿は良くも悪くも人の気を引きやすかった。

多少強引な手段ではあったが、彼女の手を無理矢理取り、連れて歩いた。

「止めて。」

迷惑そうに彼女は言う。

その冷静で淡々とした口調に驚く。

もっと必死になって抵抗されると思ったから、意外だった。

「こんなところにそんな制服姿で歩いたら、捕まっちゃうよ？」

行くところがないなら、俺についてきなよ。悪いようにはしないから。」

彼女からの返事は無かった。

ただ無言で自分に素直に従って、一緒に歩いてくれた。会話も無く、ひたすら目的地を目指して歩き続けた。

自分たちは客待ちタクシーが並んだ通りに出た。列の先頭の車に近づくと、自動で後部座席のドアを開けてくれた。

「乗って。」

自分がそう彼女に言うと、一瞬躊躇したように見えたが、結局自分の言う通りに彼女はタクシーに乗ってくれた。

続いて自分も乗りこむ。

タクシーに行き先を大まかに伝えると、運転手は車を発進させた。

タクシーの中でも彼女は無言だった。

自分も彼女に合わせて無言を貫いた。

色々と言いたいことがあったが、タクシーの運転手に聞かれるのは避けたかった。

彼女は窓から風景を眺めていた。

目的地が近くなり、細かく順路の指示を伝える。

着いたのは、とあるスナックだった。

如月の回想 佳子との出会い 1 (後書き)

なかなかストックが溜まらないので、また一週間後くらいに更新予定です。

如月の回想 佳子との出会い 2

お店に入ると、カウンターにいた店のママがこちらを見て、自分に声をかけてくれた。

店の中には、何人かお客がいて、店の女の子が接客にあたっていた。にこにこ営業スマイルを浮かべていたママは、自分の後ろについてきている彼女を見て、驚いた顔をした。ママがカウンターから出てきて、自分に近づいてきた。

「ちょっと、ボス！」

何、高校生捕まえているの？」

小声でママが自分に話しかけてくる。

「あ、うん。ちょっと訳ありで。

着替えか何かある？」

彼女に着せてあげて？」

「いいけど…。」

ママが躊躇いがちに答えると、すぐ側にいた彼女に視線を送った。自分も彼女の方を見て、口を開いた。

「というわけで悪いけど、夜遅くに制服姿は目立つから着替えてきてくれる？」

彼女は自分の制服姿を見下ろして何か察したのか、素直に頷いてくれた。

店のママは突然の成り行きにも関わらず、お店の女の子を呼んで対応させた。

彼女は従業員と一緒に店の奥へ連れていかれた。

残された自分は、ママによって空いている店の角のL字型ソファ―席へと案内されて、上着を脱いで腰を下ろした。その上着をママが受け取る。

「今日は何飲む？」

あの娘はジュースがいいのかな？」

「そうだね。俺はビールで。」

あ、でも、彼女は何か暖かい飲み物にして。任せるよ。」

彼女は外を彷徨い歩いていた。

彼女の手に触れた時に、冷え切っていたのを思い出したからだ。この寒い季節、どのくらい外にいたのだろう。

ママは「分かったわ。」と答え、上着を持って一度店の奥に行くと、手ぶらで戻って来てカウンターへ入って行った。

ママが飲み物をすぐに持って来てくれたので、一人で飲み始める。しばらくすると、店の奥へ行っていた彼女がお店の子と一緒に戻って来た。

彼女が着ているのは、衿元のレース状のフリルが可愛い軽い素材のワンピースだった。ウエストの高い部分でリボンを結んでいるため、細いくびれが更に強調される。フレアのスカートは膝上の短め、生足にサンダルを履いていた。若く滑らかで健康的な脚は非常に目の保養であった。

顔を見ると、化粧を施されているのか、ずいぶんと垢抜けて、先程

までとは全くイメージが異なり、大人びていた。

無造作に一つに束ねられていた髪は、アップにされて綺麗にまとめられていた。

女はよく化けると云うが、短時間で女子校生から夜の女へと変身したのには、正直驚いた。

ついまじまじと彼女を見つめ過ぎたせいか、彼女は居心地悪そうに立ち尽くしていた。

慌てて「座れば？」と勧めると、彼女は素直に従い、ソファアの端に腰かけた。

自分とは少し距離を置かれた。

どうして彼女をここまで連れて来てしまったのか分からなかった。

自分は彼女に対して何かしたいわけでもなく、ただ気になるという一点だけで、明確な目的も無かった。

横にいる彼女を盗み見ると、彼女は前の方に視線を彷徨わせていた。視線の先にはテーブルが置いてあるだけだ。

そのテーブルの上には自分が飲んでいるビールとつまみ、おしぼりが置いてある。

物憂げな表情の下で、何を考えているのか分からない。

側にいる自分に興味を示してもくれず、彼女の無関心さに漠然とした不安を感じる。

彼女は何も話さない。自分も同じように話さなかった。

ただ黙ってソファアに座っているだけだったので、先客たちの声がよくフロアに響いていた。

彼女との間に流れる沈黙に、居心地の悪さを感じた。

いつもなら当たり前のように出る女性に対しての褒め言葉を、お洒落に着飾った彼女に対して言っていなかったと、後になって気付いた。

ちょうどママが彼女の為にお茶を運んできてくれたので、彼女が「いただきます」と言って飲み始めた。それが話しかけるきっかけになりやすかった。

「その格好、似合うね。綺麗だよ。」

…無理矢理連れて来てなんだけど、おうちの人には心配してない？」

彼女はゆっくりとこちらに首を向ける。

「大丈夫。」

彼女が答えてくれて、会話が成り立ったことに、何故か安堵を覚える。

「それならいいけど。」

それにしても、どうして一人であんなところを歩いていたの？」

彼女はその質問には何も答えず、自分をしばらく見つめた。やがて、暗い表情で薄く笑った。その笑いに、また背筋がぞっとした。

「さつきから質問ばかり。」

聞こえてきた台詞は、自分の行動を揶揄するものだった。気分を害してしまったのかと、内心不安が走る。

何故、こんな小娘に気を遣うのか、自分の感情の変化が不思議だった。

「ごめんね。鬱陶しかった？」

「ううん。そうではないの。でも、いちいち質問に答えるのは、今は辛くて。」

彼女は首を横に振って答えてくれた。

持っていたお茶をテーブルの上に戻す。

今の彼女は会話をしたい気分で無いことが分かった。

それじゃあ、どうすれば間が持つのだと考えた時に、彼女が手を動かすのが目の端に入った。

良く見ると、彼女は右手を動かして目元を押さえていた。

彼女の頬に一筋の涙が流れていた。

声を殺して彼女は泣いていた。

鼻を吸る音が微かに聞こえる。

どうしようと焦った。

そして、焦る自分に驚く。

泣いている女がいたら、とりあえず肩に手を掛けて抱き寄せて優しく扱えば、それで良かった。

それで大抵の女は、安心して自分に身を寄せてきて、良い雰囲気の流れ込んでいた。

すでにパターン化した行動にも関わらず、それを実行するのに躊躇う自分。

今の彼女の気配には、自分を気安く近づけさせない何かがあった。

肩に手を伸ばして抱き寄せようなどと、恐れ多い気がした。

今日の出来事を振り返って、彼女と会ってからの自分は、はっきり言って奇怪しい。

彼女に対してどう接するのが一番よいのか分からなくて、泣いている側で、情けなく自分はただ座っているだけだった。

どのくらい時間が経ったのだろうか。
気付いたら、彼女は自分で涙を止めていた。

「えーと、ごめんなさい。」

彼女が突然謝って来た。

「どうして謝るの？」

「突然泣きだしたから、困ったかなと思って。」

彼女は答えながら、テーブルの上にあるおしぼりで目元の涙を拭いていた。

確かに対処には困ったが、会った時に目が赤かったので、泣きたいほどの理由を既に抱えていたのは分かっていて。

だから、彼女が泣くことについては特に問題を感じていなかった。

「泣いて気持ちが落ち着いたらなら、それでいいんだけど。」

「うん。」

自分を見る彼女の表情が少し柔らかくなっているのに気付いた。
彼女と目が合う。

自分は彼女を安心させるために笑みを浮かべた。

そんな自分を彼女は凝視している。何か自分を見定めているような目つきだった。

そんな彼女の様子が気になり、どうしたのか尋ねようとしたら、彼女の方が先に口を開いた。

「貴方、人ではないのね。」

はつきりと言いきられた。
確かに自分は人外の者だ。

しかし、普通の人間には見えない曖昧な存在の妖怪たちと比べて、自分は普通に人目に触れるし、人間と紛れて暮らし、人間のように振舞っている。

自分から暴露するまで気付かないか、よほど能力が高い者でもない
と見破られたことがなかった。

「よく、分かったね。」

内心の動揺は隠して、答えた。

彼女はきつと恐ろしいほど能力が秀でている。

「人間ではないけど、お前をどうしようと思っただけ連れてきたわけじゃないよ。」

「そうみたいね。」

ある程度は信用されてきているらしい。

「何か辛いこともあったの？」

「良ければ力になるけど…。」

口にしてから自分が言った言葉に驚いた。

力になるって、彼女に協力して自分に何の得があると云うのだ。

ただ夜中に歩いていた女子高生が気になって声を掛けてみただけなのに、ここまで首を突っ込む必要があるのか。

しかし、彼女の顔が再び暗くなってしまったのを見た時、感情がざ

わめいた。

彼女は下唇をきつく噛んで、何か辛い感情を堪えているようだった。また泣きだしてしまうのではないかと思った。

「悪かった。嫌なら答えなくていいよ…。」

思わず謝ると、彼女は首を横に振った。

「いいの。いきなり泣いてしまって、貴方が気になるのも無理はないと思うし。」

「最近ね、父を亡くしたのよ。」

家族が亡くなれば、悲しいのは当たり前だ。

人間だった時から理解している感情。

それで彼女が泣いていたのかと、納得した。

しかし、どうしてあんな遅い時間に一人で歩いていたのだろうか。

何か他に事情があるように思えた。

「車の事故だね。…数日前のことよ。」

彼女は再び鼻を睨った。

「父の車が崖から転落して、乗ったまま車が燃えてしまったみたいで、」

彼女は言葉を紡ぐように、必死に語ってくれた。

「誰とも分からないような姿になってしまったわ。」

自分は彼女の話に頷く。

自分はあえて何も話さず、彼女が気持ちを整理して言葉にするのを待った。

「急に父が亡くなって、悲しくて、幽霊の姿でもいいから一目会いたくて、父が亡くなった現場へ行って見たの。」

自分の本性を見抜いた彼女のことだから、幽霊を見るのは当たり前のことだろう。

彼女は只者ではない。自分がこんなに調子を狂わされるのは、恐らく彼女のせいだ。

「探してみたけど、…父にとうとう会えなくて。」

諦めて帰ろうとした時に、そこで妖怪に出会ったの。」

妖怪か。

人間には警戒して通常ならば目にすることは少ない。

自分から姿を現す妖怪を珍しいと思った。

「その妖怪は、何て言ったと思う?。」

彼女は自分を覗き込む。

彼女の瞳に自分が映っているのが見えた。

彼女の質問の答えを、全く想像ができなかった自分は、黙ったまま首を横に傾けた。

それを見て、彼女は口を開く。

「それは、父が殺されるのを見たって言ったのよ…。」

彼女は絞り出すように言った。

彼女の父が殺された。

その事実にも、彼女がさらに苦しめられているのだと知った。

如月の回想 佳子との出会い 2 (後書き)

読んでくださりありがとうございます。

毎日は無理ですが、なるべく早い更新を目指したいです。

忘れ物

如月に起こされて、自分がいつの間にか気持ちよく寝てしまっていたことに気付いた。

「もうすぐ着くよ」と彼に言われて、現在どこにいるのか、自分の脇の後部座席のドアの窓から確認する。

水滴で濡れた窓で、雨が降っていることに気付く。

暗い空から次から次へと雨が降り注ぎ、視界がぼやけて見える。

目を凝らすと、見慣れた山道や街路灯が目についた。

自分が住む屋敷へと続く、舗装されていない砂利の坂道を、ゆっくりとヘッドライトを点けた車が上っていた。

「寝かせてくれてありがとう。」

深く座席に腰掛けた状態だったので、体を動かして佇まいを直す。そして、如月が着ていたはずの上着が自分の体に掛かっているのに気付いた。

全く肌寒く感じなかったのは、これのお陰だったのか。

「上着もありがとうね。」

でも、如月が優しすぎて恐いんだけど。」

そう言いながら、佳子は上着を如月に返した。

「俺の優しさは一応プライスレスだよ？」

面白そうに目を細めて如月は笑う。

「もし後で請求来ても踏み倒すわよ。うち貧乏だし。」

「請求するつもりもないけどさ。」

それに、お金が無いなら、俺に対してなら体で払ってくれてもいいんだよ?」

「痩せているから食べても美味しくないわよ。」

佳子は目つきを剣呑にして如月を睨みつけた。

佳子たちが乗った車は、屋敷の前まで辿りついた。

玄関前の広い庭の空間に駐車する。

降りようとしたが、外は雨だったため、家へすぐに入るために、事前に鍵を取り出そうと、自分のバッグを探した。

そこで、バッグがないことに気付いた。

佳子は青ざめた。

最後にバッグを見たのは、どこだったか。

佳子の頭の中で、急いで今までの行動が逆再生される。

如月に連れ去られた時は、すでに手ぶらだった。

高志の時も、手ぶらだった。

レストランに移動して、席についた時に、空いている席にバッグと上着を置いたのを覚えている。

もしかして、両方ともレストランに忘れてきた?

シヨックで言葉も出ない。

バッグの中には財布が入っており、その中には大事なお金と、銀行のキャッシュカードが入っている。

しかも、バッグは亡き父が誕生日にくれた、自分にとっては父から貰った最期の贈り物だった。

上着も他所行き用に購入して、結構いい値段がしたものだった。

「どうしたの?」

動きが止まった佳子に如月が怪訝な表情で尋ねてきた。

「如月…、どうしよう。」

ホテルのレストランにバッグと上着を忘れてきたみたい。」

佳子は今にも泣きそうだった。

如月はズボンのポケットから携帯電話を取り出すと、どこかにダイヤルする。

「もしもし。1階にあるレストランにつないで欲しいんですけど。」

…あ、すみません。今日、2時頃にそちらに来た一上佳子と云う者がバッグと上着を忘れたみたいなんですけど、そちらで預かっていますか？ え、無い？ 連れが持って行った？ あ、そうですね、ありがとうございます。」

如月は電話を操作して、会話を終了した。

どうやら、今日佳子が行ったホテルのレストランに電話をかけて問い合わせてくれたようだ。

しかも、会話の内容から誰かが持って行ったらしい。

連れというと、春人だと考えられるが、本当に彼なのだろうか。もしかしたら、高志ということも考えられる。

どちらが持つて行ったにせよ、どうやって返してもらおうか。

ホテルにある方が、心理的に取りに行きやすかった。

彼らには顔を合わせづらい。

「聞いていて分かったと思うけど、ホテルのレストランには無いみたいだよ？」

「うん、訊いてくれてありがとう。」

後は自分で探してみる。」

「ごめん、俺も荷物まで気が回らなくて。」

「うん。私もすっかり忘れていたから、どうしようもないわ。送ってくれてありがとう。またね。」

「うん、またね。」

佳子が後部座席のドアを開けて、車から降りる。

暖かくエアコンの効いた車内から風雨が吹きつける外に出て、思わず佳子は身震いした。

雨脚は強く、あっという間に佳子の体が濡れる。

急いで玄関の軒下に走った。

玄関の引き戸を叩いて、「佳子よ。開けて。」というと、戸にある曇ガラスから黒い影が動くのが見えた。

そして、ガチャガチャと鍵を操作する音が聞こえて、戸が自動的に少し開いた。

そうしている間にも、如月たちが乗った車は車体の向きを転換させて帰って行った。

一人残された佳子は引き戸を自分が通れるように開けると、中に入っ

て行った。土間に入って玄関の電気を点けると、あちこちに散らばっていた小さい黒い影たちが一目散に物陰に隠れていった。

「ただいま。」

中に声を掛けると、屋敷の奥から「おかえりなさいませ。」と声が複数した。姿は見えない。

今日はシロに夕飯を頼んでいなかった。お見合いがどのくらい長引くか、先が見えなかったからだ。結局、蓋を開いてみれば、お見合い開始直後に連れ去られて、ほとんどホテルにいなかったのが現状だった。

春人と少ししか話せず、彼が車の免許を夏休みに取得したばかりで、運転が割と好きだと云うことしか知りえなかった。

10分も話していただろうか？

本当にただ単に行って帰ってきただけだ。しかも大事なものを忘れてくると云う始末。

お見合いなど、今後どこにも申し込みたくない。

自分が失ったものを思うと、高すぎる勉強代だと感じた。

靴を脱いで居間へ行くと、電話器の留守電ボタンが点滅していた。

自分の外出中にどこからか電話が掛かって来たらしい。

電話器を操作して、着信情報を確認する。

佳子の家の電話はナンバーディスプレイの契約をしていたため、相手の電話番号が分かるのだ。

使いなれてしまうと便利な機能なので、月々の使用料をケチって解約はしていなかった。

着信件数は二件、最初の一件は母の実家からで、もう一つは公衆電話からだった。

電話器に残されたメッセージを再生する。

「メッセージは二件です。」

続いて、日付と時間を機械が述べる。

「私です。帰ったら電話を頂戴。」

母の声だった。

今日のお見合いについて何か言いたいのだろう。
どうせ佳子にとってはロクでもないことしか言われない。無視する
ことにした。

次のメッセージが残された日付と時間が聞こえてくる。

「五月です。」

聞こえてきた声に、心臓が止まりそうになった。
春人の声だった。

「佳子さん、ご無事ですか？」

佳子さんのバッグと上着をこちらで預かっています。今晚よろし
ければご連絡ください。

電話番号は、 - - です。」

落ち着いた声のトーンだった。

そこから彼の感情を読みとることは難しかった。
今日のことを怒っているのか、それとも心配してくれているのか。

佳子はメモ帳とボールペンを手に取った。

もう一度メッセージを再生して、春人が話す電話番号を紙に記入す
る。

もともと、謝罪はするつもりではあった。

時間と経費を佳子の都合でかけさせてしまった拳句に、途中で佳子
本人がいなくなってしまうのだから。

既に迷惑をかけているのにも関わらず、春人が保管している忘れ物
を返してもらえるように、厚かましくもお願いしなければならぬ。
春人は佳子のために、これ以上何かしら手間を掛けてくれるのだろ

うか。

気まずい相手をお願いするのは、大変気が重い。

上着は何とか諦められても、思い出のバッグとその中身は取り返したかった。

背に腹はかえられない。土下座覚悟で（電話だから見えないが）誠心誠意謝ろう。

佳子は自分の迂闊さをこの時ばかりは恨めしく思った。

如月の執着

「お前はあの女をどう思う？」

佳子を家まで送り届けた後、彼女がいなくなった車内で、如月は運転手に話しかけていた。

運転手は如月の部下で加藤かとうという名前であった。

彼がまだ子供である頃から如月は知っていた。加藤の父もまた如月に仕えていた。

「どうと言われましても…。」

真面目そうなお嬢さんですね。」

加藤の無難な返答を聞いて、如月は苦笑した。

彼女の野暮ったい眼鏡からそんな印象を持ったのだろう。

「でも、その…。」

「でも、なんだい？」

「ボスの相手には役不足な気がしますが…。」

「そうかい？」

気に入った女をそのように評価されても如月は気にしてなかった。

彼女の外観だけで構っているわけではなかったからだ。

如月は微笑みながら、バックミラー越しに加藤を見た。

あたりは暗くなっていたので、昼間はあったサングラスが顔からなくなっていた。

人間である加藤に、自分と同じように彼女の特異性を感じることが出来るのか、試して感想を聞いただけだった。やはり普通の人間には、彼女の価値は分からないようだ。

「彼女は俺が人間じゃないって、気付いたんだよ。」

「へえ、そうなんですか！」

意外に普通の子っぱいのに、あの子はそっち系の人だったんですね。」

能力者たちの多くは、一般人と比べて独特の個性を持っていることが多い。

特に能力が桁外れの場合、その力に振り回されたり、溺れたりすることが多いため、人格にまで影響が出て歪んでしまった人間を如月は何人も見た。

しかし、彼女の場合は、そう言った側面が全く見えなかった。

加藤の言わんとしていることが、如月には良く分かった。

そもそも彼女自身、一族に伝わる能力をあまり使わない。女は外では働かせないという一上家の慣わしがあるらしく、基本的な力の使い方は親から習ったものの、実地に出ることはなかったため、経験を磨く機会が乏しかったらしい。

ただ、日常的に妖怪の類が彼女を慕って集まってくるため、そういうったモノたちへの扱い方には長けていた。

鬼となった自分や、妖怪と呼ばれる人外存在に対して、彼女が持つ何かが作用するらしい。

酷く己を惹きつけてならない、不思議な何か。

意識して妖怪と仲良くなりたいと考えているわけでもないのに、向こうからいつも彼女に近づいてくるらしい。

自分も彼女にしつこく付き纏ってしまったのを考えると、彼女の気を引こうと、妖怪たちからいつもあんな目に遭っているのだろう。

それにしても、一人の人間に執着するのは、人外になって初めてだった。

彼女がいるだけで、心が高揚する。

真つ黒な胸の中に、滲むように明かりを灯してくれた。

光を求めて集まる夜の蝶のように、彼女を追い求め、その気持ちは段々と膨れ上がっていった。

貪欲な欲望を満たすために、自分は動いた。

まず、彼女とは友達みたいな関係を築くことに成功した。

浅ましい下心を時折隠すのに失敗しながらも、冗談を交えつつ誤魔化し、警戒をされない範囲で接しているうちに、彼女の安全圏内に入り込んでいった。

彼女の信頼を裏切らないようにし、助力を尽くしてきた賜物だ。

暗がりに身を置いた自分と、普通に暮らす彼女とでは、酷く立場がかけ離れているし、一上の一族として彼女自身を縛っているものはとても多すぎる。

それに、彼女の心の隅には、亡くなった父親が常にいる。

父親を残酷な目に遭わせた者たちに対する怒りが、彼女を復讐へと駆り立てている。

それがある限り、他のことで気持ちを占める余裕はないはずだ。

今のままでは決して手に入らないから、彼女が復讐を望んだ時に、迷わず手を貸すことを決めた。

自分と同じように、数多の屍を築けばいい。

報復という名の殺戮で、彼女の両手が血に染まった時に、今までの居場所に決して戻ることが出来なくなる。

彼女は全ての柵しがらみから解放されるのだ。

その時に彼女を導けばよいのだ。
自分のもとへ。

ああ、その時が待ち遠しい。
それまでは、彼女に余計な虫がつかないように、せいぜい気を付けるようにしよう。

その気もないのに、男を家に泊めようとするなど、彼女は抜けていくところがあるから危険だ。

泊るかと誘われた時は、嬉しすぎて思わず顔がにやけてしまったが、念のために確認したら、やはり彼女は自分とは寢床を共にするつもりがないようだった。

まだ手を出さず段階ではないので、惜しみつつも辞退したが、彼女に忠告をしっかりとしておいた。

脳裏に浮かんだのは、今日の彼女の見合い相手。

見た目は良かったが、自分によって簡単に女を奪われる男である。

所詮、自分にとっては取るに足らない存在だ。

彼女に去られて道端で所在なげに立ち尽していた彼を、内心嘲った。

残された口実（前書き）

春人視点です。

残された口実

佳子が黒い車でホテルから連れ去られてしまった後、春人はホテルのレストランへ戻るべく踵を返した。

車の中から佳子の「大丈夫」という声が聞こえたので、最終的に強引な救出は控えたのだが、その判断は正しかったのか不安が残った。一般人が多くいる中で、自分の特異な能力を使えば、秘匿の錠を破ってしまうことになる。

連れ去られた佳子自身、能力を使用しているようには見えなかった。ので、彼女の身に危険はなかったと推測できるのだが、突然のことで正しく状況を把握できていたのか、分からなかった。

最初に現れた一上高志は同じ里の人間なのでよく知っていたが、最後に現れた男は誰なのだろうか。

佳子とどのような関係なのか情報が全くなかった。ので、何とも言えない。

レストランの前には、まだ高志が立っていた。

春人が近づくと、例の男に殴られた頬を痛そうにさすっていた。

「お互い、いい面の皮だな。」

高志が自嘲気味に言った。

どういう意味か図りかねていると、春人の沈黙を肯定と受け取ったのか、高志は続けて語りだす。

「おおよそ、あつちの男が本命だったんだな。

お前に負けないくらい顔の良い男だったぞ。

結局、お前はあて馬程度の存在だったんだ。まともにあいつの相手をして馬鹿を見たな。

全く、今回のお見合いと云い、家出と云い、あいつは人騒がせな女だな…。」

「家出？」

高志の言葉が引つ掛かり、春人が口になると、高志はしまったと言わんばかりの気まずい表情を見せた。

高志は感情が顔に出やすいようだ。

「こつちのことだ。なんでもない。

じゃあな。」

高志は追及を逃れるように、春人に背を向けてさっさと出入り口に向けて歩き出した。

もつと詰られると思っていたが、意外ほど呆気なく高志は去って行った。

最終的に佳子が別の男と消えて、春人は面目丸つぶれとなったし、高志自身は嫌味をすっきり吐き出して気が済んだのもあったかもしれない。

“ あつちの男が本命 ”

先程、高志の言った言葉が胸に刺さっていた。

佳子を最終的に連れ去った男の顔を春人は目撃していなかった。

高志が殴られた際に、彼が自在に操っていた妖怪の術が解けたらしく、春人は妖怪から解放されたが、すぐに佳子たちの後を追おうとしたところで、「すいません、お会計を！」と男性のスタッフに止められて足止めを食った。

財布から一万円札を取り出して、レジのカウンターに置いて釣りを貰わずに、急いでレストランを出たら、目の前で高志が床に座り込

んでいたのに驚いた。

慌てて周囲を見回すと、佳子が男に引つ張られてホテルから出てゆく後ろ姿を発見した。

周りの目を気にして普通に走って追いかけたが、結局間に合わなくて、速度を上げて彼らが乗った車は去ってしまった。

一瞬車体の横側に並んだ時に、後部座席を覗いたが、窓にスモークフィルムが貼られていて中の様子を確認できなかった。

色々と気持ちの整理がつかなくて、しばらく呆然とレストランの前に立っていたら、さつき春人を呼びとめたスタッフが中から出てきた。

「すみません、先程のお釣りなんですけど……。」

恐縮しながら、春人にレシートとお金を渡してきた。

この会計のやり取りがなければ、佳子たちに追いつくことが出来たかもしれないのに。

思わず眉間に皺が寄った。

「あ、あとですね、お連れ様の忘れ物がございまして……。」

春人の不機嫌な顔に気付いたのか、強張った笑みを浮かべながら、スタッフは女物の上着とバッグを春人の前に差し出した。

「これらは、いかがいたしましたでしょうか？」

「こちらで預かった方がよろしいですか？」

春人はそれらの物が佳子の物であることを思い出した。

彼女は隣の空いている席の上に、荷物を置いていた。

「いえ、私が彼女に返しておきますので。」

そう言って、春人は荷物を受け取った。

これを返すのを口実に、再び彼女と接触を図ればよい。
春人は、そう考えた。

報告の電話

五月慶三郎さつきけいざぶろうは、自宅の一階の居間にいた。

本日は日曜日だったため、営んでいる道場は休みだった。特に急ぎの仕事もなかったため、久しぶりに家の中で家族と寛いでいた。

浴衣姿の慶三郎はソファの上に座り、その膝の上には一人娘なの陽菜ひが座っている

娘は1歳とまだ小さく、音の鳴る玩具を両手で持って、夢中になっ
て遊んでいた。

可愛い盛りで、何をしても見ている微笑ましかった。

時計を見ると、2時半ば頃だった。例のお見合いは2時の予定で、
今頃二人で会っているはずである。

性格にかなり癖のある義弟のことだったから、佳子と巧く会話をし
ているかどうか気がかりだった。

そんな時に居間にあった電話が鳴りだした。

誰だろうと思ひ、陽菜をソファの空いているところに座らせて、
受話器を取りに行った。

「もしもし、五月ですが。」

『あ、義兄さんですか？ 春人です。』

「春人か？」

「お前、お見合いはどうしたんだ？」

まだ三十分くらいしか経っていないのに、家に電話を掛けてくると
はどういうことだ。

『それが、佳子さんが連れ去られてしまいました…。』

「連れ去られた？ 一体誰に？」

『分かりません。』

別々に二人の男が現れまして、一人目は一上高志だったのですが、二人目は顔を確認できませんでした。しかし、一上も知らない人物だったようなので、里の者ではないようです。その人に佳子さんを連れ去られました。』

その後、春人から更に詳しい状況を聞きだした。

一上佳子が抵抗をしなかった状況を聞くと、その男に連れ去られても、彼女に危険はなさそうだった。

その男と彼女の関係が気になるところだったが、ここで話しても推測にしかない。

「お前たちを出し抜いて、連れ去るとはその男も結構やるな。」

『はい。』

「ちなみにその男の車のナンバーは覚えているか？」

『はい、ナンバーは記憶しております。』

「じゃあ、ちょっと教えてくれ。所有者を確認してみる。」

春人から車の車体ナンバーを聞きだして、電話器の側にあったメモ帳に記した。

『とりあえず、これから戻ります。』

「ああ、気をつけるよ。」

電話での会話が終わり、受話器を本体に戻した。

その時、台所から妻の夕輝ゆづが家事を終えて、居間へと入って来た。出会った頃から変わらぬ美しさを備えた自慢の愛妻。

子供を産んでから、ますます女性らしい官能的な曲線を描いた体つきとなり、他愛もない仕草に色情をそそられる。

付き合ってから何年も経っているのに、自分を虜にして離さない。

今日は同居している親父おやじが、趣味の囲碁仲間の所へ出かけていて留守にしている。

娘の陽菜もそろそろお昼寝の時間だ。

さて、どうしようかな？

「春人のお見合いが終わって、これから帰ると連絡があつた。」

とりあえず、慶三郎は家族である春人の状況を夕輝に教えた。

夕輝は慶三郎の言葉を受けて、壁に掛けてあつた時計を確認した。

「もう終わったんですか？ 早いですね。」

夕輝は返事をしながら、足元までやってきた陽菜を抱きあげた。

「妨害があつたようだ。」

「里中に今回のお見合いの噂が広まっていましたしね。一上家の耳にも、もちろん入つたんでしょう。」

夕輝は一上家から妨害を受けてお見合いが中断されたと思っているようだ。

慶三郎が春人から聞いた話を夕輝にも伝えたと、ポーカーフェイスが常の妻にしては珍しく、考え込むように眉間に皺を寄せた。

「彼女とお付き合いのあった男性でしょうか。」

「どうだろうね。情報が無さ過ぎるから何とも。しかし、一上家の当主はどうも身边が賑やかだね。」

「そうですね。」

ふと陽菜を見ると、眠そうに大きな欠伸をしていた。

「そろそろお昼寝の時間かな？」

母親に甘えているのか、陽菜は顔を夕輝の体に押しつけていた。

「寝かしつけてきます。」

夕輝は陽菜を抱えたまま、居間の隣にある仏間に向かって歩いて行った。

慶三郎たち親子は、夜は自室の二階で就寝しているが、娘のお昼寝の時は仏間に長座布団を敷いて寝かせていた。一階だと目が届きやすいからだ。

「蒔いた餌に食らいついたか…。」

慶三郎は腕を組み、独り言を呟いた。

今回のお見合いの話を里の人間に話して噂を広めたのは意図的だった。

一上の本家と分家の本心を探るためだ。

一上当主としての佳子と顔を合わせたのは、今年の夏のことだった。

盆祭りの前に寄り合いがあり、そこでお目に掛かった。

彼女が当主に就任してから3年近く経ってからだった。

分家の主である一上元はじめに従うように現れた彼女。

病気の療養のために里へ顔出しが出来なかったと言っていた。先代が事故で亡くなり、しかも継いだばかりの娘は、病に倒れ、よくも不幸が続いたものだ。

地味な眼鏡をかけて、真面目そうでおとなしそうな印象の若い女性だった。

21歳だと聞いていたが、童顔なのか、それよりも若く見え、成人しているように思えなかった。

大きな声で偉そうに話す一上元の脇に、言葉少なに座っていた彼女は、華奢で気が弱そうな上に、分家に柔順そうだったので、あまり良い印象を持てなかった。

盆祭りの後、一か月くらい経った頃に、二木喜美子ふたつき きみこが仲介人として今回のお見合いの話を持ってきた。

正直驚いた。

喜美子の末妹の美智子は、一上の本家に仕える坂井正の嫁だ。

佳子本人に頼まれたと、喜美子自身が釣書とお見合い写真を持ってきた。

二木家は女系家族だったため、長女の喜美子が婿養子に今の旦那を迎えていた。

当主として集まりなどに喜美子は出席していたので、自分とは顔をよく合わせていた。

恰幅が良くて美人ではないが、笑顔の絶えない愛嬌のある顔つきをしている。明るく気さくな彼女は、険悪な雰囲気になりやすい集会でも、よく場を和ませてくれたり、宥めてくれたりと、大変ありがたい存在であった。

「一上家は親族としか結婚しないんじゃないですか？」

里の中で有名な話だったので、思わず尋ねると、喜美子は意味深な含みのある笑みを浮かべた。

「佳子さんは、分家とは結婚する気がないようですよ。」

奉納試合で優勝した五月家の息子さんが気に入ったみたいで。」

ああ、要するに春人の顔に一目ぼれしたわけだ。

慶三郎は全てを理解した。

春人の為に、一族の慣わしを蹴つ飛ばそうとしている彼女に少し好感を持った。

しかし、一上家と云うだけで胡散臭さがプンプンする。

そもそも、おとなしそうな彼女に分家に逆らうなどと恐れ多いことが出来るのだろうか。

一上の分家には嫌な思いを散々させられていたため、今回も揉め事になる前にさっさとお断りしても良さそうだったが、少し考えるところがあり、意見を改めた。

「ちょっと、本人にも確認したいので、お返事は待ってください。」

「おほほ、色よい返事を期待していますわ。」

佳子さんは、妹の美智子みちこの話ですと、亡くなった父親に似て温厚で優しい方だとお聞きしております。

お会いになるだけでも結構ですよ。よろしくお願いしますね。」
裏を返せば、分家出身の母親の方は、温厚で優しくはないらしい。
含んだ物言いに、苦笑してしまいそうになるのを堪えた。
喜美子はよほど今回のお見合いを応援したいのか、話している最中
は始終上機嫌で、佳子本人をお勧めしていた。

一上の分家は山代の里の中でも裕福で羽振りの良いことで知られて
いた。

投資や商売がうまくいっているという話だが、妬みからか、あまり
良くない噂もされている家である。

五月家に密告のように封書が届いたことさえあった。

大きい屋敷の切り盛りは全て一族だけで行い、他所の人間を決して
雇い入れない。

屋敷は高い塀で覆われていて、外からは中の様子は伺い見ることは
できない。さらに、その内部は警備として術により操られた妖怪
つまり使鬼たちが多く配置されていて、不法な侵入を固く拒んでい
る。

親族間で婚姻を繰り返し、決して内情を公にしない閉鎖的なやり方
は、その噂に真実味を密かに与えていた。

その分家の子飼いの犬と化していた本家。

本家は分家の支配に完全に置かれていた。

山代の里とのやり取りもほとんど分家を通して行われているし、当
主が出席する集まりにも、当主代理として分家の主が顔を出してい
た。

その本家の人間が、何の脈絡も無しに五月家つちにお見合いを申し込む
のは、分家の指図である可能性もあった。

どんな思惑にせよ、一上家によって弄ばれるのは御免である。

それにも関わらず、お見合いを一蹴しなかったのは、一上家に探り

を入れる絶好の機会だったからだ。

強固な城郭に、侵入の糸口を見つけた気がした。

お見合いの顔合わせだけで、結婚しなくてはならない道理はない。面倒なことになる前に断れと親父に言われたが、自分の考えを伝えるとき、“それで一上家の弱みを見つけられるのならば”と、了承してくれた。

とりあえず、喜美子に会ってみたいと返事をした。

お見合いの情報を噂として流して、当日に分家がどのような動きを見せるのか、調べることにした。

お見合いを申し込まれた春人に、諜報員としての役割を与えて、佳子の真意を訊き出すように指示を出した。

向こうが本気だった場合を考慮して、相手に期待させるようなことは口にするなと念を押しておいた。

外面の派手さとは裏腹に、春人は他人に関心が薄く、寡黙で一人であるのを好むタイプだったため、諜報員としては向いていなかったが、修行と思つて今回は送りだした。

別に失敗を許されない任務ではないし、情報を得られれば運がよいと考えていた。

意外にも、本人は今回の仕事に対してやる気で、“お見合い結婚のススメ”、“お見合い完全マニュアル”というタイトルの本を、部屋で真剣に読んでいる姿を見かけた。

その場から移動して声を殺して笑っていたら、通りがかつた妻に不思議な顔をされた。

春人は養子として受け入れられた五月家に対して、恩義を感じているのか、親父や自分から言いつけられたことを完璧にこなそうとするところがあった。そのせいか、今回の仕事も自分に足りないところを補おうと、方向性は若干間違っている気がするが、勉強しよう

としていたようだ。

他人に興味を示さなかった春人に、人付き合いに対して関心の目を向けさせることができて、義弟にとって良い方向に進んでいると思うと、少し嬉しかった。

これを機に人との接点を増やして、もっと多くの人と親しい人間関係を築いて欲しい。

お見合いに乱入してきた高志と佳子の会話から、本家と分家の対立関係が読めた。

一族の定め通り、結婚話を進める分家と、それに逆らう本家の佳子。彼女は本気で春人との結婚を望んでいるのだろうか。

それにしても、最後にやってきた謎の男のせいで、状況が読みにくい。

五月家はもとの血筋は絶えた家系だった。

跡を継がせるために、全く異なる血筋から後継者を選んだ。

それが親父だった。

自分にとっては祖父にあたる人は、他所から来た才能ある親父を養子にしたのだ。

ちなみに五月家の中で養子をとったのは、親父が初めてのことでない。それでも里以外の出身の者を迎え入れたのは初めてのことであった。

代々血統が続く一上家にとっては、それが面白くないらしい。

ことあるごとに他所者呼ばわりして、里の運営に当主として顔を出していた親父を見下していた。

親父の一上家に対する嫌悪感は、隠居後でも凄まじい。

親との関係が拗れた春人を五月家に養子として迎え入れた時も、“他所者が”と嫌味を言われていたのを思い出す。

慶三郎は三男であるにも関わらず、当主として据えられたのは、上の二人の兄の能力が、いまいちだったからだ。

遺伝する確率は高いが、親がそうならば、必ずしも子にも伝わるものではない。

五月家が絶えたのも、そういう事情があったのことだった。

それにも関わらず、一上家が長きに渡って血と能力を維持しているのは、相当な尽力や犠牲を要しただろう。だが、それが五月家うちを貶めてよい理由にはならない。

奉納試合でも決勝戦前に、祭りの関係者を装った男に騙されて春人が納屋に閉じ込められるという妨害があった。顔を隠した親切な人に助けられて、幸いにも不戦敗にならずに済んだらしいが、これも一上家の嫌がらせに違いなかった。

決勝戦の対戦相手は一上高志。一上家の人間だ。

今回のお見合いの件と云い、よほど妨害が好きなようだ。

佳子が忘れ物をしたので、夜にでも連絡をしてくれるように電話の留守番にメッセージを残したと春人は言っていた。

一上家の内情を探ってもらうために、春人にまた頑張ってもらわなくてはならない。

慶三郎が一上家に探りを入れようと決めたきっかけは、一通の手紙だった。

一上家の先代当主が亡くなって数日後に、五月家に封書が届いていた。

差出人がないため、用心しながら封を開けると、次のことが書かれていた。

“一上家は一の掟を破っている。一上健一”

けんいち

掟とは、里で順守しなければならぬ決まりごとだ。

いくつもあるが、その一つ目に“暗殺を生業としないこと”とある。それを破っているということは、一上家は密かに暗殺を請け負っているということとなる。

そして、一上健一とは亡くなった先代当主の名前だった。

何故うちにそのような手紙が届いたのか。

一上家に噂される一つに、そのようなことが無いわけではなかった。真実はどうであれ、故人の名前を使うとは、悪戯にしては非常に性質が悪いものであった。

だから、3年近く経った今でも、その手紙のことを覚えていた。

その一上健一の一人娘の、分家への突然の反旗。

そして、今回のお見合い話。

何やら不穏な気配がするのは気のせいだろうか。

報告の電話（後書き）

おまけ（R15）

慶三郎が物思いに耽っていると、娘の陽菜を寝かしつけた夕輝が居間へと戻って来て、ソファーにいた自分の隣に座った。

「これから買い出しに行くんですけど、今日の夕飯に食べたいものはありますか？」

いつも通りの無表情だったが、こちらに向ける眼差しは柔らかい。炊事は夕輝と春人で分担していたが、今日は義弟が外出していたので、妻が作る予定だった。

手を伸ばせば簡単に届く距離に最愛の妻がいて、隣に娘が寝ているとはいえ、この部屋には現在二人きりである。

「夕輝が食べたい。」

「え？」

夕輝を抱き寄せて、口付けた。

最初は唇を味わうように感触を存分に楽しむ。そして、調子に乗って舌を使って彼女の唼内を弄ぶと、彼女が抵抗して体を離そうとするので、そのまま体重をかけてソファーに押し倒して、上着の中に手を入れた。

「ああ、んあ、やつ…!」

夕輝の口から甘い吐息と共に、微かに抵抗する声が漏れた。

様子を見るために顔を彼女から離すと、夕輝は顔を少し赤くしながら潤んだ目で、慶三郎を見ていた。

戸惑いを含んだそれは、慶三郎の眼には可愛い以外の何ものでもない姿に映る。彼をますます煽っているとも知らずに、彼女は何とか彼の腕の中から逃げようとしていた。

「昼間っから襲わないでください、慶三郎様。お父様が帰ってきたらどうするんですか。」

「親父なら、まだまだ帰って来ないよ。」

「でも、誰かやってきたら…。」

「夕輝。」

強く口調で彼女を遮ると、夕輝は口を噤んだ。

「この3日間、陽菜を寝かしつけて、そのまま寝てしまったのは誰かな？」

夕輝の目が泳いだ。

「わ、私です…。」

「三日間、お預けを食らった旦那様が可哀想だと思わないかい？」

言いながら、夕輝の体に猛った己の分身を押し付けた。

その存在を感じたのか、夕輝は下半身を自分から逃げるように動かそうとした。

「も、申し訳ございません…。」

「ここが嫌なら、二階でもいいけど。」

「…はい。」

これまでの経験からか、夕輝はさして反論せずに慶三郎の提案に従って、二階へと移動を始めた。

その後、二階の自室で、愛妻を美味しく頂いたのは言うまでもない。夕輝はふらふらになりながらも、夕飯の買い出しに行こうとしたので、少し責任を感じて一緒に出かけることにした。

お昼寝から目覚めた陽菜を慶三郎が抱っこして、仲良く家族三人で家を出た。

謝罪の電話

佳子は時計を見た。

ちょうど夜の八時。

春人から教えられた電話番号は、市外局番が母の実家と同じだった。つまり、山代の里にある彼の自宅の電話番号を覚えてくれたのだ。お見合いをしたホテルから、あのまま帰ったとすれば、もうとっくに着いていておかしくない時間である。

緊張しながらダイヤルすると、呼び出し音が受話器から聞こえた。

『もしもし、五月です。』

落ち着いた若い女の人の声がした。
誰だろう。

「夜分にすいません。一上佳子と申しますが、春人さんはいらっしやいますか？」

『ちよつと、お待ちくださいね。』

保留のボタンを押したのか、電子音のメロディーが受話器から流れる。

いつ音楽が止むのか、固唾をのんで待っていると、「もしもし、春人ですが。」という声が聞こえた。

「一上佳子ですが。本日は申し訳ございませんでした。」

とりあえず、開口一番謝った。

『…。』

春人が受話器の向こうで、黙っている。

沈黙が恐ろしいまでに気まずく、続けて何か話さなくてはと焦った。

「五月さんにとって失礼な状況になってしまつて…、御足労もおかけしたのに…、本当にすいませんでした。」

『…。』

まだ何も返事をしてもらえない。

いい加減、何か言っていたらけると、ありがたいのですが、針のむしろです。

姿が見えない分、とても話しにくい。

「あの、こちらの落ち度でしたので、今回のお見合いは、五月さんの方から二木さんへお断りのお話をさせていただきますか…？」

『あの、』

佳子が言い終わるや否や、ようやく春人が言葉を発した。

次の瞬間、お怒りの言葉が来ると思い、佳子は身構えた。

『あの、最後に現れた男は、誰なんですか？』

その声は、非常に暗くて重く、まるで怨念が籠ってそう、地を這っているような低音だった。

ひいひい！　すごく怒ってる！！

恐ろしさの余り、動揺した佳子は受話器を落としそうになった。

留守電の春人の声が落ち着いていたので、怒っていても今回も冷静な感じでやりとりをするのかと想像していたが、自分の見込みは甘かったようだ。

どのように返答しようかと迷った時に、『もしかして』と再び春人の声がした。

『佳子さんの恋人ですか…？』

春人にそう尋ねられて、如月の出現がそのように解釈されるのだと初めて佳子は気付いた。

言われてみれば、全く関係ない人がお見合いをぶち壊すはずもない。男女の関係にあるのだと、思われても仕方がないのに、佳子本人は全くそこまで頭が回ってなかった。

「あ、えーと、その…。」

如月のことをどのように話したらよいものか、悩んだ。

彼とは全然色っぽい関係にはないし、そもそも如月がお見合いに現れたのも、“意に染まぬお見合いに無理矢理参加させられたお嬢様を攫うナイト役”をやリたかっただけだと言っていた。

一応、友達？のような間柄。

恋人だと誤解させたままならば、完璧にこの縁談は終わりになって、佳子の胸のつかえが下りるだろう。

しかし一方で、恋人がいるのにお見合いを申し込んだ非常識な人間と思われたままだ。

ただでさえ、春人はものすごく立腹な様子なのに、心証が悪いままだと、バッグを取り戻す際のやり取りに支障が出てしまうかもしれない。

バッグをどうしても返してほしかった佳子は、結論を出した。

「違います。彼とはただの友人です。

恋人がいるのに、他の人にお見合いを申し込んだりはしません。」

『本当ですか？』

春人の声が少し明るくなった気がした。

最悪な状況は脱することはできたのだろうか。

「はい、信じてはもらえないかもしれませんが…。」

今回、佳子は正直に答えることにした。

理由がどうであれ、身边が落ち着いていない女との縁談は懲り懲りなはずだ。

これでお見合いは破談で終わるはずだ。ああ、本当に終わって欲しい。

せめて機嫌を少しでも直してもらって、忘れ物の話に入りたい。

『じゃあ、何故彼はお見合いに現れたんですか？』

すんなり信じてもらえるとは思わないが、追及の手は厳しい。

「私が意に染まぬお見合いを強いられていると、彼は思っていたようなんです。」

そういうことにしておいてもらおう。如月もそんなことを言っていたし。

『あ、そうなんですか！』

春人の声が、納得してくれたようで、晴れやかな調子に戻っていた。

もともと分家との結婚を迫られていたので、そちらとお見合いだと勘違いした如月が佳子を助けにきたのだと、解釈してくれたのだらう。

『それじゃあ、佳子さんは現在フリーなんですよね。』

「はい、そうですが。」

独り身であることを何故再確認してくるのか、気になったが正直に答えた。

フリーとはいえ、分家の高志との結婚を迫られている状況には変わりが無い。

『佳子さんがお暇な日って、いつですか？』

「基本的に水曜日と日曜日にパートは休みです。」

『それでは、今度の日曜日は空いていますよね？』

「はい。」

『また同じ時間、同じホテルで会いましょう。その時に佳子さんの忘れ物を持っていきます。』

「え？」

『来週の日曜日の2時ですよ。必ず来てくださいね。では、失礼します。』

佳子の返答を待たずに電話が切れた。

春人の強引さに、開いた口が塞がらなかった。

学校での尋問

お見合いから一夜明けて、春人がいつも通りに学校へ行くと、朝礼前に男のクラスメイトたちによって席を囲まれた。

「お見合いしたんだよね？ どうだったの？」

「一上のところとなんだよな？ 美人だったか？」

「何話したの？」

「結婚すんの？」

次から次へと矢継ぎ早に質問されるが、春人は誰とも目線を合わせずにマイペースに鞆からノートや筆記用具などを取り出して、机に仕舞っていた。

そして、鞆を机の横のフックに掛けると、ようやくクラスメイトたちに視線を向けた。

集まっている人たちは、春人と同郷の者たちばかり。

山代の里で噂を聞きつけて、真相を尋ねに来たに違いない。

春人が通っている高校は、近隣の地区にある家から一番近い公立学校だった。市町村合併により同じ市になったが、もともとは別の町にあった学校で、里以外の一般人も多く通学している。

「おはようございます。お集まりいただき恐縮ですが、プライベートな質問にはお答えするつもりはありません。」

春人は無表情のまま意見を述べた。

その途端、周りからブーイングの嵐が巻き起こる。

「えー、ちょっと、勿体ぶるなよ。」

「そうだよ、みんな気になってるんだよ？」

「少しくらい教えてくれてもー！」

春人は傍から見ても分かるくらい、大げさにため息をついた。春人の言葉遣いは、クラスメイトに対しては丁寧過ぎるものだったが、言われた彼らはいつものことなので、彼の様子を不審に思うこととはない。

他人とは距離を置きたがるため、学校の休み時間はいつも独りで本を読むか、人気のないところにいる春人。

愛想が少なく、会話をしても笑顔を見せることは少なかった。

口を開けば、誰に対しても丁寧な物腰と口調だが、春人は誰とも馴れ合おうとはせず、ため口を決してしない。

高校入学当時、春人の見た目の良さに惹かれて、多くの女子が彼と仲良くなるうと近づいてきたが、用もないのにまとわりつく彼女らを春人はバツサリと切り捨てたため、今では彼は観賞用として重宝されていた。

どうでもいい奴に邪魔されたくないというのが春人の本音。

顔だけは良いのに、人を寄せ付けない性格のため、陰で女子から「がっかり王子」と評されている。

「おはよう！ 朝礼始めるぞ。席につけ。」

どうやって彼らを追い払おうかと思いついたところ、タイミング良く担任の先生が教室の入り口から入って来た。

クラスメイト達は一斉に席に戻ってゆく。その様子は蜘蛛の子を散らすようだった。

お昼休みになり、春人は自分の席でお弁当を広げる。

毎朝5時に起きて春人は、家族の分の朝食と弁当を作っていた。

義母が13歳の時に亡くなり、それまでは手伝いの範疇だった家事

を春人はメインで行うようになった。最初のうちは慣れない作業で、拙いところが多くみられたが、今では一端の主婦に負けなくらいの腕前になっていた。

春人が一人食べていると、購買でパンを買ってきた数少ない春人の友人の山村和樹やまむつりかずきがやってきて、春人の前の席が空いていたので、勝手に借りて腰を下ろした。

「やつほー、春人、元気してた？」

山村は明るい調子で気さくに春人へ話しかけてきた。

その手は忙しくなくパンの袋を開けている。今日は焼きそばパンを買ってきたようだ。机の上に置かれた白いビニール袋の中には、他にもパンがいくつか入っている。

山村の格好は、短めの黒い髪に、型どおりの詰め襟の制服姿。

春人同様、真面目な高校生の姿だった。

「いつも通りですよ。」

愛想はないが、山村にきちんと応答する春人。

山村とは昔からの付き合いだった。

彼の明るくさっぱりとした人格のお陰か、彼に対しては春人の対応は穏やかだ。

彼もまた同じ里の出身だった。

山村はパンを食べながら、春人へ話しかける。

「いやー、お前が相手にしないから、俺に追及の矛先が向かって大変なんだよね。」

「和樹も相手にしなければいいんですよ。いずれ興味を失います。」

春人が素っ気なく言うと、山村は苦笑した。

春人は休み時間中まで好奇心旺盛な人達に囲まれていたが、春人自身に全く隙がなかったため、彼といつてもご飯を食べている山村へ調査の手が及ぶようになってたのだ。

「それまでが大変なんだって。

それにしても、お前が女と談笑する様子って想像つかないんだけど。

マジでお見合いしてきたの？」

「ええ、まあ、それは本当です。」

「俺は相手の女に同情するよ。

どうせ、バツサリ振って来たんだろ？」

「...。」

春人が沈黙した。

“当たり前です”と即答してくると思っていた山村は、彼の反応に戸惑った。

そもそも、お見合いに出席しているという行動自体が、山村がよく知る春人という人格の枠から外れているのだ。

「もしかして、訳あり？」

山村が小声で尋ねると、春人が小さく頷いた。

そのせいもあって、春人がまったく情報を漏らさないのかと、山村はようやく察した。

「ハルく、あたしも混ぜて〜。」

甘えた声を出しながらやって来たのは、大橋里香おおはしりかという女だった。目立たない程度に茶色に染めて、毛先に軽くウェーブがかかったセミロングの髪。

顔に掛からないように、髪の一部を後ろで留めていた。

化粧をしてピンクの艶のある厚めの唇、ラインで縁取りされた大きめの目元。

ふくよかで、一目見て分かるほど大きな胸部と臀部。

指定されたセーラー服を着用しているが、スカートは非常に短くなつており、むつちりとした膝と太もが見えていた。

見た目は少しぼっちゃりしているが、今どきのなかなか可愛い女である。

「女子は女子同士で群れてください。」

眉間に皺を寄せた春人が追い払っても、大橋は「差別はんたーい。

キャハハ」とテンション高めに言い返して、空いていた春人の隣の席に足を組んで座った。

大橋の視線は春人のみ注がれていて、隣にいる山村は視界にも入れず完璧な無視であった。

「もー、せつかくやってきたのに、ハルってば冷たーい。」

「誰も呼んでいませんから。」

春人は言いながらも、弁当の中身を掻き込むように口の中へ入れていく。ご飯を食べるペースが急速に上がった。

山村は大橋から視線を反らして、気まずそうにパンを食べていた。

大橋のスカートが短いため、そこから覗く足の付け根の見えそうな際どさが、目の毒だからだ。

男子からの視線を狙っているとしたか思えない。
春人の所へやって来た大橋は手ぶらだった。
お昼ご飯と一緒に食べる気はなさそうだった。

「ハルつてば、優しいよね。」

春人は大橋の言葉に何も返さない。

大橋とは会話が通じないと判断したのか、だんまりを決め込んだようだった。

「わざわざ一上の人間に会ってあげるなんて。

もしかして、彼女に同情して思い出作りに協力しようと思ったわけ？」

春人は無言のまま弁当を食べ終わり、弁当箱を片付け始めた。

素早い手つきで風呂敷に包み、机の横に掛けてあった鞆を取って仕舞いこむ。そして、また鞆を元の場所に戻した。

春人は立ち上がって、山村に視線を送ると、「トイレに行ってきた。」と伝えた。

「おうよ」と山村は答える。春人が教室から出ようとする、慌てて大橋も立ち上がって後を追う。

「ちょっと、ハル待つてよ。」

「トイレまでついて来ないでください。」

大橋にそう言い捨てて、春人は廊下に出る。すれ違う人とぶつからないように速度を上げて小走りすると、いつものように大橋を撒くように逃げ出した。

大橋に纏わりつかれるようになったのは、夏の盆祭りの後だった。

奉納試合で一目注目を浴びた春人に目をつけたらしい。同郷で親戚同士だったが、それまではお互いにすれ違っても口も利かなかつたのに、手の平を返した態度である。

可愛い容姿を活かして、色んな男との浮名を流していた彼女だったが、次のターゲットは春人になつたようだ。

今のところ、彼女の辞書に“諦める”という文字は見当たらない。

日中はレジ打ちのパートに出かけて、夜は内職という生活を続けて一週間。

春人との約束の日がやってきた。

季節の変わり目のせいか、昨日から少し風邪気味で軽く咳が出ていた。

昔から体調を崩すと、喉に症状が出やすかった。

常用している薬を服用して、咳を抑えていた。

昨夜、母から再び電話があって話をした。

呼び出し音に急かされて、電話番号を確認せずに反射的に佳子は受話器を取ってしまったのだ。

母は佳子の声の不調にすぐに気づき、意地を張って無理をするからだと批難した。

そして、お見合いの件にも触れた。

「佳子さん、貴女は同情されているだけなんですよ。」

母の声は、妙に優しく感情に訴えるようだった。

「一目惚れをして一族を敵に回してまでお見合いを申し込んだのに、会いもしないのは不憫だと思われたんですよ。」

貴女はただ哀れんでもらっただけなんです。優しくされても勘違いしては駄目ですよ?」

また、五月の四男坊は、顔だけの男だと母は貶していた。

「別れ話がこじれているのか、最近では学校で可愛い女の子に追い

かけまわされているんですよ。あんなに顔が良いのだから、女性関係は相当荒れているのね。佳子さんはあの男の顔にだまされているだけなんですよ。いい加減、目を覚ましてちょうだい。」

一方で、佳子を責めた。

「高志さんを殴ったあの男は誰なんです？」

まさか、家出中にあの男と出来ていたなんて言わないでしょうね？ それにしても何故か里中に今回のお見合いの話が知られていて、私は恥ずかしくて表も歩けないのよ。高志さんにも、申し訳なくて顔も合わせられません。佳子さん、お爺様や高志さんにきちんと謝罪しなくてはなりませんよ。」

滅多に会わない連中に好き勝手言われようと、正直そんなことどうでも良かったし、何故祖父や高志に謝らなくてはならないのか分からなかった。勝手に結婚相手として決めたのは、そちらだった。佳子は一度も了承した覚えはない。

「破談にはまだなっていないようですけど、時間の問題でしょう？ もし終わったら、高志さんとの縁談を進めますよ。また貴女に変な真似をされては困りますからね。」

…実は花嫁衣装はもう決まっているのよ。ドレスもいいけど、やっぱり白無垢が一番ね。」

声を潜めて笑う母に、佳子はめまいを覚えた。まだ諦めていなかったのか。

しかも、状況は悪い方向へと進んでいる気がする。

言いたいだけ言わせて、一通り話を聞き終えてから、「謝るつもりもないし、折れるつもりもない。」と断言して電話を無理矢理終了

させた。

佳子の心に重りがぶら下がったようだった。母の言葉は呪いのように佳子を蝕む。

再び佳子は電車に揺られて、前回も訪れたホテルに足を運んだ。駅から徒歩5分くらいのところにある。

今回はお見合いではないので、少しカジュアルな格好をしていた。髪は下したままで、柄の入ったブラウンのチュニックに、厚手の黒いタイツを着て、茶色のロングブーツを履いていた。

外を歩くのに寒いので、ダークグレーのトレンチコートを上から羽織っている。

バッグは肩から大きめのトートバッグを肩にかけていた。返してもらった荷物をこれに入れて持って帰るつもりだった。

春人から荷物を受け取ったら、すぐに家に帰って体を休めよう。そう佳子は考えていた。

佳子がホテルのロビーに向かうと、「佳子さん。」と声を掛けられたので、そちらの方を向くと、すでに先にいたと思われる春人の姿が目に入った。

カーキのブルゾン、黒いストレートなボトムスを春人は着ていた。彼も前回と比べて、プライベートに近い格好をしている。二度と会うとは思わなかった端正な顔。

彼の両手は空いていて、何も持っていないかった。

佳子の私物はどうしたのだろうか、心配になった。

「五月さん。」

そう言いながら、佳子は足早に春人に近づくと。

「わざわざお越しただいてすみません。」

荷物を送ってくれた方が自分としては楽だったのに。

あんな強引に落ち合う約束を取りつげなくも良かったのに。

母との電話での一件や、体調不良もあって、佳子の機嫌は著しく悪かった。

今日はうまく笑えなかった。

「こちらこそ、すみません。」

春人は相変わらず丁寧な物腰だった。

「荷物は車に置いてあるので、一緒に来てもらえますか？」

「え、そうなんですか？」

「はい、車は地下の駐車場に停めてあるので、案内します。」

春人は言いながら歩き始めた。

置いていかれては自分の荷物を取り戻せないの、佳子は慌ててついてゆく。

春人の歩みは、コンパスが佳子より長いだけあって早い。

佳子は小走りをしなくては、彼のすぐ後ろにいられなかった。

どうしてロビーまで持って来てくれなかったのか。

歩くペースを合わせてくれてもいいのに。

春人の手際の悪さと気遣いの無さが、佳子を苛立たせる。

ゴホンと咳払いをした。

春人はそれに気付かなかったのか、後ろを振り向かなかった。

エレベーターで地下に行き、春人が乗って来た車に辿りついた。

5人乗りの白い普通乗用車だった。

春人は運転席にキーを差し込んで、ドアを解錠する。

そして春人はドアを開けながら、後ろにいた佳子を振り返り、「どうぞ佳子さんも乗ってください。」と指示してきた。

そう言われても佳子は戸惑った。

わざわざホテルから外へ出るために、そのちょっとした距離を車で送ってもらおう必要を感じなかったからだ。

「あの、荷物を貰ったら、ここでお別れして結構ですよ？」

佳子が乗車を遠慮してそう言うと、春人は何故か困ったような表情を浮かべた。

佳子は自分が何か不味いことを言ってしまったのかと、不安になった。

「前回みたいに邪魔が来ては困るので、ここから移動したいんですが協力お願いします。」

佳子は高志のことを思い出した。

彼はどこからかお見合いの情報を聞きつけて、佳子の妨害をしにやってきたのだった。今回も現れないとは限らない。

「分かりました。よろしくお願いします。」

佳子は車の前方を通過して、助手席側に移動した。そして、ドアを開けて乗りこむ。

春人は無言で車の運転を始めて、二人を乗せた車はホテルから出発した。

春人と。 2

春人が運転する車は、道路の流れに沿って一般道を走っていた。車内の会話は少なかった。

春人から話題を振ってくることはなく、佳子が話しかければ答えてくれるだけだった。

もともと喉の調子が悪く、声を出すのが辛かったのと、色々あって憂鬱な気分だったため、佳子は気を遣うのを早々に諦めていた。

佳子が口元を押さえて軽く咳をすると、春人が「風邪ですか？」と尋ねてきた。

「そうなんです。季節の変わり目って体調を崩しやすくて。」

「熱はないですよね？」

「はい、咳だけなので、大丈夫ですよ。」

「寒かったら言ってください。温度調整しますから。」

「はい、ありがとうございます。」

ホテルを出てから、車はずっと走っていた。

腕時計を見ると、2時23分を指していた。

道路標識の案内を見ると、佳子にとっては全く見知らぬ方面へと進んでいる。

佳子は目的地について、まだ何も聞いていなかった。

「あの、どちらへ向かっているのですか？」

「あまり遠いところだと、帰るのに困るのですが。」

「帰りはちゃんと送りますから大丈夫ですよ。
ちなみに海に向かっていきます。」

「海ですか!？」

佳子は春人の答えに心の底から驚いた。
夏ならまだしも、こんな冬になろうとしている時期に海へ行くなんて。

水に入るのは考えられないから、美味しい魚介類でも目当てに行くのだろうか。

「そうです。あと30分くらいで着きますよ。」

ちなみに佳子は海へ行ったことが無かった。
テレビの映像でしか、海辺を見たことがない。
子供の頃に亡き父と居間でテレビを見ていたら、「海へ行ってロクな目に遭わなかった。」と父が苦々しく語っていたので、佳子は海に対して良いイメージを持っていなかった。

道なりに走っていると、そのうち「干物あります」などの看板を掲げた個人経営のお店などが目につく様になった。

釣り具やサーフィンなどの海関係のお店や、古びた定食屋が所々並んでいた。

佳子たちは海岸沿いへ向かい、砂浜が目の前に見えだすと、自由に止められる駐車場がたまたま見つかったので、そこに車を置いて、外へ出た。

需要の無い季節のせいか、人の姿はほとんどなかった。

今日の天気は曇りだった。

海岸から強い風が吹き寄せて来て、着込んでいても肌寒く感じた。佳子は開いていたコートのボタンをきつちり閉めたが、それでも両腕を体に回して、これ以上熱を奪われないようにした。海から押し寄せる波は、空と同じくどんよりとした灰色だった。春人に続いて、堤防を二人で歩く。彼は両手をブルゾンのポケットに突っ込んで歩いていった。砂浜に降りる階段があり、春人がそこから下へと進むので、遅れながら佳子もそれに従った。先に砂浜まで軽やかなテンポで辿りついた春人は、後ろを振り返って佳子と距離が離れているのに気付くと、立ち止まって追いつくのを待ってくれた。

打ち寄せられた漂着物や、花火をしてそのまま捨てられた残骸など、色々なゴミで砂浜は溢れていた。

意外に汚れていて、佳子は驚いた。それらを避けながら、春人と波打ち際に近づいた。

ブーツで濡れた砂に足跡をつけると、寄せてきた波が綺麗に消してくれた。

引いてゆく波と寄せてくる波同士がぶつかり合い、白い泡が生じていた。

テレビでは見られない様子を初めて見た。耳を占め尽くす波の音。

髪が強風で煽られて、視界を遮るのを手で押さえていた。

佳子たち以外、人はいなかった。

遠くを見渡すと、一面に広い海が広がっていて、地平線が見えた。寒々しい色の海と空。

まさかいきなりこのような景色を見ることになるとは思わなかった。しかも、男の人と二人きりだなんて。

見目の良い男の人と一緒に、これがお互いに好感触な状況なら、ウキウキな心境にでもなるのだろうか、現実には甘くない。

彼は別に自分に好意があるわけでもない。

“同情”という母の言葉が頭の中を霞めた。母の言葉がどこまで本当なのか、佳子には判断のしようがなかったが、春人が自分に気が無いのは当然のこととして受け取っていた。目の前に広がる、ただ寒いだけの冬の海岸なんて何の感動も佳子には与えなかった。心までも冷えそうだった。

春人は佳子から離れて、波打ち際で波と追いかけてっこをしていた。軽やかな足取りで砂浜を駆ける姿は、童心に返ったようで元気そのものだった。

横顔のすつきりと通った鼻筋が綺麗で、思わず見とれてしまう。

「海へ来たのは初めてです。」

佳子が波音に負けないように大きな声で話しかけると、春人はちらりと視線を佳子に向けた。

春人は佳子の方へと駆け寄り、側まで来て立ち止まった。

「私ですよ。」

春人は少し嬉しそうに笑う。

その素敵な笑顔は反則だと思いつつ、うっかり頬が熱くなる佳子は彼から視線を反らした。

一人称が“私”だなんて、堅苦しすぎ。

別のことを考えながら、佳子は冷静を努めた。

私が春人のことを好きだと、彼が勘違いしているから、彼は自分に気を遣っているだけだ。

今回の遠出は、きつと可哀想な私のための思い出作りなのだろう。

少しだけ甘い夢を見せて、期待をさせつつ、傷つけないようにお断りをする。

今後の彼の行動予定が佳子には読めてきた。
如月が言っていた男女の機微について、自分も分かってきたものだと、佳子は皮肉気に思った。

「寒いので車に戻りませんか？」

そろそろ寒さも限界だったので、春人の言葉に佳子は一も二もなく頷いた。

二人して波に背を向けた時だった。

「ヨシコ、ナニカクル。」

佳子の足元から声があった。

咄嗟に辺りを見回すと、波打ち際から緑がかった太い紐状の何かが、佳子を目掛けて物凄い勢いで伸びてきていた。

あっという間に佳子の左のブーツに巻きつき、強力な力で海の方へと引っ張るので、バランスを失った佳子の体は砂の上に転倒した。海の方へと佳子は引きずられる。

「佳子さん!!」

「翔影、防御して!!」

春人と同時に佳子は叫んだ。

佳子の体の下から黒い流動性のある物体が噴き出るように発生して、黒い膜状になって佳子自身を包み込む。そのおかげで全てから遮断されて、巻きつく物体は佳子から切り離される。
佳子の体は静止した。

佳子を襲ったものは、切り離されてもそのまま海の中へと戻ってゆく。

その間に、佳子は体勢を持ちなおして立ち上がる。

「マダイルヨ。」

「一旦防御を解除して、近づいたら攻撃して。」

「ウン。」

敵は海の中へ全て消えて見えなくなったが、まだ警戒が必要らしい。翔影と呼んだのは、いつも佳子の足元にいる影のような妖怪だった。黒い膜は溶けるように上から無くなると、佳子の足元に集まり、ゆらゆらとその周りを警戒するようにアメーバのように動きまわっていた。

その際に佳子はしゃがみ込んで指で砂浜に絵を描いた。
落書きのような魚の絵だ。

「出できなさい。」

佳子が言うと、魚の絵が鈍く光り出して、そこから何か白いもやの様なものが出てきたと思ったら、どんどん大きくなって巨大な魚になっていた。

大きなならば、全長は大人の人間くらいあった。

キラキラと表面を覆うところが輝き、一匹の立派な魚は、宙に浮かびながら口をパクパクさせていた。

「犯人を探してきて！」

佳子がそう言い放つと、それは弧を描くように飛び跳ねて、海の中へ飛び込んで行った。

しばらくの間、ただ立ちながら待っていると、先程潜っていた魚が再び海から飛び跳ねて戻って来た。

佳子の前に魚はぺつと何かを吐き出してきた。

砂の上に転がったそれは猫の大きさくらいの海草の塊のようだったが、様子を見守っていると、それはのっそりと動きだした。

昆布のような海草がゆっくりと起き上がる。

ちょうどバランスの良い位置に海草でできた腕と足のようなものがあり、それを使って本体部分を持ち上げていた。

ちらりと振り返り、顔のようなものを佳子たちに向けたと思ったら、急に素早く動いて一目散に逃げようとした。しかし、春人がそれを上回る速度で動いて、足でそれを踏みつけた。

「んぎゃー！」

春人の足の下から、何か潰れたような声が漏れた。

「五月さん、ナイスです！」

佳子は思わず拳を握りしめて感心した。

「そのまま踏んでおいてくださいね。」

そう言いながら、佳子は海草の妖怪に近づく。

春人に踏まれた妖怪は、手足のような海草をじたばたさせていた。

「あなたが私を襲ったのね？」

佳子が話しかけると、妖怪の動きがぴたりと止んだ。

「…。」

春人に踏まれたままの妖怪は何も答えない。

「五月さん、もっと踏みしめてください。」

佳子の言葉に従って、春人の足に力が入り、ぐりぐりと砂に押しつけられるように妖怪は踏みしめられた。

「ぎゃー！ 止めてー！」

再び、手足をばたつかせた。

春人の足の周辺で、4本の海草がばさばさと舞うように騒がしく動いている。

「あなたがやったんでしょ？」

「そ、そうだー！」

妖怪が白状したので、春人の足の動きが止まった。

「どうしてあんなことをしたの？」

「楽しいから。」

「あなたは楽しくても、私は楽しくないわよ。いきなり引っ張るのは駄目よ。」

「だって、そうしないと海の中に来ないじゃないか。」

「陸の生き物は、水の中へいきなり引きずり込まれたら、大変な
よ。」

「あなたもこのまま天日干しにされたら困るでしょ？」

「うっ…！」

「もうしないって約束するなら解放してあげるわ。」

「するする。」

本当に反省しているのか、軽いノリで妖怪は答えた。
そんな様子に佳子のため息をつく。

「じゃあ、名前を教えなさい。」

「かいがい海塊だ！」

妖怪の名前を知ることが重要だった。
術的な意味合いを含み、相手の名を認識するということは、ターゲット対象と
して把握しやすくなる。

「海塊ね。」

よく聞いて。二度目はないわよ。もし約束を破ったら、「
待ってください。」

今まで、事の成り行きを黙って見守っていた春人が、佳子の言葉を
遮った。

「今年に限って、この海で何度も海水浴客が遊泳中に足を引っ張ら

れたのですが、その犯人も海塊だったんですか？」

「…。」

海塊は何も答えない。

「あなた、他の人にも同じことをしていたの？」

「うん。」

佳子が尋ねると、海塊は素直に答えた。

「それももう止めるわね？」

「うん。」

「約束を破ったら、…鍋の出汁用に煮込むわよ。」

佳子のドスの籠った脅しに、海塊は「ひいつ」と声を上げて慄いた。

佳子は目だけで春人に合図を送った。

春人がそれに気付いて海塊の上から足をどけると、それは「もうしましえーん！」と叫びながら、ものすごい勢いで海の中へ戻っていた。

春人と。 2 (後書き)

そろそろお鍋の時期ですし、昆布の出汁、美味しいですよ…。

ブーツに巻きついた緑がかった紐状のものは、昆布などの海藻が束になって出来た物だった。

佳子はぬめぬめして気持ち悪いそれを手でブーツから取り除くと、砂浜の上に捨てた。

佳子は体についた砂を落とすために自分の服をあちこち叩いた。

春人は佳子を上から下までじっくりと観察していて、まだ砂が落ちていない個所を指し示して教えてくれた。

「全部落ちたかしら？」

「まだ髪に付いてますよ。」

春人が佳子の前に立ち、手を伸ばして髪を撫でるように触れてきた。

佳子は春人に任せて、彼が頭を確認しやすいように俯いた。

春人が手を動かして髪を動かすと、砂の粒子がぼろぼろと落ちていくのが、視界の端に映った。

倒れる際に眼鏡を庇って、顔を咄嗟に横へ向けたため、髪の毛が犠牲になったようだ。

何度か春人の両手が髪を梳くように動いて、砂を落とす作業を続けてくれた。やがて、髪全体を整えるように指が動いているのがわかった。

ところが、そのうちに春人は一房髪を掴んだと思うと、指でいじり始めているようだった。

砂を払う様子ではなくなっていたので、「終わりましたか？」と尋ねながら、佳子が顔を上げると、春人と目があつた。

春人の綺麗な瞳が大きく見開いたと思ったら、急に目を泳がせて拳

動不審となり、慌てて佳子の髪から手を離して、後ずさった。そんな彼の不自然な反応に、何事かと怪訝に思う。そういえば、前回のお見合いの時も、彼は目が合った時に同じように視線を泳がせていた。

「あの、車に戻りませんか。」

佳子は背筋がぞくぞくと寒くて、春人のことより自分の体調の方が心配だった。

風邪を悪化させてしまったら、パート勤めが厳しくなる。それでなくても生活は貧しいのに、休んでしまったらその分の賃金は貰えない。

「そうですね。」

春人も賛同してくれたので、二人は来た道に戻っていった。

車に乗り込むと、春人は車のエンジンを掛けてエアコンの暖房を強くしてくれた。

車の中は外の強風に吹きさらされていない分、体温がこれ以上奪われずに済んでいたが、暖房が効き始めたばかりだったため、冷えた体はなかなか温まらなかった。

「佳子さんのおかげで、仕事が楽になりました。ありがとうございます。」

「何の話ですか？」

春人の方を向くと、彼は真面目な顔をしていた。

「さっきも言った通り、あの海岸で遊泳中に足を引っ張られるとい

う事故が多発して、里に調査依頼が来たんですよ。今回、五月家が担当になりました。

ちょうど待ち合わせ場所に近かったので、調査の前に周りの状況を下見しようと思って、来てみただけだったんですが、まさかあなるとは思いませんでした。」

「はあ、そうだったんですか。」

それで冬の海岸にわざわざ来たわけだったのか。

佳子はとってみれば寒さで震えるし、砂まみれになるし、踏んだり蹴ったりだった。

目の前にある整った顔を、恨めしく見た。

「良かったですね。」

嫌味を込めて言っても、春人は佳子の内心に気付かないのか、「はい。」と答えただけで、まるで効いていなかった。

「しかし、いきなり砂浜にいた佳子さんを襲ってくるとは思わなかったんですよ。」

全て海の中で被害に遭ったとしか聞いていなかったのだから。

「今の時期の海には海水浴客はいませんし、あの妖怪も退屈だったのでは？」

佳子は、はぐらかすような回答をした。

実は、佳子にとって妖怪の類にちよっかいを出されるのは、良くあることだった。

恐らく、あの海塊は佳子に気付いて、わざわざ砂浜まで手を伸ばしてきたのだろう。

今回は佳子にとってみれば迷惑極まりない行為だが、相手からすれば佳子にお近づきになりたくて、気を引くためのアプローチだったのかもしれない。

興味を持たれるのは良いが、その方法が時には危険な場合もある。妖怪には人間の都合を考えてくれない連中が多い。

今回も下手をすれば、海の中まで引きずり込まれるところだった。

佳子が極寒の海に沈められても、相手は困らない。

話してみれば好意的な妖怪たちも、人間とのやりとりや接し方を知らなくて問題を起こすことがあるのだ。

佳子は自分の力をそう云った連中から身を守ったり、云う事を聞かせる為にしついたりする以外、ほとんど使ってこなかった。

そう云った佳子の込み入った事情を、どう受け取られるか分からない初対面に近い人間にべらべらと開けっ広げに話す程、警戒心が無いわけではない。

「そういえば、佳子さんは先程力を使っていましたか、絵を描く必要はいつもあるんですか？」

佳子にとっては都合の良いことに、春人は話題を変えて振って来た。

「まあ、そうですね。何か媒体がないと具現するのは難しいんです。」

本当は実際に絵を描かなくても、頭の中に何を作りたいか描くだけで出来るのだが、一族の誰もそれを出来た者がいないようなので、佳子はわざと周りに合わせていた。

子供の頃に師であった父に、そうしろと言われたのだ。

誰も到達できなかった領域に達したと分家知れば、親族婚にまず拍車がかかる恐れがあった。それによって、佳子が不幸な目に遭うかもしれないと、父は危惧したのだ。

佳子の具現化の能力は、桁はずれらしい。

佳子が父に褒めて欲しくて力を振った時、父はそれを見て言葉を失くし青ざめていた。

“血の妄執が実を結んだ、最高傑作だ”と、恐ろしいものを見るかのような目つきで、大好きな父が自分を映していた時は、今でも思い出したくないくらいショックな出来事だった。

それ以降、佳子は力を見せびらかすような真似は止す様になった。修行の時に、父と同じようなレベルで、真似ををしていれば、父はいつも通り変わらずに接してくれた。

一族の慣わしにより、女が表だって力を振るう機会がほとんどなかったため、佳子の能力について父以外に勘付かれることは、今まで無かった。

宝の持ち腐れだと佳子自身は思っていたが、復讐を望んだ時に、自分の力が何よりも役に立つと気付き、佳子はこのために自分は優れた力を授けられたのだと、天啓にうたれたかのように悟ったのだ。自分の最大の切り札だった。自分は敵にも過小評価されて見くびられているはずだ。

実行の日に備えて、経験を補うべく密かに技を磨いていた。

「奉納試合で一上高志が何か紙を出して、力を使おうとしていたので、どうしてだろうと思っていたのですが、そう言うことだったんですね。」

奉納試合では、高志が能力を使う前に、春人の先制攻撃により、高志が場外に押し出されて、開始後1秒も経たないうちに試合が終了していた。

決勝戦にも関わらず、あまりにも呆気ない幕引きに、何が起ったのか認識できなかった観客たちは、試合が終了して春人がお時儀を下がっても、雰囲気盛り上げるタイミングを逃してしまった。その後、会場内に気まずげに拍手が疎らに鳴り響いていたのを覚え

ている。

春人は勝つことのみ専念していて、空気を読まず、祭りの会場を盛り上げようと云う気持ちは全くなかったようだ。

「里では一上家の能力は知られているんですか？」

「はい。具現能力は有名ですよ。」

巻物から妖怪を呼びだして、修行用の相手にするんですが、それは一上家が作っているんです。」

「そうなんですか。初めて知りました。」

修行の一環として、自分の作ったものを紙などの媒体に閉じ込めてそれを第三者が利用できるようにする、という工程を父の監視の元で行ったことがあった。

具現の能力と、術的な能力を使った応用作業だった。きっとそれを活用して、巻物を作っているのだろう。

「佳子さんも作れますよね？」

「ええ、まあ、修行用のは作ったことはありませんが、やればできると思えますよ。」

「なるほど。」

春人の目が怪しく光ったのに、佳子は気付かなかった。

佳子は今日の本題のことをいつ切り出そうかと考えていたのだ。

「あの、ところで、私の忘れ物はいつ渡してくれるんですか？」

「心配しなくても、お別れするときにはちゃんと渡しますよ。今日は最後まで一緒にいて欲しいんです。」

含みのある言い方に、佳子は反論できなかつた。

つまり、佳子が途中でいなくならないように、人質みたいに預かっている、春人は言いたいのだ。

信用されていないのだと思うと、内心面白くなかつた。

佳子は春人から顔を背けるように、景色を見る振りをしてドアの窓へと首を動かした。

駐車場は防波堤の側にあつた。

佳子の目の前には、コンクリートで作られた人工的な防壁が、横一列に広がっていた。

「佳子さんに聞きたいことがあるんです。」

「なんででしょう。」

話しかけられても、振り向かずに返事をした。

「どうして私にお見合いを申し込んだんですか？」

「え？」

今更、それを尋ねられるとは思わなかつた。

佳子が目を丸くして春人を振り返ると、彼も自分を見ていた。視線が交わったと思つたら、彼の方が気まずそうに先にずらした。

「噂では、その、佳子さんが私を、一目で気に入ってくれたと聞いているのですが…、本当なんですか？」

照れ臭そうにこちらの様子をちらちらと伺いながら、話すその様子に佳子は力チンと頭にくるものがあった。

どうしてわざわざそんなことを尋ねてくるのか、春人の神経を思わず疑う。

これから振る予定のくせに、私が抱いていると思っ込んでいる恋心でも聞きたいともいうのか。

佳子は朝から不機嫌だったのに加えて、今日の春人の様々な仕打ちに腹を立てていた。

だから、普段なら他人に絶対言わないであろう皮肉の一つでも言ってやっつて、春人の綺麗な顔を歪ませたくなった。

「いいえ、たまたま貴方が奉納試合で優勝したからですよ。」

お見合い相手は誰でも良かったんです。分家の人間じゃなければ。

┌

春人の目が大きく見開いて、驚愕の表情を見せた。

春人と。 3 (後書き)

佳子の中で春人株が大暴落中です。

「私が優勝したからですか？」

驚いた表情を張りつかせたまま、春人は質問を投げかける。

「そうです。母親と約束していたんですよ。

優勝した人とお見合いするって。」

ちなみに、申し込んだらすぐに破談になると思っていたんですけど、心の中で、そう佳子は毒づいた。

「そうなんですか…。もしかして、試合前に妨害があったのは…。」

春人は視線を上に向けて、何か思い出しているようだった。

奉納試合の時に何者かが春人を納屋に閉じ込めた件は、佳子も知っていた。

「分家の仕業かもしれないですね。

配下の者に分家の対戦相手を見守るように指示していたのですが、案の定、貴方は妨害に遭ってましたね。

助けられなければ、貴方は不戦敗になってましたよ。」

家来の正によって、春人は助けられたのだ。

当の正は、面が割れたら都合が悪いことがあるかもしれないと、的屋で買った特撮ヒーロードラマの主人公のお面を被って、助けに行ったのだ。

その時の正は、まさしく正義の味方だった。

そのお面は今では、正の一人息子の正太郎の手に渡って、ごっこ遊びで使われている。

「はあ、つまり、顔で選んだ訳ではなかったんですね。」

そこ、念を押すところですか！？

そんなに自分の顔にプライドがあったとは、佳子は驚きを通り越して呆れた。

「ええ、そうなんです。ちなみに顔も知らずにお見合いを申し込んだんです。」

試合の時に、遠くで全然見えなくて。この眼鏡、度が合ってなくて弱いんです。」

「私の顔も見えてないんですか…。」

春人は呆気にとられ、口を閉じるのを忘れて、途方に暮れた表情をしていた。

どこか間抜けな感じがするその顔は、佳子を非常に満足させた。

「だから、私に対して同情や哀れみは無用ですよ？」

さっさと振って、バッグと上着を返してほしい。

佳子は声を大にして言いたかった。

春人はしばらく固まったままだった。

やがて、ぎこちなくではあったが、よろよると動きだして、春人はハンドルを両手で掴んで、額をそこに当てて俯くと、そのまま何も言葉を発しなかった。

もしかして、やり過ぎたか。

落ち込んだような春人を見て、佳子は少し焦った。

佳子が見守る中、黙ったまま一向に動かない春人。

佳子が心配して何か声を掛けようとした時、おもむろに春人は顔を上げた。次に、ギリギリと音を立てそうな、まるで油の切れたカラクリ人形のような、荒い首の動きで佳子の方を見た。

春人が纏う雰囲気、先程までの平常のものとは異なり、様々な感情が怪しくうずまいていようだった。

「佳子さんの言いたいことは、その、大変よく分かりました。」

何か奥歯に物が挟まったような言い方だった。

「そ、そうですか…。」

佳子を見る春人の眼力は、危うい何かを持ち合わせていて、佳子は無意識に気圧された。

佳子は何か悪いことが起きそうな予感がした。

「しかし、そういうことなら、私と婚約しましょう。」

春人が重々しげに話すその内容に、佳子は自分の耳を疑った。

「ごんにやく?」

佳子は思わず聞き返す。

何か、変な単語が聞こえた気がした。

「違います、婚約です。」

「今夜食う?」

「イントネーションが違いますよ。婚約です。結婚の約束です。」

「けけけけけ」

動揺のあまり、思いつきり噛んでしまい、結婚の“け”の字以降の単語が続かなかった。

「笑い声が恐いんですが。」

「笑っていません!」

結婚って、どうしていきなりそういう話になるんですか!??」

春人の真面目な突っ込みに、佳子はむきになって抗議した。

「佳子さんは誰でも良かったと言っていましたよね?

なら私でも別に問題ないんじゃないですか?」

「そういうことじゃなくて、五月さんの方に問題があるんじゃないんですか?」

「そもそも結婚なんて考えてないでしょ?」

「そうですね。今すぐは無理です。学生ですし。」

「いえいえ、そういう問題じゃないでしょ?」

「私なんかと結婚する気なんですか?」

「私は、最近ストーカー被害に遭っているんです。」

「は？」

春人の話が全く脈絡のない方へ行ってしまう、ついていけなかった佳子は怪訝な表情を隠しもしなかった。

「だから、私に婚約者が出来れば、ストーカーも付き纏うのを諦めてくれるのではないかと思っっているんです。

貴女も私との縁談が終われば、フリーに逆戻りじゃないですか。そうなったら、分家の高志から猛攻撃が来るんじゃないんですか？」

佳子は息を飲んだ。

お見合いの現場に駆け付けた高志や、昨日の母の電話を思い出す。

あの調子なら、母たちが破談になったと聞きつけた瞬間、恐ろしい展開が待っていていそうな気がした。

背筋に冷たいものが走る。

佳子は息を飲んで、春人を見据えた。

「…それって、取り引きってことですか？」

「そう思っていただけで、結構です。貴女にとっても悪い話ではないと思うんですが。」

今まで無意味なお見合い話を終わりにしようと躍起になっていたが、春人の提案を受け入れて、お見合いの話を進めて、敵を欺くのも手かもしれない。

父がいない今、一上家の中で佳子は孤立無援だった。

母の暴拳を防ぐ、拒絶以外の有効な手立てが、今のところ佳子には見当たらない。

佳子が気のないことを先程明らかにしたのだから、彼も話の流れ的

に本気の婚約と言っているわけではない。

春人が言っているのは、要は“なんちゃって”という偽りの関係だ。そこまで警戒するものではない。

双方に都合のよい話、それだけだ。

「そ、そうですね。婚約つていうことで、とりあえずそれでお互いの敵を騙して、問題が片付いたら別れましょうね。」

春人はにやりと笑う。

悪だくみが巧くいったような腹黒さを彼から感じるのは気のせいだろうか。

そう思い、佳子は少し不安になったが、口から出た言葉はもう取り消せない。

「了解です。それでは、佳子さん、これからよろしくお願いします。」

春人が握手を促すように、手を差し伸べてきたので、佳子も恐る恐る手を差し出してその手を握った。

二人の利害が一致して、契約が成立した瞬間だった。

春人の手から伝わる体温は、とても温かかった。

その温かい手に親しみを覚えて、さっきの春人の不審な様子は、自分の見間違いだと思い直そうとした。

幸先が悪いのは、嫌なものだ。

それで再確認するために彼の顔を見つめた瞬間、彼の口の端は上がっている、目が笑っていないことに佳子は気付いた。気付いてしまった。

彼の手を取ったのは、得策だったのか、早計だったのか、その時の

佳子にはまだ分からなかった。

春人と。 4 (後書き)

春人、壊れました。

話し合いが終わり、春人は車を発進させて、来た道に戻っていた。佳子たちが待ち合わせに使った場所へと向かっているのだろう。

車の中で我慢できずに咳込んでいると、「大丈夫ですか？」と春人に声を掛けられた。

発作のような咳が治まってから「うるさくて、ごめんなさい。」と佳子は謝った。

車内の暖房が効いてきても、体の悪寒は無くならなかった。

コンビニに途中で寄った時に、春人に付き合ってくれたお礼だと温かいココアを奢ってもらって飲んでみだが、全然温まらなかった。体調が急速な勢いで悪化しているのを感じていた。

頭は酷くぼうつとして、ほとんど考えられなくなっているし、なにより体がだるくて仕方が無い。

もしかしたら、熱が出てきたのかもしれない。

余計なことを春人に言っ、心配を掛けてしまうのも申し訳ないので、黙っておくことにした。

「エアコンの温度上げてもらっていいですか？」

佳子をお願いすると、すぐに春人は手前の調節レバーを動かしてくれた。

その途端、空調の入り口から温かい風がより強く吹いてきた。

「寒いんですか？」

「そうなんです。すみません。」

春人が運転する車が、赤信号に引つ掛かって、停止した。その時に春人は左手を遠慮がちに佳子の顔の方へ伸ばしてきた。

「少し、失礼しますね。」

春人は佳子の返事を待たずに、額に手の平を当てた。

先ほどとは異なり、彼の手の方が冷たく感じた。すぐに彼の手は離れる。

「熱があるんじゃないんですか？」

春人は心配げな表情をした。

「そうですね？ 五月さんの手が冷たすぎるだけですよ。」

佳子は気を遣われたくなくて、誤魔化そうとした。

春人は自分の額にも手を当てて、体温を確認していた。

「やっぱり、私より熱いですよ。」

私の平熱は六度五分くらいなので、それ以上は絶対にありません。」

意外に高い体温に佳子は驚いた。佳子の平熱はもつと低い。

「そうですね？

でも、あとは電車の中で座って帰るだけですから大丈夫ですよ。」

車はもうすぐ佳子たちが待ち合わせた街に到着しようとしていた。見覚えのある風景が目に入って来ていた。

「佳子さんの家まで送りますよ。」

電車だと途中で歩いたりしなくてはいけないから、大変じゃないですか。」

「五月さんの家とは逆方面ですし、五月さん自身が帰るのが大変になってしまうので、結構ですよ?。」

佳子の家から里まで3時間くらいかかるのだ。

春人が佳子を家まで送って、それから帰宅するとしたら、とんでもない時間を運転することになる。

運転初心者なのに、長時間運転をしてしまったら、疲労の為に注意力散漫になり、事故を起こしてしまうかもしれない。

「でも、放っておけません。」

「五月さんがそこまで気をかける必要はないと思いますよ。お気持ちだけで十分です。」

「佳子さんは長い間療養していて、病気が快復したばかりじゃないですか。」

それなのに、私が連れまわしてしまったために体調を崩させてしまって、そのまま放置して帰ったら、気になって運転どころじゃありません。

この時期の海辺があんなに寒いとは思っていませんでしたよ。本日は、申し訳ないことをしました。」

佳子の3年近くの家出による不在を、一上家では表向きには病気とということにしていた。

そのことを春人は言っていたが、ここまで心配されるとは思ってもみなかった。

「五月さんに会う前に風邪をひいていたんですから、本当に気にする必要はないですよ？」

本当のことを言える状況ではなかったため、訂正はしなかったが、佳子は春人の主張を受け入れなかった。

きちんと今日の不手際を謝ってくれたから、佳子は少し溜飲が下がったため、そこまで彼が自分に対して尽す必要はないと思ったからだ。

「佳子さん、諦めてください。もう決定事項です。」

しかし、春人も負けじと言い返すというか、断言をしてきた。

ここまで強く相手に言い切られて、佳子はこれ以上の抵抗は無駄だと悟った。

春人は強引だ。

そもそも、今日の約束も一方的に取り決められたし、海へ向かったのも春人の独断だった。

きっと佳子がこれ以上何を言っても、話し合いは平行線のまま終わり、結局は運転する春人の思う通りになるだろう。

「分かりました。申し訳ないですが、よろしく願います。」

最終的に佳子が折れた。

それでも結果的には、今回の春人の申し出は正直ありがたかった。このまま座っているだけで、家の前まで連れて行ってくれるのだから、体は楽で消耗を最小限に抑えることができる。

「着くまで寝ていていいですよ。あと、これ。」

そう言いながら、春人は再び信号で止まった時に、自分が着ていた

ブルゾンを脱いで、佳子に渡した。

「どうぞ使ってください。少しでも温かくしてください。」

「ありがとうございます。」

佳子は差し出された上着を受け取る。まだ真新しそうなそれは、佳子も知っている有名なメーカーのロゴが印字されていた。彼の好意を無下にするのも悪いと思い、上半身にかけてさっそく使った。

春人の香りというか、全然馴染みのない異性の匂いがして、否応なしに佳子は彼を男性だと意識せざる得なかった。

なんか、変に緊張する…。

佳子は偽りとはいえ、婚約してしまったのだ。

隣にいるのは、その相手。

こうして優しくされると、何だか急にそわそわとして居心地の悪い気分になった。

こういう状況って、苦手だわ…。

朦朧とした頭からは、この場に適した話題が全く思い浮かばなかった。会話が進みそうもない現状では、春人のお言葉に甘えて佳子は寝ることにした。

目を瞑ると、心地よい揺れもあってか、すぐにうつらうつらとしてきた。

そんな佳子の様子を、春人は盗み見るかのように観察していた。

佳子の体調を案じて、気遣いが浮かんだ春人の眼差しに、目を閉じ

ていた佳子が気付くことはなかった。

佳子は夢を見ていた。

父が運転する車で一緒に外出していた。

助手席には自分が座り、後部座席には母と女中が座っている。

里へと続く山道を通っていて、代わり映えのない緑の景色がガラス越しに映っている。

カーブを通るたびに、遠心力で体が揺られて、振り回される。

自分が子供の頃の記憶で、長時間のドライブに飽きて辟易としていた。

「ねえ、お父様。どうして里では屋敷から出てはいけないの？」

佳子、つまらないなあ。」

「そんなことを言うものではないよ。

あそこの家では、佳子はとても大事なお姫様だから、危ない目に遭わないように大切に守っているんだよ。」

「うちでは普通に外出しているのに、変なの。」

佳子の言い分に父は苦笑しつつも、父はそれでも弁解した。

「里にはうちとは違って色々な人や妖怪がいるから、危ないんだよ。」

「ふーん。」

父の話す内容が、その時は小さかった為によく理解できなかったが、駄々をこねても父が屋敷の外へ連れ出してくれないことを悟り、佳子は愚痴を言うのを諦めた。

しかし、今の佳子は知っている。

父が退屈な佳子を気遣って、「お母様には内緒だよ。」と、夜中にこっそりと屋敷から連れ出してくれるようになったことを。

車の中では、後ろに母がいたために、その時は佳子を諷めることしかできなかったのだ。

分家では、用もないのに気軽に外出をすることを禁じられていた。外遊びは、屋敷の庭でするしかなかった。

父との夜中の散歩は、子供だった佳子には刺激的だった。

父の言う通り、里には色々な妖怪がいて、子供の佳子のために色々と相手をしてくれた。

いつしかこの為に、里への帰省を楽しむようになった。

やがて、佳子たちを乗せた車は、分家の屋敷に着いた。

やっと体を動かせると、佳子は車の中からいち早く降りた。

後部座席から降りた女中が、トランクから荷物を出している。

母に促されて佳子は屋敷に足を向けるが、父の姿が側にないことに気付き、後ろにある車を振り返る。

車内に父がまだ残っていた。

「お父様、どうして降りないの？」

佳子が窓越しに父の姿を伺うと、父は目を瞑って首を傾けて上半身をドアに凭れていた。

良く見ると、頭から血を流している。

佳子は息を飲んだ。

その瞬間、車全体を包み込むように、周りから火の手が上がる。佳子は自分に迫りくる炎の勢いに驚いて、思わず車から身を引いた。

「お父様!!!」

佳子は声の限り叫んだ。

火の海に包まれる最愛の父。

気付いたら、佳子がいるところは分家の屋敷ではなく、森の中だった。

森の木々の間に挟まるように、崖から落ちていた父の乗用車。ガソリンに引火したのか、大きな音と共に車は爆発を起こし、無残な姿へと変えてゆく。

黒い煙が空へと舞いあがっていた。

佳子の目の前で起こる惨劇。

佳子は恐怖のあまり、声も出せなかった。

その時、後ろで狂ったような嗟い声が出た。

佳子が後ろを振り返ると、真っ黒なお面を被った男が一人立っていた。

着ている洋服も全て真っ黒で、頭髪も黒色で、まさしく黒ずくめだった。

彼が全身を使って大声で嗤っている。

更に彼の後ろに大勢の人が立っている。それは佳子が見知った人間たち。

彼らも同様に気が触れたように嗤い続けていた。

耳を覆いたくなるほどの激しい嘲笑が、佳子を襲う。

佳子はその異常なまでの光景に、心の底から震えあがった。

裏切り者。

憎しみが籠った彼らの目には、燃え盛る炎が映っていた。

佳子は悪夢から目覚めた。

心臓が破裂しそうな程、大きく脈打っていた。

呼吸は荒くて苦しく、さらに暑苦しかったため、佳子は思わず着ていた服の胸元に手をやって、大きく開いた。

何度か襟口を動かして空気を入れると、つかの間のことだが、それが体を冷やしてくれた。

燃えるように熱い体は汗まみれだった。

佳子が目を開けて周りを見ると、見慣れた天井が目に入った。

自分のベッドの上で、佳子は横たわっていたのに気付いた。

佳子が身動きすると、額の上から何かが落ちた。

濡れたタオルが置いてあったらしく、顔の横に落ちてきた。

髪の毛が汗で額に張り付いていて、その感触が気持ち悪くて気になったため、鉛のように重い腕を動かして、髪を退かした。そのついでにタオルも拾い、頭上にあるベッドの棚に手を伸ばしてそれを置いた。

一体いつ帰宅して自分の布団に入ったのか、まったく記憶が無かった。

そういえば、夢うつつで誰かに運ばれた気もしないではないが、さっきの夢の印象が強すぎて、記憶が定かではなかった。

家の中はとて静まり返っていた。時を刻む時計の音だけが、室内に鳴り響いていた。

窓から入る光はなく、すでに暗い。

佳子の部屋の照明は、豆電球だけが点いていた。

眼鏡をしていなかったため、壁に掛けられた時計の針は見えなかったが、すでに夜になっているようだった。

春人は佳子を送った後に、自分が目覚めるのを待たずに、きつとすぐに帰ったのだろう。

ここから帰るのに長時間かかるので、明日の通学に備えて長居はできないはずだ。

後で春人に電話をかけて、送ってくれた礼を言うついでに、詳細を訊いてみようと思った。

それにしても、身体が熱かった。

咳の発作が突然起こり、咽るように咳込んだ。

仰向けになったままだと、呼吸が苦しくて、思わず上半身を横にして俯き加減に体を傾けた。

痰の絡みが酷かった。

家にあつた薬を飲まなくては、治るものも治らないだろう。

そう思い、だるい体に鞭を打つように叱咤して、上半身を起こした。自分の姿を見下ろすと、外出していた時の格好のままだった。

汗で濡れて湿っており、肌に張り付いて気持ち悪かったため、起き上がるついでに服を着替えようと思った。

始めにチュニツクを脱ぎ、下に着ていたキャミソールが見えた。それも脱ぐとブラとショーツのみの姿となる。

下着まで汗で濡れて気持ち悪かった。迷うことなく全て脱いだ。

そして、ベッドから降りて、重力に負けそうな体を、気力を奮い立たせて動かす。

目的地はすぐそばのタンスだった。たった少しの距離が、今の佳子にはとても煩わしかった。

深呼吸をしつつ、タンスの引き出しに手を掛けた瞬間、自室の外か

ら人の気配がした。

「だれ？」

驚いて佳子が声を掛けたのと同時に、部屋の引き戸が開いた。

慌てて佳子は両手で身体を隠して、入口に背を向けた。

首だけを向けて確認すると、居間から漏れる明かりを背景に、立っていた人物は予想外にも春人だった。

佳子と目があった春人は、視線を佳子の顔から一瞬だけ下へ向けると、戸が外れそうなほど物凄い勢いで引き戸を閉めた。

「えーと…。」

以前にも同じような目に遭った気がする。

しかも今回は素っ裸ですか！

佳子の顔が燃えるように熱かったのは、きっと風邪だけのせいではないはずだ。

春人と。 7 (前書き)

今回の話に、暴力的なシーンがありますのでご注意ください。

佳子はトレーナーと綿パンというルームウェアに着替えた後に、机の上に置いてあった眼鏡に気付いて掛けると、居間へと顔を出した。そこには春人がいて、珍妙な面持ちで畳の上に正座していた。整った彼の顔に不似合いな白い詰め物が、片方の鼻の穴に差し込まれている。

春人は佳子の姿を捕えるや否や、慌てて土下座をした。

「申し訳ございません。」

決してやましい気持ちがあつたわけではなく、物音がしたので心配になつて様子を見に行つただけなんです。」

ここまで潔く謝られると、佳子は怒る気力がぼろぼろと崩れ落ちるようにならなくなっていった。

もともと熱で怒るだけの体力がないのに加えて、目が覚めるまで待つていてくれた春人に対して感謝の気持ちが芽生えていたからだ。見られたと云つても一瞬だけだったし、前回と同様に事故の様なものだ。それに、怒りというより恥ずかしい感情の方が、占める割合がもともと大きかった。

「あの、土下座は結構ですから、頭を上げてください。」

佳子がそう言うと、恐る恐るといった風体で、春人は面を上げた。鼻の詰め物のせいで、その姿は滑稽に映った。

思わず笑いそうになるのを何とか堪えて、「怒っていませんから。」と付け加えた。

その言葉に春人は安堵した表情を浮かべる。

「その鼻、どうしたんですか？」

「…ちよっと出血してしまったので。」

鼻を手で押さえつつ、気まずそうに春人は答えた。

佳子が居間にある時計を見ると、8時近くを針は指していた。どうやら長い時間、意識を失うように寝ていたようだ。

「あの、色々とお手数おかけして申し訳ございませんでした。もう遅いですし、五月さんは帰られた方がいいですよ？」

今から帰っても春人が自宅に着くのは、11時頃になってしまう。帰路へ向かう彼のこれからの労力を考えると、大変心苦しかった。

「私なら大丈夫ですよ。あの、失礼ながら佳子さんが寝ている間に勝手に電話を使わせてもらって、実家へ遅くなる旨の連絡をしましたので。」

「そうだったんですか。ご家族は心配されていませんか？」

「自分は男ですし、心配無用です。家族とえば、あの、佳子さんは母親と一緒に住まわれているんですよ？」

今日は外出されているんですか？」

里に帰っている母の存在を佳子は思い出した。

母の帰省は、里の中ではそれほど広まっていないらしい。

春人は母の里帰りを知らず、まだ一緒に暮らしていると思っていた。

「いいえ、母は実家に帰っています。当分帰ってきません。」

「それじゃあ、今はお一人で住まわれているんですか？」

「そうです。」

「そうでしたか、それでは体調不良の時は大変ですよね。」

春人は言いながら、正座をしていた足を崩して、立ちあがった。

「佳子さん、何か食べられますか？ 少しでも口に入れて、薬を飲んだ方がいいですよ。」

台所をお借りしてお粥を作ったんです。あと、口当たりの良いものと思つて、ゼリーやスポーツ飲料、リンゴも買っておきました。

風邪薬も無かつたら困ると思つて買ってみたんですが、大丈夫でした？」

「そ、そうなんですか？ わざわざすみません。」

佳子は春人の心尽くしに、感謝を通り越して恐縮した。

「何か食べられますか？」

「はい、せっかくだのでお粥をいただきます。」

重い体を動かして台所へ行こうとしたら、春人に止められた。

「佳子さんは休んでいてください。私が用意しますので。」

「で、でも、」

「辛そうじゃないですか。ベッドで寝て待っていてください。」

「は、はい…。」

春人との何度か目のやり取りで、春人が絶対に折れることがないと悟っていた佳子は、早々に従うことにした。

そもそも遠慮から来る抵抗だったので、風邪ひきの状態では、春人に素直に甘えても罰はあたらなうだろう。

春人は台所へ向かい、佳子は自分の部屋に戻ると、照明から垂れ下がっているひもを何度か引いて全灯に調節した。

ベッドに横になろうとした矢先、何やら屋敷の中で複数の怒鳴り声が聞こえてくる。

「おのれ、またきたな、ろうぜきものめ。」

「台所は俺たちの縄張りなんだぞ。」

「出ていけー!!」

そして、鳴り響く激しい物音と足音。

ガタンガタン。

ゴンゴン。

「ギャー!!」

響き渡る絶叫。

「ヒイ！ やめて！ お助けください！」

泣きながら制止を求める声がした。

一体、何が起こっているのだろう。佳子は胸騒ぎがした。

聞こえてくるのは、屋敷で佳子がいつもお世話になっている妖怪た

ちの声だった。

一人暮らしをするようになって、今まで自分がいない時に、妖怪屋敷と化した我が家に他人を入れたことがなかったので、家に居付いている妖怪たちがどのような反応を起こすのか、全然想像もつかなかった。

佳子の意識がないうちに、家の中を好き勝手に使う春人を、敵だと妖怪たちは見なしてしまったようだ。

自分しか騒ぎを収められる者はいないと思い、よろめきそうになりながらも、壁伝いに歩いて台所に顔を出した。

春人は調理場に立っていて、入口に背を向けていた。

そのため、佳子が台所に来ているのに気付いていないようだった。

何匹かの妖怪が壁に張り付くようにして震えており、台所の中央で一匹だけびくびくと痙攣しながら倒れていた。

それはいつも佳子がよくお世話になっている調理人のシロだった。

「シロ！！！」

佳子は慌てて駆け寄って、シロの元へ膝まずいた。

「よしこさま…。もうしわけございません。こんなありさまでは、ごはんを、つくれません…。」

途切れ途切れに話すシロは、今にも事切れそうだった。

細い腕の先には、愛用しているおたまが握られていた。もう片方の手には、包丁が握られている。

あまりにも物騒な品物に、佳子は一瞬ぎよつとしたが、シロの話す内容の重大さの前では些末なことであった。

「そ、そんな！ シロがいなかったら、誰が私のご飯を作るとい

の!？」

佳子にとっては死活問題だった。

自分で調理すると、何故か食材が消し炭のようになってしまつことが多かった。

佳子の知る限り、妖怪で人間の食べ物を作れるのはシロしかない。

「佳子さん、どうしてここに？」

春人が驚いたように後ろを振り返って、佳子の姿をとらえていた。

「騒ぎがあつたから、心配になつてきてみれば、シロをこのような目に遭わせたのは五月さんなんですか？」

「包丁を持って襲つてきたのは、そいつですよ？」

佳子の非難の視線に、春人はたじろぎながらも弁明をしてきた。

正当防衛だと言いたいのは分かるが、何も瀕死になるまで痛めつけなくてもいいではないか。

「よしこさまに、ふらちなまねまでして…。」

シロが恨めしげに春人を睨みつけながら、聞き捨てならないことを言った。

「不埒な真似？」

思わず訊き返すと、シロは倒れたまま「そうなんです!」と手に持ったおたまを春人へ向けて、一際大きき声を張り上げた。

「いしきのないよしこさまに、あろうことか、こいつは、グハツ！
！」

シロの頭部に、目にも留まらぬ速度で鍋の蓋が飛んできた。ぼろ布を被ったシロの額と思われる部分に、蓋の縁の部分が縦方向にめり込んでいる。

「キヤー、シロー!!」

シロが、ガクリと力尽きた。

叫ぶ佳子の目の前で、糸が消えた操り人形のように、シロの体が支える力を失ってピクリとも動かなくなった。

シロが持っていたおたまと包丁が、手からこぼれてぼとりと床に落ちる。

そして、シロの頭に食い込んでいた鍋の蓋が、落ちて床の上をごろごろと転がり、やがて蓋さえも力尽きたように止まった。

佳子は蓋が飛んできた方向を見ると、春人が顔色悪く立っていた。

「す、すいません、慌ててしまい、持っていた鍋の蓋を、間違えて飛ばしてしまいました。」

「そ、そんな…。」

シロが倒された事実には、佳子は動揺して言葉がうまく紡ぎだせない。思い出すのは、シロと過ごした短かった日々。

舌つたらずな話し方や、大きさが子供くらいで可愛らしく、自分に献身的だったため、比較的目をかけていた妖怪だった。

佳子の目から涙がこぼれた。

「可哀想に…。」

大好きだった台所で、よりによって鍋の蓋で止めを刺されるなんて。

「酷いわ、何も殺さなくてもいいんじゃないですか…。」

佳子は目元を袖で押さえながら、春人を責めた。

「ま、待ってください！ こいつはまだ死んでいませんよ!？」

「まだ消えてないじゃないですか。」と、春人は慌てた様子でしゃがんで膝をつく、床に座り込んでいる佳子のもとへと近づいた。

「え、そうなの？」

僅かな希望の光が見えた佳子は、死んだように動かないシロへと視線を向けた。

「はい、気を失っているだけです。しかし、受けたダメージによりしばらくは使い物にならないかもしれません…。」

「それは困ります。うちではシロしかご飯は作れないんです!」

心苦しそうな表情をした春人を佳子は見詰めた。

そもそも、どうやって慌てたら、凶器のように鍋の蓋が飛ぶと云うのだ。

ああ、これから私のご飯はどうすればよいの…。

「佳子さん、申し訳ございません。それでしたら、私が責任を取ります。」

春人はまた正座をして、佳子に謝罪してきた。
真剣な面持ちをした春人の顔が、差し出す様にずいっと佳子の方へと近づいてきた。

「せ、責任？」

整った顔の春人の勢いに押されて、思わず佳子は身を引きつつ、訊き返した。
春人が何を言わんとしているのか、佳子には皆目見当がつかなかった。

「そうです。佳子さんのご飯は私が作ります。」

「え？」

はっきりと言い切る春人を、佳子は目を点にして見つめた。
間近に迫る顔にある鼻の白い詰め物は、何度見てもとても不似合で滑稽だった。

「この妖怪が佳子さんのご飯を作っていたのなら、私が代わりに用意します。」

「何をおっしゃっているんですか？」

五月さんが毎日のご飯を用意できるわけ無いじゃないですか。」

春人と佳子の家はすごく遠い。

近所ならともかく、車で片道3時間もかかる距離なのに、毎日のご飯を用意するなど無理な話だ。

それに男性の春人が、料理をできるとは思えなかった。

「毎週、佳子さんの家にお邪魔して、一週間分のおかずを作って冷凍保存しておきます。」

佳子さんにはレンジで温めていただく必要はあるかもしれませんが、できる限りのことはいたします。」

「五月さんが毎週来て料理するんですか!？」

とんでもない話に佳子は肝を潰す思いがした。

毎週会おうとしたら、一体どんな出来事に彼のペースによって巻き込まれるのか想像もつかなかった。

今日だけでも、色々と酷い目に遭っていた気がする。

美形は如月だけで十分な気がする。しかも同じ美形でも、スマートで気遣いの行き届き、落ち着いた雰囲気の彼とは違って、春人は色々どこか慣れない感じがして、一生懸命な感じがした。

「そうです。ちょうど婚約しましたし、毎週のようにお会いしても

外聞的には問題ないでしょう。」

しれっと当然のこのように、とんでもないことを話す春人を、この時は信じられない思いで見つめた。

「そ、そんなの、五月さんに負担が大きすぎます！」

確かにシロがこのような目に遭って困りますが、毎週のお休みを私の為に使っていたたくわけにはいきません。」

せつかくの休日なのに、自分の気が休まらなそうだった。

「シロが治るまでの限定的なものですし、大丈夫ですよ。」

ちなみにシロは五月家^{うち}で預かって治療いたします。里には妖怪に詳しい人がいるので、診てもらおうと思います。」

シロのことを想うと、この春人の提案は素晴らしかった。

妖怪とはいえ、きちんと診てもらえるならば、とても有難かった。

「そうですね。専門の方に診ていただけなら、安心ですね。シロの身柄は五月さんへお任せします。」

ですが、パートが休みの日は、私は内職をしなくてはならないので、五月さんに訪問していただいても、なかなかお相手が出来ないんですよ。そちらの方はご遠慮したいんですが。」

もっともらしい理由をつけて、はっきりとお断りしてみた。

今までの経緯を思い出すと、彼がこれしきのこと諦めるとは思えなかったが。

「大丈夫ですよ。お伺いしても家事をしているだけだと思うので、お客様みたいに対応していただかなくても結構です。佳子さんは自

由に過ごしててください。」

案の定、春人は佳子の言い分を物ともしなかった。

「でも、毎週往復6時間は辛くないですか？」

佳子はさらに食い下がる。

「元はと言えば、私のせいでシロが負傷したので、自業自得です。ですから佳子さんが気になさることではありません。シロが治るまでの話ですし、大丈夫ですよ。」

「でも、ガソリン代とかかかって大変じゃないですか。」

佳子はなんとか踏ん張った。

「そうですね、それじゃこうしませんか？」

佳子さんには巻物を作っていたただきたいんです。」

「巻物？ えーと、修行用のですか？」

佳子は浜辺の駐車場での会話を思い出した。

一上家が修行用の巻物を作っていると、春人は言っていた気がした。

「そうです。」

実は、ほとんどの巻物の妖怪は制覇してしまっただけで退屈だったんですよ。

だから、一上家の当主としての実力を思う存分発揮した超難関の敵を作っただけなんです。」

佳子は風邪のために頭がぼうつとして、だんだんと言訳を考えるのが、辛く面倒臭くなってきた。

「そうなんですか…。修行用の巻物を作るのは初めてなので、ルールとか色々とお聞きしなければならいんですが、それでもよろしいんですか？」

「はい、喜んで。楽しみにしていますよ。」

結局、佳子は話し合いで負けた。

心の中で、色々諦め気味にフツとため息をついた。

シロが治るまでの辛抱だから、多少のことには目を瞑ろうと佳子は思った。

「そういえば、シロが最期に言っていた不埒な真似って何だったんですか？」

佳子が話を戻すと、交渉に勝利して機嫌の良さそうだった春人は、一瞬にして具合の悪そうな表情をした。

「覚えていたんですか。」

春人は視線を佳子からずらして、眉間に皺を寄せながら気まずそうに呟いた。

「そもそもシロが話すのを止めさせるために、口封じとして攻撃したんじゃないですか。」

「口封じなんてとんでもない。あれは不幸な事故ですよ。それに…、私は何もしていませんから。」

佳子さんのコートを脱がせただけです。何か誤解になりそうなくとをあの妖怪が口にしようだったので、止めようとしたら、手が滑って持っていた蓋が飛んで行ってしまったんです。

嘘だと思うなら、他の妖怪にも訊いてください。」

「本当なの？」

佳子が真横を向いて、壁際にいる妖怪たちに尋ねると、皆一様に佳子の目の前にいる春人に視線を釘付けにして、恐怖で強張った表情で、がくがくと首が落ちそうなくらい激しく何度も頷いていた。そんな彼らの様子に腑に落ちないものを感じつつも、誰も否定をしなかったので、これ以上の追及はしつこくなつて不愉快なものになると思い、諦めた。

「そうなの…。五月さんには色々とお世話になってますし、とりあえず信じますね。」

「はい、ありがとうございます。」

それでは佳子さんは部屋でお待ちください。」

春人は安心したように頬を緩めると、軽やかな動きで立ち上がり、佳子のために手を差し伸べてくれた。

佳子は少し躊躇った後にその手を取ると、春人によって引き上げられて立ち上がった。

しかし、引っ張られた力が強かったのか、身体がふらついてしまい、勢い余って春人の胸元へ飛び込む様な形で、抱きついてしまった。

「あ、ごめんなさい。」

春人の体に顔をぶつけて眼鏡がずれてしまった佳子は、眼鏡の位置

を直そうと手を添えつつ、慌てて離れようとしたが、それは叶わなかった。

春人にいきなり両手で抱きしめられたからだ。

離れようとした佳子の体が、今度はぎゅうつと頑丈な両腕で捕らわれて春人と密着する。

直に触れ合う身体から、春人の逞しい男性の体つきが感じられて、佳子の胸中が落ち着かなくなってざわめく。

そして、「佳子さん。」と思いつめたように頭上から自分を呼ぶ声。

突然の切なげな声に、佳子の鼓動は跳ね上がった。

「あの！ ゲホゲホ！！」

佳子は驚いて思わず悲鳴に近い声を出してしまったとたん、痰が絡まり咳込んでしまった。

佳子の異変に気付き、慌ててすぐに春人は佳子の体を開放してくれて、遠慮がちに背中をさすってくれた。

彼の優しい手つきに、どこか心の奥で安心を覚える。あまりの咳込み具合に呼吸が苦しかった佳子は、身体をくの字のようにならなうに前かがみになって、自分の口元を押さえた。

「大丈夫ですか？」

体調を気遣い、心配そうな声で春人は尋ねてくる。

「はい、すいません…。」

やっと咳が落ち着いたところで、佳子は荒く呼吸をしながら、何とか答えるのがやっとだった。

苦しみの余り、目には涙が浮いていた。

「さつきは、驚かせてすいません。」

「いえ…。」

どこか落ち着かなさを感じて、佳子は彼の目を見ることができずに、俯いたままだった。

春人が先程抱きついてきたのは、佳子を驚かすためだったのだろうか。

そういう単純な遊び心が理由であって欲しい、佳子はそう思ったかった。

彼が自分に思いを寄せている可能性はゼロに近いが、万が一そういうことがあると、佳子は困るのだ。

今の自分は、誰に対してもときめくつもりはない。無駄に心を揺さぶらないで欲しかった。

妖怪たちはいるが、家の中で男女二人きりなのに、いきなりあんなことをされたら、誰だって変に意識してしまうではないか。

そうでなくても、春人は見とれるくらい綺麗な顔をしているのだから、周りにどんな影響を及ぼすのか、もっと自覚を持って欲しい。

その後、気まずい気持ちで自室に戻った佳子は部屋で大人しくベッドに横になって待っていた。

春人がお粥をお盆に載せて持って来てくれて、それをいただいた後に用意してもらった薬を服用した。

甲斐甲斐しく春人に世話してもらうと、父が生前に風邪をひいた佳子を看病してくれた情景を思い出し、少し鼻の奥がツンとした。

その後、横になると薬が効いたせいか、すぐに寝てしまった。

春人の帰りを見送ることができなかったが、彼は佳子の部屋を出る際に、食器を片づけたら勝手に帰るから気にしないようにと言い残

していた。

目覚めると、月曜の早朝だった。体は昨日より楽になっていたが、熱を測るとまだ微熱があったので、仕方なくパートは休むことにした。

家の中には、寝ている間に春人がとつくに帰っていて、妖怪以外誰もいなくなっていた。

春人が約束通りに連れ帰ったのか、シロの姿も見当たらない。

居間の食卓の側に、佳子が昨日使っていたバッグと、先週忘れて行ったバッグと上着が置いてあった。

バッグの中を見ると、キャッシュカードが入った財布、スケジュール手帳などが記憶通りきちんとバッグに入っていて、何も紛失していないようだった。

これで現金を銀行からいつでも下ろすことができる。特に急ぎでお金が必要ではなかったが、手元に無いのは心許無かった。

彼が居る時の我が家は、何だか落ち着かなくて賑やかなものだったが、逆に居なくなったら静かすぎて、少し寂しい気がした。

晩秋の朝は、そうでなくても冷え込んでいる。

ストーブを点けなくてはと思い、病気の体に鞭打って動きだした。

昨晚は、春人が色々と甘やかしてくれたから、病気の身としては、とても頼りがいがあった嬉しかった。

しかし、あんなに春人が尽してくれたのは、自分のせいで風邪をひかせてしまったと思いきんでいたからだ。

誤解をしてはいけない。あれは、ただのつかの間の優しさなのだ。父がいた頃は、当たり前前に与えられるものだったのに。

無くしてから分かる、大切だったもの。

佳子との貧しい暮らしと、自分の欲望を満たす生活のどちらを取るかと言われた母は、迷わず後者を取った。

母にとって大事なものは、佳子ではなく自分自身だった。

予想していたとは云え、その事實はやはり辛かった。佳子を本当に大事に思ってくれたのは、亡くなった父だけだ。

心に宿る一抹の寂しさは、病気のせいで気が弱くなっているせい。
佳子は枯れ葉舞い散る庭を窓際で眺めつつ、そう考えることにした。

春人と。 8 (後書き)

次は慶三郎の出番です。

春人の帰宅（前書き）

慶三郎視点です。

Rなおまげが後書きにあります。
興味のない方はスルーしてください。

春人の帰宅

春人が一上佳子の家から長時間かけて帰宅してきた。

いつものこの時間帯なら、とつくに消灯している玄関の明かりは点けっぱなしにしておいて、春人の帰りを待ち構えていた。

既に就寝している家族を起こさないように気遣ってか、静かに鍵を解錠して玄関の戸を開ける音が響いてきた。

すぐそばにある居間から、義兄の慶三郎は玄関の方へと顔を出した。昨日買ったばかりの上着を着込んでいた春人の姿が見えた。

「春人、御苦労様。」

静まり返った家の中だったので、慶三郎は自然に小声で話した。

慶三郎の格好は、いつでも寝られるような寝間着姿だった。

「待っていてくれたんですか、すみません。」

お辞儀をしながら、春人も同じように小声で返事をした。

「指示しておいて、先に寝るわけにはいかないだろう？」

一上家の内情を探れと命令を密かに春人に下していた慶三郎は、今回は上司として部下の春人の帰りを待っていたのだ。

春人は開けた時と同じように静かに玄関の戸を閉めると、靴を脱いで上がり、上着を脱ぎながら手を洗いに行った。

慶三郎が居間のソファに座って待っていると、上着を手にした春人がやってきた。

小さな音でテレビの電源がついていたのを、慶三郎がリモコンで消

した。

「さて、さっそくだが、簡単にどうなったか聞かせてもらおうか？」

「はい。」

居間にある食卓の側に正座した春人は、簡潔に今日の出来事を報告する。

「婚約しただと？」

「思い切ったことをしたな。」

慶三郎はほくそ笑んだ。

恐らくやり過ぎだと、咎められる覚悟をしていたのだろう。春人は肩すかしを食らったように、意外そうな表情を見せた。

「お前が進んで他人に関与するのが珍しいと思つてな。」

「良くも悪くも、何事も経験だ。ただし、深入りするなよ。ミイラ取りがミイラになるぞ。」

慶三郎はそう言って、片方の眉だけ上げて目配せした。

それに対して、春人は神妙な面持ちで、無言のまま頷く。

「まあ、この婚約の話も二木の耳に入れば、あっという間に里中に知れ渡るだろうな。」

二木の当主だけでなく、当主以外の妹たちは一様におしゃべりが大好きな人たちだった。

仲人の喜美子に婚約したことを報告すれば、慶三郎たちが大して労せずとも、この話は瞬時に広がって一上家の分家の耳にも入るだろ

う。

一体、彼らがどういう動きをしてくるのか、見物である。

「それにしても、佳子かのじよも思い切ったことをしたもんだ。

まあ、あの分家とは俺も関わりたくないが、慣わしを破ってまで何故分家との結婚を嫌がるのか、理由を聞いてみたいものだ。」

「そうですね。そのうち訊いてみます。」

「無理するなよ。意図してあれこれ質問をすると、勘付かれる。」

「はい、気をつけます。」

「それで、連れ帰ってきた妖怪はどうするんだ？」

「今は車のトランクに札で封じた状態で入れたままです。明日、学校から帰ってきたら、曾我さんの所へ連れて行きます。」

しばらくそこで看てもらおう予定です。」

曾我は30歳過ぎの独身男性で、役場に勤めながら、趣味で妖怪の研究をしている人だった。

趣味に没頭しすぎて、他のことにあまり興味のない彼と春人は、似たような気質でウマがあっただのか、たまに連るんで出かけているようだった。

「ふーん、うまいこと言って、彼女に取り入ったな。」

まあ、今日はもう遅いし、早く風呂に入って休んでくれ。」

「はい、そうします。」

慶三郎はソファから立ち上がると、背伸びをして居間から出て行った。寝るために2階にある自室へと向うため、床板を軋ませながら階段を上る。部屋では、妻の夕輝と娘の陽菜が布団を並べて既に就寝していた。慶三郎の分の布団も並べて敷いてある。そこにすぐに入って横になった。

先週の出来事だが、佳子が忘れ物をしたというバッグの中身を検分した時に、スケジュール帳が入っていたのには注目した。

勝手に女性の手帳を調べることに春人は躊躇していたが、慶三郎は置き忘れる方が悪いと言って、太々しくも手帳を手にとって開いてみた。

手帳は見開きのカレンダーの欄から始まり、最初の一月には何も書かれていなかった。

次々と頁をめくっていくと、5月頃から記入され始めていた。7月からは働き始めたのか、出勤日らしいメモが記されている。あと、たまに予定があることを分かるように簡潔にメモがあった。

とても綺麗で読みやすい字で書かれていた。佳子は字が上手のようだ。

「この月の絵のマークは何でしょうか？」

毎月一つしかないですね。」

「お前アホか？」

愚問を口にした春人に思いつきり呆れて、慶三郎はつい毒づいてしまった。

春人は言われた理由がまるで分かっていないのか、きよとんとした間抜け面をしていた。

「女の子なんだから、生理の日に決まっているだろう。」

察しの悪い愚弟のために、慶三郎がわざわざ丁寧に教えてやると、目に見えて春人の顔が赤く染まった。耳たぶまで赤くなっている。中学生のような反応だった。そんな春人の反応が面白くなって、調子に乗って他の月の生理日もチェックしてみる。

「へえ、彼女はしつかり毎月くるタイプなんだな。」

お前、危険日って知っているか？ 生理が来る2週間前に排卵するから、その付近がやばいんだ。

逆に安全日はな、生理が来る直前頃で、えーと、彼女の場合、今月はこの日あたりが狙い目らしいな。」

ついでに女の子の体の事情も説明しながら、カレンダーの日付を指差して教えてやると、春人は顔を真っ赤にしながら慌てていた。今どきの高校三年生とは思えない純情ぶりだ。

「な、何言っているんですか！」

そんな調査と全然関係ないところまでチェックしたら失礼ですよ。」

春人の真面目っぷりには、頭が下がる。

春人の反応は十分楽しめたし、これ以上からかったら話が逸れ過ぎる思い、もう止めることにした。

「はいはい、お前もこれしきのこと動揺しない。」

それにしても、何で年の途中から書き始めているんだろうな。普通、1月から書くよな？」

「病気のせいで書けなかったんでしょうか？」

「うーん、怪我をして手が使えないならともかく、手帳くらいは病気の時でも使うんじゃないか？」

まあ、それは本人しか分からないことだな…。」

一上高志が“家出”と佳子の件で口にしていたと、春人から報告を受けたのは記憶に残っている。

当主の長期の不在は、病気の療養ではなく、家出をしていたせいだったのかもしれない。

佳子は家出から帰って来てから、手帳を使用し始めた などと色々推測できるが、根拠となるものがない以上、結論が出ないのでこれ以上は考えるのを放棄した。

「あと、これを見る。こつちには使った金額が書かれている。手帳を家計簿代わりに使っていたんだな。」

一週間の見開きページには、8月頃からその日に使ったと思われる金額が書かれていた。

その出費額を見ると、慎ましい生活を送っていることが分かる。

また、たまに人の名前が書かれていた。

春人とのお見合いの日には、“五月”という文字と、待ち合わせ場所のホテルの名前と時間が記されている。

会う予定のある人の名前と、約束した日時と場所を忘れないようにメモしているらしい。

これより先の日付には、“如月、しんご”と名前が書かれていて、お店のような名前と時間が書いてあった。

「点で区切つてあるということは、“如月”と“しんご”という二人の人物に会うということか。しかも、“しんご”とあるが、何故

これだけひらがなで書いて、名字ではなく下の名前なんだろう。」

佳子は会う予定の人物の名前を“しんご”以外、全て名字で書いている。

何かが引つ掛かった。

「呼び捨てで呼び合う仲なのでは？」

「そこまで親しかったら、名前の漢字も知っているだろう？」

「親しくない人物ということですか。」

知っていたら、多分佳子は手帳に漢字で書いていたはずだ。

男の名前で“しんご”という名前がもとからひらがなののは、ほとんどないはず。

しかも、名字を書いてないということは、下の名前しか知らないのだろうか。

通常、名字は知っていても、下の名前は知らないということが多い気がするが。

「もしくは、同じ名字の人物が多くて、下の名前ではないと誰か分からない状態なのか？」

春人はその言葉に反応して、無言で軽く頷いた。

佐藤や鈴木などよくある名前の人が、同じ環境に二人くらいいることもあるだろう。

そう云った状況はよくあることかもしれない。

しかし、佳子の場合は、背後に分家という存在がある。分家は、ほとんどが一上姓を名乗っている。

もし、彼女が会う人が分家の人間ならば、名字ではなく名前を記すのは筋が通る。

「面白くなってきたな。誰と会うのか、ちょっと店の名前を調べて見張ってみるか。」

表では分家と対立する様な真似をしていて、わざわざ陰で分家の人間と会うのも怪しい。

もし、分家の人間と会うのならば、どんな人物と接触するのか、興味が出てきた。

慶三郎はお店の名前から該当する店舗を調べ出して、電話で日時の確認をするふりをして、予約客の確認を取ってみた。そして、如月という名前で同一時刻に予約を取っていたお店を突き止めた。

彼女の友好関係を少し調べてみるのも、捜査の幅が増えるきっかけとなるかもしれない。

春人とのお見合い当日に、最後に現れて佳子を攫った男が乗っていた車の登記情報を調べてみたところ、意外な事実が発覚したのだ。車の所有者の名義は、“鬼頭 克”という人物だった。株式を上場している企業をいくつも傘下に治めた親会社の会長の名前だ。

様々な分野に進出して、手広くやっているグループ企業の代表。

まさか高齢の会長本人がやってきたとは思えないので、その大物から車を借りたのかもしれないが、そんな人物とつながりがある男と佳子が交友していたとは驚きだった。

そのあたりの裏事情も分かれば、ますます面白い。

まだ一上家の分家を探るには、程遠い情報量だが、春人が自ら進ん

で人と関って得ようとしている姿を見て、大変進歩していると感じた。

目的は調査という指令のためで、全くプライベートではないが、それでも人と触れ合ってやり取りを学ぶことは、現在の春人にとって必要なスキルになるからだ。

今回も佳子から本心を聞き出し、交渉の末に偽装の婚約話まで持ちかけたのだから、大したものだ。

五月家の人間が一上家の本家を訪れたのは初めてのことだ。しかも今後も足を運ぶ口実を作って、お邪魔する約束を取り付けたようだ。彼女の家は、泥棒にでもあったかのように凄まじく散らかっていたらしいが、その方が色々触って調べても、気付かれにくいから都合だと春人は言っていた。

なかなか春人も諜報員として、やるようになったものだ。

春人が五月家に来たのは、彼が5歳の時だった。

慶三郎と春人とは年が一回り近く離れていたもので、ちょうど自分が思春期に入る頃に、親の目が春人へ集中したのは、自分にとっては大変有難かった。思春期特有の反抗期の、親の干渉が疎ましく感じる時期だったからだ。

初めて会った時の春人は、子供のくせに死んだような暗い目をしていた。

常に怯えたように人の顔を伺い、手が頭の上に近づいただけで、反射的に顔と身体を強張らせていた。

こちらが話しかけるまで何も話さず、子供らしいところがまるでなかった。

亡くなった母が、それはそれは優しく接して甘やかせてやり、ずいぶん時間をかけて信頼関係を築いていった。

そのおかげで母に良く懐き、家の中では何処に行くにも後をくっついていた。そのうち母以外の家族にも慣れてくるようになった。そうなる、不思議と可愛くなるもので、慶三郎も目を掛けてやるようになった。

そうして、だんだんと春人が色々な感情を露わにするようになると、今度は興奮した時の痲癩が酷かった。

今まで理不尽な形で押さえつけられていた感情が、色々な形で出されるようになったため、急にうまくは制御できないものなのだと、母が言っていた。

しかし、そうは言っても現実の被害は目を覆わんばかりのものだった。

春人の特殊能力は身体的強化だった。通常の大人よりも破壊力を持つ腕力や脚力を持ち合わせていて、感情のままに振り回して、家中のあちこちを破壊し尽くした。

感情の嵐が去った後に、本人は後悔して酷く塞ぎこみ、それを母が慰めるといふパターンを繰り返していた。

慶三郎は悪魔のような子供が来たと最初は思っていたが、本人が一番可哀想なのだと母は言っていて、決して見捨てたり突き放したりしなかった。

そのうち、母が言うように春人が感情の折り合いを訓練してつけられるようになってくると、野生の猛獣のような子供が人間らしくなってきた。問題を起こすことが少なくなってきた。

学校での春人は、小学校では上手くいっていなかったようだった。家族には慣れ始めていた春人だったが、入学当時は同級生にもビクついていて、すぐに泣きだすような弱虫だったからだ。

苛めというより、おもちゃにされていて、よくからかわれては泣かされて学校から帰って来ていた。

そのうち、春人は意地悪な奴らから自分の能力を活かして逃げるところを覚えて、あまり構われないように接触自体を避けるようになっていたようだった。ほとんどの子供は家の外で駆けまわっているのに、春人は友達と遊ばず、家の中や道場にしか顔を出していなかった。

中学校に上がると、今ののような性格にほとんど出来上がっていた。ちょうどその頃、母が不調を訴えたので病院で検査したところ、末期の癌であることが発覚した。

それから坂道を下るように、急速に病状は悪化して、亡くなってしまった。苦しむ期間が短かったのが、せめてもの救いだった。

そんな母が最期まで春人のことを気に掛けていた。

今の春人は大げさに言うと、自分の世界に閉じこもって、人間関係の余計なストレスを受けないように自己保身に走っているように見えた。

友達と言っても、道場に通っている同級生数人だけで、人間関係はほとんど築かれていない。

他人と接しなければ、確かに煩わしいことから逃れられることが出来るだろうが、それ以上に大事なことを得ることが出来ない。

慶三郎は春人を何とか変えたいと思っていたが、それは本人が望まない限りどうしようもない事だった。

今回、佳子によって偶然にも春人に白羽の矢が射られ、それを利用して彼を一上家の調査に駆り出したが、面白い方向に話が進んで行って、今後の報告が楽しみだった。

偽装とはいえ、一上家と婚約したことに親父は良い顔をしないだろうが、事情を説明して説得するつもりだった。

そういえば、先週くらいから、春人を目当てに従兄妹の里香が五月家に遊びにくるようになり、親父が面白がってお節介を焼き、二人

をくつつけようとしているようだった。

里香は親父の義妹の子供だった。

親父は後継ぎとして五月家の養子となったが、そもそも五月家の実子として里香の母がいて、大橋家に嫁いだのだ。

最近できたアウトレットパークに行きたいと里香が言い出し、それを聞いていた親父が調子に乗って、「それなら春人が車を出せばいい。ついでにこずかいあげるから上着でも買ってこい」と口添えして、全く乗り気でない春人を頷かせていた。

春人は親父には柔順で決して逆らわない。思春期であるにも関わらず、春人の反抗的な態度を慶三郎は今まで見たことがなかった。

親父もそれを分かっていて、言っているから人が悪い。

しかし、そのくらいのことをしないと、春人はいつまでも変わらぬのは理解できた。

里香は明るくて愛想のいい可愛い娘だ。

挨拶もきちんとしてくれる。

無愛想な春人にはお似合いかもしれないと、親父はいたく気に入っていた。

春人は相変わらず彼女にも無関心で相手にしていないが、それにもめげずに里香は積極的に話しかけていた。

あのくらいしつこくないと、春人は落とせないかもしれない。

昨日の春人は、親父の言いつけどおり里香と出かけたようだった。

日が暮れる前に帰ってきたが、嫌なことが蓄積していたのか、また春人は家の裏の雑木林で暴れていた。

所構わず癩癩を起こすことは無くなったものの、我慢できない怒りやストレスを何かしらにぶつけて発散するのは昔と変わらなかった。それでも自分で被害の少ない場所を選ぶようになったのは、大きな進歩だ。

生えている樹木に、春人は素手や足で殴りつけたり蹴りつけたりし

て、根元の幹からへし折って倒していた。

以前、春人が雑木林を風通し良くしたのは、高校へ入学した頃だった。それ以降、波風の立たない生活を送っていたのに、最近では慶三郎が無理矢理参加させた奉納試合で優勝して注目されるようになったせいも、ストレスの溜まることが多くなったようだ。

うちの雑木林が、そのうち丸坊主にされなければいいが。ちなみに倒された木々は、近所の人が薪に使うと有難そうに言っ、トラックに積んで持って帰って行った。

慶三郎がごろりと寝返りをうつと、その向いた側にはすぐ隣に妻の夕輝がいて、寝ている姿が見えた。

目を瞑って静かに眠っている。

そう思っていたら、夕輝の目が開いて、見つめていた慶三郎と視線があつた。

「起きていたのか？」

慶三郎が密やかに話しかけると、夕輝は首を横に振った。

「慶三郎様が入らした時に、たまたま眠りが浅くて、起きたのです。」

「そうか。」

「眠れませんか？」

「考え事をしていて、頭が冴えてしまったよ。」

そう苦笑しながら答えると、慶三郎の布団の中へと夕輝が体を動かして入ってきた。

慶三郎の足に自分のそれを摺り寄せてきた。

布団で温まっていた夕輝の足は、冷たくなっていた慶三郎の足に熱を与えてくれる。擦れ合う彼女の足の肌は、とても滑らかで、気持ち良かった。

「足先を温めると、寝つきが良くなりますよ。」

慶三郎は自分を気遣って優しげな表情を浮かべる夕輝を見つめて、幸せを感じた。

慶三郎は夕輝を抱きしめて、彼女の髪に顔を埋める。

自分と同じ洗髪剤を使っているはずなのに、彼女からは自分とは違った不思議と良い匂いがした。

それに心が落ち着くのを覚えながら、慶三郎は目を閉じた。

春人の帰宅（後書き）

おまけ（R15）

「あの…。」

戸惑ったような声を夕輝が上げる。
慶三郎の手は、夕輝の服の裾から入り込んで、素肌を撫でていたからだ。

それは徐々に上に移動すると、狙いを定めて彼女の敏感な胸元の膨らみへと移動する。

「だ、駄目です、慶三郎様。」

「大きな声を出したら、陽菜が起きるよ。」

くすくすと笑いながら、耳元で囁いて夕輝の耳たぶを甘噛みすると彼女は声を堪えて肩を小刻みに震わせた。

離れようと手で慶三郎の胸を押ししてくるが、彼女の耳を形に沿って舌でなぞると、「んっ…。」と可愛い息を漏らして、手に籠めていた力が抜けたようだった。

「夕輝が悪い。可愛いことをするから。」

「そ、そんな…。」

慶三郎を困ったような表情をして見るその瞳もそそるものがある。
本当に困った妻だ。

慶三郎は、今日もまた夕輝と夜の時間を楽しむのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4796w/>

そのお見合いは、危険です。

2011年10月28日12時04分発行